

平成24年度

自己点検・評価報告書

教育活動



京都大学大学院
情報学研究科

情報学研究科 自己点検・評価に向けて

スマートフォンの普及に伴い、情報通信を取り巻く環境は、さらに変貌の加速度を増しつつあるように思われる。特筆すべきは音声認識が実用段階に入ったことで、実時間の翻訳サービスなどの「未来の技術」と思われていたさまざまなサービスが現実のものとなってきた。これらは、クラウドコンピューティングとビッグデータという先端的技術が、早くも実社会に大きな影響を及ぼす段階に至ったことを如実に示している。情報学という学術領域は、この例が示すように急激に発展する途上の科学技術を対象とすることが最大の特徴である。学術行政の分野においても、文部科学省の科学研究費補助金の分類が10年ぶりに大改訂され、情報学が従来の「分科」から工学などと並ぶ「分野」に格上げされ、その下に「情報学フロンティア」という分科が設けられたことは象徴的である。

その反面、利便性の向上に伴い巨大化・複雑化した故に情報システムは脆弱性も露呈することとなった。情報システムの故障によって生ずる社会の混乱は計り知れないほど大きい。インターネットなどでの詐欺行為、誹謗中傷、不正アクセス、スパムメール、コンピュータウイルスによるシステム破壊、さらには人間疎外による心の病気や犯罪、倫理の荒廃など、情報革命の影の部分も顕在化してきている。

情報に関する学術領域は、認知科学、生命・生物学、言語学、計算機科学、数理科学、システム科学、集積回路工学および通信工学的な側面をもっている。1998年（平成10年）4月、京都大学は、これらの情報に関する学問体系の単なる高度化としてではなく、総合的な視野から先駆的・独創的な学際的な学術研究を推進し、視野の広い優れた人材を多数養成することを目的として、情報学研究科を設置した。情報科学あるいは情報工学ではなく「情報学」と称しているのは、情報技術が社会に与える計り知れない影響を考慮し、人文社会科学など社会や人間のさまざまな問題を扱う多様な領域を取り込み、裾野の広い学際領域の教育研究を目指したからである。今日でこそ情報学という言葉は市民権を得るようになったが、本研究科はそのさきがけとして、この発展途上の学術領域を体系化する責務を負う。

これからの情報学に期待されるものは、情報学の基礎理論や個別要素技術の深化はもちろんのことではあるが、大規模情報システムの構築・運用とりわけ脆弱性克服技術、安心安全な情報社会の制度設計と情報技術支援、人間により優しいユビキタス環境と種々のアプリケーション構築の研究開発など、現在の情報革命を真に実りあるものとする、より人間・社会指向のシステムの構築に向けての教育研究であろう。

本研究科では知能情報学専攻、社会情報学専攻、複雑系科学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻の6専攻を設置し、人間と社会とのインターフェイス、数理的モデリング、および情報システムを3本柱として、上記の期待に応えるべく教育研究を推進し、また専攻間の連携を進め、より広い領域の研究教育を進めてきた。最近の例としては、デザイン学大学院連携プログラムの開始が挙げられる。これは情報学研究科を中心とし、工学研究科、教育学研究科、経営管理大学院や京都市立芸術大学および京都市や多数の企業などと連携し、修士課程と博士課程を連結して、個別の専門領域に加えて広く社会をデザインする能力を兼ね備えた「十字型人材」の育成を目指す教育プログラムである。

おりしも文部科学省では全国の国立大学のミッション再定義を進めている。本学も全学共通教育の大幅な見直しや、教育研究組織の改革再編といった、大学の歴史の中でも特筆に値する大きな変革の途上にある。この時期に研究科の教育、研究の制度やその成果を客観的に振り返ることは大きな意義を有する。本自己点検評価書を、情報学研究科の今後の10年を展望した、新たな発展の第一歩としたい。

平成25年3月

京都大学大学院情報学研究科長 佐藤 亨

目次

第1章	情報学研究科における目的	
1.1	研究科の目的が明確に定められ、学校教育法第99条に規定された大学院一般に 求められる目的に適合しているか	1
第2章	教育研究組織	
2.1	教養教育の体制が適切に整備されているか	2
2.2	研究科及びその専攻の構成が、大学院課程における教育研究の目的を達成する上で 適切なものとなっているか	2
2.3	教授会等が、教育活動に係る重要事項を審議するための必要な活動を行っているか。 また、教育課程や教育方法等を検討する教務委員会等の組織が、適切に構成されており、 必要な活動を行っているか	3
第3章	教員及び教育支援者	
3.1	教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編制がなされているか	4
3.2	教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか	4
3.3	教員組織の活動をより活性化するための適切な措置が講じられているか	5
3.4	教員の採用基準や昇格基準が明確かつ適切に定められ適切に運用がなされているか	5
3.5	教員の教育及び研究活動に関する評価が継続的に行われているか。 その結果把握された事項に対して適切な取組がなされているか	6
3.6	教育支援者が適切に配置され、教育補助者の活用が図られているか	6
第4章	学生の受入	
4.1	入学者受入方針が明確に定められているか	8
4.2	入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか	8
4.3	入学者選抜が適切な実施体制により公正に実施されているか	9
4.4	入学者受入方針に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が 行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てているか	9
4.5	実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか	10
第5章	教育内容及び方法	
5.1	教育課程の編成・実施方針が明確に定められているか	11
5.2	教育課程の編成・実施方針に基づいて、教育課程が体系的に編成されており、その内容、 水準が授与される学位名において適切なものになっているか	11
5.3	教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、 学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか	12
5.4	講義、演習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、 教育内容に応じた学習指導法が採用されているか	12
5.5	単位の実質化への配慮がなされているか	13
5.6	適切なシラバスが作成され、活用されているか	13
5.7	研究指導、学位論文に係る指導の体制が整備され、適切な計画に基づいて 指導が行われているか	13
5.8	学位授与方針が明確に定められているか	14
5.9	成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、 成績評価、単位認定が適切に実施されているか	14
5.10	成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか	15
5.11	学位授与方針に従って、学位論文に係る評価基準が組織として策定され、学生に周知されて おり、適切な審査体制の下で、修了認定が適正に実施されているか	15
第6章	学習成果	
6.1	修了時等において学生が身に付けるべき、知識・技能・態度等について学習成果が 上がっているか	16
6.2	学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、 学習成果が上がっているか	17

- 6.3 就職や進学といった修了後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果が上がっているか … 17
- 6.4 修了生や、就職先等の関係者からの意見聴取の結果から判断して、学習成果が上がっているか … 18

第7章 施設・設備及び学生支援

- 7.1 教育研究活動を展開する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか。
施設・設備における耐震化、バリアフリー化、安全・防犯面について、配慮がなされているか … 20
- 7.2 教育研究活動を展開する上で必要な ICT 環境が整備され、有効に活用されているか … 20
- 7.3 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか … 21
- 7.4 授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか … 21
- 7.5 学習支援に関する学生のニーズが把握され、学習相談、助言、支援が行われているか。
特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援が行われているか … 22
- 7.6 学生の部活動や自治会活動等の課外活動が円滑に行われるよう支援が適切に行われているか … 22
- 7.7 生活支援等に関する学生のニーズが把握され、相談・助言体制が整備され、適切に行われているか。
特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への生活支援等が行われているか … 23
- 7.8 学生に対する経済面の援助が適切に行われているか … 23

第8章 教育の内部質保証システム

- 8.1 教育の取組状況や学生が身に付けた学習成果について自己点検・評価し、教育の質を保証するとともに、教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか … 24
- 8.2 研究科構成員の意見聴取が行われており、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか … 24
- 8.3 学外関係者の意見が、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか … 24
- 8.4 ファカルティ・ディベロップメントが適切な方法で実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか … 25
- 8.5 教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質の向上を図るための研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。 … 26

第9章 財政基盤及び管理運営

- 9.1 管理運営のための組織及び事務組織が、適切な規模と機能を持っているか。
危機管理等に係る体制が整備されているか … 27
- 9.2 研究科の構成員等の管理運営に関する意見やニーズが把握され、適切な形で管理運営に反映されているか … 27
- 9.3 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、管理運営に関わる職員の資質の向上のための取組が組織的に行われているか … 28
- 9.4 研究科の活動の総合的な状況について、根拠となる資料やデータ等に基づいて、自己点検・評価が行われているか … 29
- 9.5 研究科の活動状況について、外部者による評価が行われているか … 29
- 9.6 評価結果がフィードバックされ、改善のための取組が行われているか … 30

第10章 教育情報等の公表

- 10.1 研究科の目的が、適切に公表されるとともに、構成員に周知されているか … 31
- 10.2 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されているか … 31
- 10.3 教育研究活動等についての情報が公表されているか … 32

付録 資料集

- A.1 情報学研究科の教育に関する各種データ
- A.2 専攻ごとのアドミッション・ポリシーと大学院入試（平成24年度）
- A.3 教育改善のための取り組み事例（平成19年度～平成24年度）
- A.4 学生に対するカリキュラムアンケート
- A.5 修了生アンケート
- A.6 企業人事担当者アンケート

第1章 情報学研究科における教育と人材育成の目的

1.1 研究科の目的が明確に定められ、学校教育法第99条に規定された大学院一般に求められる目的に適合しているか。(観点1-1-②)

【情報学研究科の状況】

研究科ウェブサイトにおける研究科長挨拶には「情報学研究科は、人間と社会とのインタフェース、数理的モデリング、および情報システムを3本柱として創設され、情報学の新たな学問領域を開拓し、総合的な視野から先駆的・独創的な学術研究を推進することで、情報学の国際的研究拠点としての役割を果たすことを目指している。また、高度な研究能力と豊かな学識を涵養することで、情報学を発展させる研究者、および、質の高い専門的職業人を養成し、知識社会のさまざまな課題を解決するリーダーとなる視野の広い優れた人材を育成することを教育の目的としている。さらに、産官学連携・地域連携や社会への情報発信を通して、健全で調和の取れた知識社会の発展に寄与し、京都大学の基本理念である『地球社会の調和ある共存』に貢献する事が情報学研究科の大きな目標である。」と記されている。このことから、情報学研究科の目的は学校教育法第99条に規定された大学院一般に求められる目的に適合している。

【分析結果とその根拠理由】

これらのことから、情報学研究科の目的が、学校教育法第99条に規定された、大学院一般に求められる目的に適合していると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）教育研究上の目的

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/introduction/admission.html>

（データ名）6専攻の目的（出典）内部資料

（データ名）6専攻の理念（出典）内部資料

第2章 教育研究組織

2.1 教養教育の体制が適切に整備されているか。(観点2-1-②)

【情報学研究科の状況】

独立大学院である情報学研究科には文系、理系を問わず、他大学からも多数の学生を受け入れている。このために情報学に関する基礎教育が十分になされていない学生に対して研究科共通科目（一部は教育改革実施科目）として多くの講義および演習を提供してきた。具体的には5種類の情報学展望および4種類の計算科学に関する講義・演習、さらには情報分析・管理論、メディア情報処理論、情報と知財、情報と教育、イノベーションマネジメント基礎などである。これらの科目に関しては学部で情報教育を学ばなかった者だけでなく、多数の修士課程の学生が受講している。平成23年度の履修者を調べたところ、50名以上の学生が受講していた科目が7科目あり、中には受講者が100名を超える科目もあった。

一部の科目は「京都大学 研究科横断型教育プログラム」として全学に提供されている。

【分析結果とその根拠理由】

14の研究科共通科目を含む、17科目を情報学研究科における教養教育のための科目として提供しており、資料のように多数の学生が履修している。このように、本学の教養教育の体制は適切に整備されており、機能していると判断できる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）研究科共通科目

（出典）大学院学修要覧

2.2 研究科及びその専攻の構成が、大学院課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。(観点2-1-③)

【情報学研究科の状況】

情報学研究科は、人間と社会とのインターフェイス、数理的モデリング、および情報システムを3本柱とし、情報学を創生・発展させ、総合的な視野から先駆的・独創的な学術研究を推進することにより、情報学の国際的研究拠点、産官学連携・地域連携拠点としての役割を果たすことを目指している。このため、知能情報学専攻、社会情報学専攻、複雑系科学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻の6専攻を置き、多数の協力講座、連携ユニットを擁して多様な教育研究活動を行っている。また、情報化社会のさまざまな課題を解決するリーダーとなる視野の広い優れた人材を育成するため、専攻ごとに特徴を持たせながらもバランスのよい講座構成になっている。この結果、柔軟な教育と高度な研究を遂行し、教育に反映することが可能となっている。さらに、けいはんな地区に存在する研究所群と、近隣の京都大学大学院情報学研究科、大阪大学大学院情報科学研究科、および奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科が連携協力し、いわゆる情報通信（ICT）分野において、一層高度な人材養成を図っている。

【分析結果とその根拠理由】

情報学研究科は学内各部局の協力によって平成10年に設立された。それぞれの専攻の教育研究の目的は情報学研究科が目指す情報学の多様な方向性を反映しているといえる。これらのことから、専攻の構成が、教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっていると判断する。しかし、専攻単位ではバランスよい構成になっていても、比較的近い研究テーマの研究室が別々に専攻に配置されている場合には、大学院入試の際に専攻をまたがった志望を可能にするような改善を検討する必要がある。専攻に属する基幹分野数で5から9の偏りがあり、研究科の運営面上は専攻の大きさの調整もまた検討すべき課題である。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）○情報学広報 ○大学院入試志望区分案内 ○教員組織配置表

（出典）

2.3 教授会等が、教育活動に係る重要事項を審議するための必要な活動を行っているか。また、教育課程や教育方法等を検討する教務委員会等の組織が、適切に構成されており、必要な活動を行っているか。(観点2-2-①)

【情報学研究科の状況】

●研究科長、副研究科長および各専攻の専攻長、事務長等からなる専攻長会議、基幹講座、協力講座担当教授および事務長等から構成される研究科会議、基幹講座担当教授および事務長等から構成される教授会において教育活動に係る重要事項を審議している。学位認定などの教育活動に係る重要事項については研究科会議で審議している。その他の教育活動に係る事項については内容に応じて教務委員会、専攻長会議、教授会、あるいはそのうちの複数の会議で審議している。平成24年度は、教授会は11回、研究科会議は6回、専攻長会議は15回開催されている。

●各専攻から1名の委員と全学教育システム委員、教育制度委員会委員、教務担当事務職員、事務長、研究科長からなる教務委員会を設置し、大学院入試の実施、修士及び博士後期課程のカリキュラム編成と運営等、日本学生支援機構による奨学生関連業務など幅広い実務を行っている。平成24年度は11回の定例教務委員会において教育課程や教育方法等を実質的に検討している。

【分析結果とその根拠理由】

●これらのことから、教育活動を展開する上で必要な実施体制が整備され、機能していると判断される。

●これらのことから、教育方法等を検討する組織が、適切な構成となっており、教育課程や教育方法等を実質的に検討しているといえる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）○専攻長会議議事録 ○研究科会議、教授会議事録

○教務委員会議事録

（出典）内部資料

第3章 教員及び教育支援者

3.1 教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制が確保され、教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編制がなされているか。(観点3-1-①)

【情報学研究科の状況】

平成19年4月より、教授・准教授・講師・助教からなる新しい教員組織へ移行した。具体的には、若手研究者が能力を発揮できる環境の整備の観点から、従来の大講座制に運用面での工夫を加え、教員相互の独立性や研究分野の多様性を確保しつつ、ゆるやかな研究指導補佐を許容する教授・准教授・(新)講師・助教からなる新しい大講座制への移行を検討している。また本研究科には協力講座(12分野)および連携ユニット(5分野)を設置している。協力講座の教授は研究科会議の構成員であり、授業および学生の研究指導を担当している。情報学研究科では研究科長と副研究科長からなる執行部を作り、教授会において定められた事項および情報学研究科の管理運営上の実務を行っている。また、各専攻に対して専攻長を研究科長以外のものの中から教授会において選出し、(1)管理運営に関すること、(2)教務に関すること、(3)予算及び経費支出に関すること、(4)建物・設備の保全及び物品の供用に関すること、(5)教職員、学生の人権、及び服務に関すること、などを行っている。なお、新しい大講座には複数の専任教授をおき、原則として大講座が予算執行や助教ポストの定員管理の単位となることなどが検討課題となっている。

【分析結果とその根拠理由】

基本的方針のもとで、新しい教員組織編成の実現に向けた取組が行われているといえる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧	(データ名・出典)
○(データ名) 企画・評価委員会議事録	(出典) 内部資料
○(データ名) 活動報告	(出典) 内部資料
○(データ名) I-1-2(1) 協力講座取扱要項	(出典) 内部資料
○(データ名) I-1-2 協力講座内規	(出典) 内部資料
○(データ名) I-1-3(1) 連携客員分野内規	(出典) 内部資料
○(データ名) I-1-3 連携ユニット規程	(出典) 内部資料

3.2 大学院課程において、教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか。(観点3-1-③)

【情報学研究科の状況】

情報学研究科における専任教員数は、平成24年5月1日現在で教授37人、准教授29人、講師11人、助教34人であり、大学設置基準を十分満たしている。また、修士課程における専任教員の授業担当コマ数は、平成24年度は、全体のコマ数に対し、約75%を占めており、高い割合を示している。これらのことから、情報学研究科において必要な研究指導教員が確保されていると判断する。

【分析結果とその根拠理由】

このことから、必要な研究指導教員が確保されているといえる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧(データ名・出典)
○(データ名) 専攻ごとの研究指導教員及び研究指導補助教員一覧(出典)
○(データ名) 大学院学修要覧(出典) http://www.i.kyoto-u.ac.jp/local/youran/youran2012.pdf

3.3 本学の目的に応じて、教員組織の活動をより活性化するための適切な措置が講じられているか。(観点3-1-④)

【情報学研究科の状況】

教育研究水準の維持、向上及び教育研究の活性化を図るため、年齢構成に配慮するとともに、公募制の導入や外国人教員の確保に努めている。例えば、情報学研究科では設立時より外国人客員教授ポストを1つ設けており、通常の教授採用人事に準じる選考手続きを行って運用している。その結果、常時、外国人の著名な学者・研究者が研究科に滞在して、授業や講演会を通じて、学生、教職員により影響を与えている。教授、准教授・講師、助教については原則的には公募による採用人事を行うこととなっている。公募では年齢構成に配慮することが普通である。平成18年度には特定有期雇用教員についての規程が整備され、任期付きの教員の採用が行われるようになってきている。G30(国際化拠点整備事業)により外国籍の教員を採用している。平成24年度は特定教授1名、特定准教授4名、特定講師1名であった。また、国籍は英国、クロアチア、ポーランド、オーストラリア、中国、イタリアなどである。また、女性教員の絶対数は依然として小さいもののここ数年では着実に増加している。具体的には平成20年度は1名であったが、その後2名、3名、4名と増加し平成24年度5月現在4名である。

【分析結果とその根拠理由】

性別構成を除いては、人事の際に教員組織の活動をより活性化するための適切な措置がとられているといえる。公募において女性の応募者を優遇するような措置は特にとられているわけではない。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧(データ名・出典)

(データ名) 教員採用に関する情報学研究科諸規程	(出典)
(データ名) 女性研究者の教員選考を促進する助教待機リストの運用について	(出典) 内部資料
(データ名) 平成21年度女性教職員研修及び懇談会のご案内	(出典) 内部資料
(データ名) 平成22年度女性教職員研修及び懇談会のご案内	(出典) 内部資料
(データ名) 平成23年度女性教職員研修及び懇談会のご案内	(出典) 内部資料
(データ名) 平成24年度女性教職員研修及び懇談会のご案内	(出典) 内部資料
(データ名) G30教員一覧	(出典) 内部資料

3.4 教員の採用基準や昇格基準等が明確に定められ、適切に運用がなされているか。特に教育研究上の指導能力の評価が行われているか。(観点3-2-①)

【情報学研究科の状況】

情報学研究科では平成10年より「情報学研究科教官選考基準」を設けて教授、助教授、講師、助手それぞれの採用基準として運用してきた。特に、教授については、高度の教育研究上の能力があると認められる者、助教授については、教育研究上の能力があると認められる者であることを基準の中に置いている。平成18年度より教授、准教授、講師、助教制度への移行に伴う「情報学研究科教官選考基準」の改定作業を進めた。また、非常勤講師の任用に際しては、教務委員会に提出された理由書をもとに講師候補者の業績や経験などについて審議し、教育上の十分な指導能力のもつことを採用基準としている。なお、昇格基準については明確な基準はないが、採用基準がそのまま昇格に準用されている。

【分析結果とその根拠理由】

教授、准教授、講師、助教それぞれの採用基準である「情報学研究科教官選考基準」を定めて運用している。とりわけ、教授と准教授については教育研究上の能力があると認められる者であることを基準の中においており、教員の採用基準や昇格基準等が明確かつ適切に定められ、適切に運用されていると判断する。なお、教員の流動性の確保の観点からも、特に昇格基準を設ける必要はないと考えられる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧(データ名・出典)

(データ名) 情報学研究科教授候補者選考規程	(出典)
(データ名) 公募要領	(出典)

- (データ名) I-4-1 教授候補者選考規程 (出典)
- (データ名) I-4-2 助教授講師候補者選考規程 (出典)
- (データ名) I-4-3 助教候補者選考規程 (出典)
- (データ名) I-4 教員選考基準 (出典)
- (データ名) 教員の出身大学等
- (データ名) 教授候補者推薦理由書 (研究科内部資料) (出典)

3.5 教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に行われているか。また、その結果把握された事項に対して適切な取組がなされているか。(観点3-2-②)

【情報学研究科の状況】

全教員を対象とした「教員活動データベース」への参加に加え、全教員を対象とした業績評価（自己申告書）を毎年継続的におこなっている。「教員活動データベース」は教員の活動状況をホームページ上で一般公開するデータの基礎となり、これを公開することで、教員の教育及び研究活動等を多くの人々が評価することになる。

また、学生による定期的な授業評価もおこなわれている。授業評価はアンケート形式で行われ、その結果は科目担当教員にフィードバックされている。全教員の平均点なども結果に含まれているため、全体の中での科目担当教員個人の評価がどの辺りにあるかが明確に判り、個々人の授業方法などの改善に結びつけることができる。

【分析結果とその根拠理由】

全教員の業績評価と「教員活動データベース」は昇給の査定などの処遇の資料として用いられている。業績評価は「最近の1年間の特筆すべき業績・活動等自己申告書」として、①研究成果とその根拠（例えば、重要論文の発表、受賞記録とその賞の概要、科研費等外部資金獲得状況など）、②教育成果とその根拠（例えば、指導学生の受賞記録とその賞の概要、授業や研究指導を通じた教育・人材育成への貢献など）、③委員会WG活動等を通じた大学・研究科・専攻・学部学科の運営への貢献、④社会貢献（学会を通じた貢献を含む）、⑤その他（特に自己アピールしたい点）の5項目について申告する。このように教育及び研究活動に関する評価が継続的に行われ、適切な取組がなされていると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

- (データ名) 教員評価 (研究科長)
- (出典) 業績・貢献等自己申告書 (提出フォーム)

3.6 教育活動を展開するために必要な事務職員、技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。また、TA等の教育補助者の活用が図られているか。(観点3-3-①)

【情報学研究科の状況】

教務掛に事務職員5名、図書室に司書3名を配置し、教育活動を支援する体制をとっている。技術系職員は1名を配置し、ネットワーク管理やソフトライセンス管理などを行っている。TA・RAを任用するための予算措置がなされており、教務委員会と専攻長の管理のもとで、学部科目を中心にTAの活用が図られている。TA・RAの任用は実験・実習・演習・講義を対象に、平成23年度はTAが97名、RAは69名が配置されており、教育補助業務に従事し教員と共に教育活動を支えている。

【分析結果とその根拠理由】

入学試験の多様化に伴い、年間の入学試験回数の増加や、日本語が不十分な外国人学生への対応が増加などにより、教務担当職員の事務負担が増しているが、必要な教育支援者は適切に配置されていると判断する。

TAの活用は大学院生に教育に関する経験を積ませると同時に教育をより充実させる目的がある。TA・RAを任用する予算は大学運営交付金が主であるが、一部GCOEなどの外部資金によりRAを雇用している。TAは予算状況により、希望額が配当されない場合、講座等の負担を前提に雇用している。社会情報学専攻では専攻基礎科目（情報社会論、情報システム分析論、情報システム設計論I・II）の講義・演習に優先的にTAを配置し、

演習時の教育補助やレポートの整理などを行っており、大学院教育を一層充実させている。これらから TA の活用が図られていると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）業務分担、TA/RA 人数

（出 典）業務分担表、TA/RA 実績報告

第4章 学生の受入

4.1 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められているか。 （観点4-1-①）

【情報学研究科の状況】

研究科のアドミッション・ポリシーは明確に定められており、募集要項や研究科ウェブサイトで明確に記述されている。専攻単位では、大学院の募集要項とともに配布される「志望区分案内」冊子や各専攻のホームページなどで、アドミッション・ポリシーあるいは専攻の目的として記述されている。

研究科のアドミッション・ポリシーには、情報学という学問領域、その学問領域を新たに開拓する意欲を持った学生の受け入れ、研究科の教育の目的とその対応、輩出すべき人物像が明確に記されている。

【分析結果とその根拠理由】

研究科のアドミッション・ポリシーでは、求める学生像として「理系文系という枠組みにとらわれずに、多様なバックグラウンドを持つ学生を日本全国・世界各国から受け入れる」と明記され、また入学選抜の基本方針として「多様な専門分野から選択形式で出題」と記されている。また、社会情報学専攻のアドミッション・ポリシーでは、入学試験では「各自が学んだ専門分野の知識」「情報学の基礎知識」「論理的思考」の3点を筆記試験と面接試験で評価すると明確に記されている。以上のことから、アドミッション・ポリシーは明確に定められ周知されていると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名） 情報学研究科のアドミッション・ポリシー、各専攻のアドミッション・ポリシー
（出典） 募集要項、志望区分案内

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。（観点4-1-②）

【情報学研究科の状況】

アドミッション・ポリシーでは「理系文系という枠組みにとらわれず、多様なバックグラウンドを持つ学生を日本全国・世界各国から受け入れる」と記されている。入学者の選抜は一般入試（筆記・面接）を基本とするが、専攻によっては、修士課程の推薦入試やAO入試、博士後期課程の外国人留学生特別選抜や社会人特別選抜入試も併用し、多様な入学者選抜を行っている。入学時期は4月入学が主流であるが、外国人や短期修了者等に対応した10月入学も実施している。また幾つかの専攻では英語講義のみで修士課程を修了できる国際コース（G30）を開設している。このコースは入学後に選択できるため、外国人留学生のみならず日本人学生も選択している。

【分析結果とその根拠理由】

修士課程の推薦入試やAO入試では、提出された書類に基づき評価を行い、基礎学力などを判断している。推薦入試では面接で最終判断をおこなっているが、外国人を対象としたAO入試ではメールやインターネット会議システムを利用した面談で判断している。10月入学者も順調に増加しており、4月入学と10月入学という年2回の入学機会が定着してきている。博士後期課程の外国人特別選抜は国費留学生として受け入れるもので、様々な国から学生を受け入れている。一方、博士後期課程の社会人特別選抜では、ある程度の研究成果を持つ社会人を受け入れるもので、既発表の論文などを評価し筆記試験を免除している。社会人特別選抜で入学した学生の多くは、短期間で博士論文を仕上げ、博士後期課程を短縮修了している。このように、多様なバックグラウンドを持つ学生を受け入れるため、適切な入学者選抜がおこなわれている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名） 受験者・合格者数
（出典） 各種募集要項、平成23年度志願者及び合格者数等一覧

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。(観点4-1-③)

【情報学研究科の状況】

入試は研究科長を委員長、教務委員長を副委員長、各専攻長および教務委員を委員とした実施体制をとっている。各専攻では専攻長、教務委員を中心に、試験において公平かつ不正がないか、出題ミスがないか点検している。

試験問題は専攻単位で作成し、入試問題用紙の印刷は研究科事務室で専攻長立会いのもと適切な必要部数を印刷し、試験科目ごとに厳封・署名し、試験当日まで研究科事務室の金庫で保管されている。入試当日の試験開始時前に、入試実施本部で委員長から各専攻長に渡され、複数の試験監督者が必要部数などを点検し試験に臨む。入試問題の採点は、入試実施本部が置かれた教室で、受験者に関わる情報が採点者に判らないようにして、採点作業をおこなっている。入試本部の入室は事前に登録した採点者などの関係者のみとし、その入室管理を厳正におこなっている。

英語科目の試験は TOEFL/TOEIC/IELTS の得点に基づき評価している。

【分析結果とその根拠理由】

入試の実施体制、実施概要は明確に明文化されており、そこには組織の役割とその責任、監督者や採点者等の役割等が記されている。また、試験時に受験者から質問がなされた場合の対応プロセス、問題文などの修正プロセスなどがあり、緊急対応の意思決定プロセスが明確化されている。また、各専攻単位での入試問題作成においては、入試問題作成者・その問題の点検者が、出題ミス防止チェックマニュアルに基づくチェックシートで確認・署名を行っている。また、問題案などはセキュリティ委員会で作成した特定情報に関するマニュアルに従い、インターネットに接続されていないパソコンの外部媒体で保管・管理している。

以上のことから、入学選抜が適切な実施体制により、公正に実施されていると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）実施体制、実施概要、業務分担、問題作成

（出典）入学試験実施要項、実施概要、業務表、出題ミス防止チェックマニュアル

4.4 入学者受入方針に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立っているか。(観点4-1-④)

【情報学研究科の状況】

入学試験合格判定のための臨時専攻長会議において各専攻の学生受入れについて実施状況が報告され、アドミッション・ポリシーの意味での適切性について研究科全体で検証している。学生受入れの実施方法の改善や変更の際は教務委員会と専攻長会議で十分に審議している。

また、各専攻会議で学生の修学評価をおこなうとともに、研究科として企業や修士修了者に対し定期的にアンケート調査をおこなっている。アンケートから、「志望する専門分野をより深く学び、研究したいから」が入学動機となった学生が77%と、大多数の学生は勉学に意欲を持ち入学してきている。一方、修了生が就職した企業からは修了生の素養は高いが、コミュニケーション能力の必要性とその不十分さが指摘されている。

【分析結果とその根拠理由】

専攻長会議の討議やアンケート調査などから、アドミッション・ポリシーに沿った学生の受け入れが実際おこなわれていると判断する。一部専攻においては、不十分さが指摘されているコミュニケーション能力を見るため、一般記述問題で、ある事象に対する意見を記述させ、それに関する疑問を面接時におこなうなど、入学者選抜方法の改善をした。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）質問5および6、志望動機、問題1.2

（出典）企業アンケート、学生アンケート、社会情報学一般論述試験問題

4.5 実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。(観点4-2-①)

【情報学研究科の状況】

修士課程に関しては、平成24年度は入学定員189名に対し実入学者数は198名、過去5年間の入学定員に対する実入学者の比率、充足率は92.1%～106.3%である。10月期入学は10名前後で漸増の傾向にあり、その大半を留学生在が占めている。

博士後期課程に関しては、平成24年度は入学定員60名に対し実入学者数は49名、過去5年間の入学定員に対する実入学者の比率、充足率は81.7%～86.7%である。研究科全体では、実入学者数は入学定員を下回っているが、大幅に下回っている状況ではない。しかし専攻単位で見ると、実入学者が入学定員を大幅に下回る状況になっている専攻がある。

【分析結果とその根拠理由】

修士課程に関しては、入学定員に若干名を加えた合格者を出すことで入学辞退者が出ていても入学定員の確保を図るなどの対応により、各専攻とも適正な充足状態にある。

博士後期課程に関しては、研究科としては充足率が低いものの適正な充足状態にある。より一層充足率を上げるためには、経済的問題と課程修了後の就職が課題である。そこで、外部資金等によるRA雇用等の経済的支援をおこなっている。また博士後期課程修了者の就職先拡大のため、修士修了見込み者向けの求人情報の提供と同様に博士後期課程修了見込み者に向けた採用情報の提供を開始した。また、論文博士学位取得希望者には社会人特別選抜による博士後期課程への入学を勧めている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）修士入学者の推移、博士入学者の推移

（出典）修士入学者の推移、博士入学者の推移

第5章 教育内容及び方法

5.1 教育課程の編成・実施方針が明確に定められているか。(観点5-4-①)

【情報学研究科の状況】

情報学研究科カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーが明確に設定されており、それに基づき、教育課程の編成・実施は教務委員会が担当し、適切に対応している。

修士課程では、開設科目は研究指導科目、研究科共通科目、専攻開設科目（専攻基礎科目、専攻専門科目、選択演習・セミナー）、プロジェクト科目に区分された階層性を持ち、それぞれに修得すべき単位数を定めることで、教育課程が体系的に編成されている。研究科共通科目の一部として選択必修の研究科共通展望科目「情報学展望1, 2, 3, 4, 5」を開設しており、個々の専門領域を超えた情報学の広がり学ぶ機会としている。

博士後期課程においては、国際的な場で活躍できるコミュニケーション能力とアクティブな研究者としての素養や独創的な発想力を培うため、十分な研究環境と自由な雰囲気の中で各人に研究を展開させている。幅広い学識を培うために複数のアドバイザーによる研究指導を必須としている専攻もある。

【分析結果とその根拠理由】

修士課程では、基礎・専門の階層構造の中で講義・演習科目とバラエティのある教育課程が体系的に編成されており、目的とする学問分野や職業分野における期待に応えるものになっていると判断する。

博士後期課程では、情報学およびその関連分野の研究活動の展開を支援する環境があり、高度の研究能力と豊かな学識を持つ人材育成の目的に応えるものとなっていると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）情報学研究科カリキュラム・ポリシー

（出典）大学院学修要覧

5.2 教育課程の編成・実施方針に基づいて、教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切なものになっているか。(観点5-4-②)

【情報学研究科の状況】 修士課程では、開設科目は研究科共通科目、専攻基礎科目、専攻専門科目、セミナー・実習科目、研究指導科目などに区分された階層性を持ち、それぞれに対して専攻毎に取得すべき単位数を定めることで、教育課程が専攻学術に沿って体系的に編成され、教育の目的とする学問分野や職業分野における期待にこたえるものとなっている。専攻によっては、研究指導科目の中で産業界や社会のニーズに対応した研究を行うために必要となる企業研究所における実習を行っているところもある。さらに研究科全体では研究科共通科目に選択必修の共通科目「情報学展望」等を日本語と英語で開講して、個々人の専門領域を超えた情報学の広がり学ぶ機会を制度として導入している。

博士後期課程においては、国際的な場で活躍できるコミュニケーション能力とアクティブな研究者としての素養を持ち、産業界で要請される独創的な発想力に優れ、学際的な分野で活躍できる広範囲な基礎技術を習得し応用力に秀でた人材の育成を行い、研究者としても技術者としてもリーダーシップのとれる人材を輩出するため、十分な研究環境と自由な雰囲気の中で各人に研究を展開させている。専攻によっては幅広い学識を培うために複数のアドバイザーによる研究指導や他研究科教員も含めたセミナーを必須としている専攻もあり、また、積極的に英語によるセミナーを行なっている場合もある。

【分析結果とその根拠理由】 基礎・専門の階層構造の中で講義・演習科目とバラエティのある教育課程が体系的に編成されており、さらに英語だけで学位を取得できるプログラムも導入され、学問分野や職業分野あるいは国際性において期待に応えるものになっていると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）大学院学修要覧

（出典）研究科ホームページ <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

（データ名）大学院科目シラバス （出典） <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/index.html>

(データ名) 修士課程における学修の進め方、博士後期課程における学修の進め方 (出典) 社会情報学専攻資料

5.3 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。(観点5-4-③)

【情報学研究科の状況】10月入学に対応した入学試験を制度化し、入学時期の多様化に対応している。9月期修了についても、優秀者の在学期間短縮も含めて、ニーズに合わせた取り組みを続けている。さらに学外へのインターンシップの単位化も図られ、専門知識の社会貢献の観点から「情報学の知見を活かしたボランティア」に限って単位認定している。

情報学展望の複数科目を含め、英語講義の充実が図られ、英語のみで学位取得可能なプログラムにも取り組んでいる。この他に外国人留学生や外国人研究者を含めた英語でのセミナー・研究発表の充実も専攻毎に図られ、学術面での学術の動向を取り入れた先端的な取り組みに加え、国際性の涵養が平素から行なわれている。また入学者の出身学部が多様性を考慮し、専攻学術毎に開講科目は基礎科目と発展的な科目に分けられ、基礎学力の充実と最新の発展動向への展開との調和を図っている。

【分析結果とその根拠理由】

基礎・専門の階層構造の中で講義・演習科目・セミナー等とバラエティのある教育課程が体系的に編成されており、英語講義も充実しており、目的とする学問分野や職業分野における期待に応えるものになっていると判断する。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧 (データ名・出典)

(データ名) 大学院学修要覧 (出典) <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

(データ名) 大学院科目シラバス

(出典) <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/curriculum/syllabus.html>

5.4 教育の目的に照らして、講義、演習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。(観点5-5-①)

【情報学研究科の状況】授業形態は、各専攻の教育の目的の特性に応じた講義、演習・実習・セミナー等の授業形態が綿密な設計の上で組み合わせられ、バランスのとれた構成になっている。特に演習・セミナー、実習科目の少人数教育に特徴がある。また専攻によっては、少人数の対話・討論型あるいはフィールド型の授業を行っている。学習指導法については、マルチメディア講義室でアーカイブを行うなど情報機器を活用した授業も必要に応じて展開され、フィールド型授業、コンピュータとの対話型授業などの工夫が行われている。例えば、社会情報学専攻の選択演習・セミナーでは少人数の対話・討論型あるいはフィールド型の授業を行っており、専門性の涵養を図っている。

【分析結果とその根拠理由】

これらのことから、講義、演習・セミナー、実習科目等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容と教育目的に応じた適切な学習指導法の工夫がなされていると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧 (データ名・出典)

(データ名) 大学院学修要覧 (出典) <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

(データ名) 大学院科目シラバス

(出典) <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/curriculum/syllabus.html>

(データ名) 修士課程における学修の進め方 (出典) 社会情報学専攻資料

5.5 単位の実質化への配慮がなされているか。(観点5-5-②)

【情報学研究科の状況】

単位の实質化については、組織的な履修指導を各専攻の履修ガイダンスで行うとともに、学生が所属する各分野の教員が指導教員となり、学生が自らの履修計画を設定し、指導教員の確認のもとで履修登録を行うことで、必要な学習時間を確保するように指導を行っている。

授業時間数についても教務委員会での審議を踏まえて単位の实質化がなされている。シラバスには、授業の内容、成績評価基準、参考書などが記載され、学生の自主学習を促すとともに、全ての教員についてオフィスアワー制度が導入され、学生は学習について関係教員に質問することが制度として導入されている。各学生は研究室配属に際して全員に個人の学習スペースとインターネット環境が提供され、授業時間以外の学習も快適かつ円滑に行ない得る措置が講じられている。また、システム科学専攻では、講義形式の授業においては期末における筆記試験あるいはレポートを課すことで厳正に単位認定を行っている。さらに一部の科目では学生の主体的な学習を促すために発表内容等の平常点にウエイトをおいた成績評価を行なっているものもある。

【分析結果とその根拠理由】 優秀な学生には短縮修了の制度を設けている大学院課程であり、履修科目の登録の上限設定などは導入していない一方で、学部以上に丁寧な履修指導を行なっている。授業時間数や学習スペースの確保、厳正な単位認定に努めており、単位の实質化への配慮がなされていると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）大学院学修要覧（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

5.6 適切なシラバスが作成され、活用されているか。(観点5-5-③)

【情報学研究科の状況】

専攻基礎科目、専攻専門科目については平成17年度より成績評価の基準などを記したシラバスが作成され活用されている。特に平成24年度からはKULASIS機能の活用を行ない、一定のフォーマットに沿ったシラバスがKULASISで閲覧できる他、その要点は研究科学修要覧で一覧できるようになっており、学修要覧の内容はインターネットを介して広く公開されている。

【分析結果とその根拠理由】

研究指導科目を除く全ての科目について、科目の専門性や特性に考慮しつつ、適切なシラバスが作成され、KULASISを通して活用されていると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）大学院学修要覧（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

（データ名）大学院科目シラバス

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/curriculum/syllabus.html>

5.7 研究指導、学位論文に係る指導の体制が整備され、適切な計画に基づいて指導が行われているか。(観点5-5-⑥)

【情報学研究科の状況】

修士課程及び博士後期課程においては、主任指導教員の下で研究指導を受け、学位論文の作成を準備している。研究指導に当たっては、主任指導教員以外に、同じ分野や講座に属する複数の教員から指導を受けることが通例である。具体的な実施方法は専攻によって異なる。例えば、複雑系科学専攻では、予備審査を行なう学位論文に対して、予備審査の詳細に関する当専攻独自の内規を設け、学位論文としての適切さを厳正に判定する体制を整備している。知能情報学専攻では、修士論文については、2年次の10月から12月の間に3名の教員による中間審査を実施し、修士論文公聴会では、中間審査での指摘に対して回答書を配布することが義務付けられている。また必要に応じて博士学位論文調査員を増やす措置も制度化され、情報学の学域の広さにも十分な対応をしてい

る。

【分析結果とその根拠理由】

学位審査に係る適切な指導体制が整備され、機能していると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）大学院学修要覧（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

（データ名）課程博士（期間短縮による課程博士、論文博士）学位規程内規（出典）複雑系科学専攻資料

5.8 学位授与方針が明確に定められているか。（観点5-6-①）

【情報学研究科の状況】 修士学位・博士学位のいずれも学位授与方針が定められ、公開されている。具体的には所定の単位を取得したのものに対し、提出された学位論文が、修士号に対しては、学位論文が情報学及びその関連分野における新たな成果を含むか、あるいは、広い視野に立った学術的内容を含んでいると判断されることとし、博士号に対しては、情報学及びその関連分野における新たな成果とそれを包括する体系を含む、高度な学術、当該の研究分野の今後の発展に大きく寄与する内容を含む、あるいは、情報学及びその関連分野において請求者が自立して研究活動等を行い得ると認められる学術的内容を含んでいると判断されることを要求している。

【分析結果とその根拠理由】

上記のように、学位授与方針は明確に定められ、機能していると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）研究科ディプロマ・ポリシー

（出典）http://www.i.kyoto-u.ac.jp/introduction/admission.html#diploma_policy

5.9 成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。（観点5-6-②）

【情報学研究科の状況】

通信情報システム専攻では、カリキュラム委員会などで、科目ごとの単位認定率などをレビューし、適切な成績評価などが行われているか確認している。社会情報学専攻では、修士専攻基礎科目の成績については、資料をもとに専攻会議にて成績評価等を実施している。修士課程の修了認定においては、3名の教員からなる論文調査委員会の審査を受け、試験及び公聴会を開催することとなっている。社会情報学専攻では、修士中間試問会においては、専攻会議メンバにより学生ごとの評価を実施している。博士後期課程では論文予備調査と論文調査の2段階となっており、在学期間短縮修了の場合には、論文調査委員のうち1名は他専攻から選出し、試験及び公聴会を開催し厳格な審査を受けることとしている。なお、論文博士の場合には3名の論文調査委員に加えて、2名の学力試問委員が必要である。これらは学位論文審査に関する規程や内規として定められている。数理工学専攻では、論文予備調査前に、専攻で定めた修了認定基準を満たすことの確認が講師以上の全教員が出席する専攻会議の席上で行われている。これらの内容は、専攻ガイダンスなどで必要な学生に対しての周知が図られている。

【分析結果とその根拠理由】

各専攻で行われている様々な取組から、成績評価、単位認定、修了認定が適切に実施されていると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）各専攻におけるガイダンス。大学院学修要覧。

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

5.10 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。 (観点 5-6-③)

【情報学研究科の状況】

授業科目については成績評価基準の記されたシラバスを作成し、「各専攻開講科目とシラバス」のウェブサイト上で公開し、教員の相互確認とともに、学生への周知を行っている。また、入学時のガイダンスにおいて配布する学修要覧には「情報学研究科成績評価規程」を記載しており、そこでは授業科目の成績評価について定められた期間に異議申し立てができることをうたっている。また、同じく学修要覧において、「情報学研究科レポート試験における剽窃等の扱いについて」において定期試験に準じる厳しい規範を求めている。

修了認定は一定の条件のもとでの授業科目の単位数と学位論文審査結果に基づいて行っている。博士学位論文の学位審査では、高い学術基準で審査を行うという申合せを策定している。修士論文審査では専攻ごとに一括して、博士論文審査では申請者ごとに公聴会を開いて公開の場で審査している。専攻によっては中間審査も実施している。ただし、特許にかかわる話題においては公開が制限されることがある。

【分析結果とその根拠理由】

成績評価の客観性はシラバスの公開と、成績評価規程と、評価に関する異議申し立ての権利とによって担保されている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）「各専攻の開講科目とシラバス」

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/curriculum/syllabus.html>

5.11 学位授与方針に従って、学位論文に係る評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、適切な審査体制の下で、修了認定が適切に実施されているか。 (観点 5-6-④)

【情報学研究科の状況】

学位評価基準は、入学時のガイダンスにおいて学生全員に、ディプロマ・ポリシー、修了要件及び学位授与の要件が記載された大学院学修要覧を配付し、周知している。修士論文については全7条からなる「情報学研究科修士学位論文審査規程」を、博士論文については「情報学研究科博士学位論文予備審査規程」「情報学研究科博士学位論文審査規程」をそれぞれ設け、同じく大学院学修要覧の冊子に掲載し学生に周知している。この中では、3名からなる論文調査委員会の調査に基づき合否を判定することなどを定めている。博士論文の審査に関しては、課程博士と論文博士とに分けて詳しい手続き等をウェブサイトからダウンロード可能としている。期間短縮修了に関しては、修士課程と博士後期課程のそれぞれの学位論文審査規程のなかに規定があり、「優れた研究業績を挙げた者」に該当するか否かを可否により判断することなどが定められている。

【分析結果とその根拠理由】

学位論文審査規程を学修要覧に記載して、入学時のガイダンスで説明し、学生への周知をはかっているし、修士論文発表会、博士論文公聴会のあと授与方針に示す基準にしたがってそれぞれの専攻で、または調査委員会で厳密に合否判定をしている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）「学位授与方針」

「博士学位申請手続き」（学内限定）

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/introduction/admission.html>

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/kyomu/local/Dsinsei01/home.htm>

第6章 学習成果

6.1 各学年や修了時等において学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、単位修得、進級、修了の状況、資格取得の状況等から、あるいは学位論文等の内容・水準から判断して、学習成果が上がっているか。(観点6-1-①)

【情報学研究科の状況】

修士課程 標準修業年限内の修了者数（10月入学者を含まない）

	入学者数	標準修業年限内の修了者数	標準修業年限内の修了率
平成22年	184	157	85.32608696
平成21年	182	163	89.56043956
平成20年	174	147	84.48275862
平成19年	193	169	87.56476684
平成18年	187	174	93.04812834

修士課程 標準修業年限×1.5内の修了者数（10月入学者を含まない）

	入学者数	標準修業年限×1.5内の修了者数	標準修業年限×1.5内の修了率
平成21年	182	171	93.95604396
平成20年	174	153	87.93103448
平成19年	193	177	91.70984456
平成18年	187	177	94.65240642
平成17年	189	177	93.65079365

博士後期課程 標準修業年限内の修了者数（10月入学者を含まない）

	入学者数	標準修業年限内の修了者数	標準修業年限内の修了率
平成21年	36	14	38.89
平成20年	36	18	50.00
平成19年	28	16	57.14
平成18年	49	22	44.90
平成17年	58	27	46.55

博士後期課程 標準修業年限×1.5内の修了者数（10月入学者を含まない）

	入学者数	標準修業年限×1.5内の修了者数	標準修業年限×1.5内の修了率
平成19年	28	22	78.57
平成18年	49	30	61.22
平成17年	58	34	58.62
平成16年	45	26	57.78
平成15年	46	25	54.35

【分析結果とその根拠理由】

修士課程での標準修業年限（2年）での修了率は85%を超え、修業年限の1.5倍（3年）での修了率は平均で90%を越えているし、修士論文が学術雑誌や国際会議の会議録に掲載されるなど、高い論文の水準に達するものも多くある（修了生アンケート）ので、学習成果は上がっていると判断できる。博士後期課程では、標準修業年限（3年）での修了率は50%前後で推移しているが、標準修業年限の1.5倍での修了率をみると、入学者数が少ない年の修了率が高いという傾向がある。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧
(データ名)「標準修業年限卒業率」
「修了生アンケート」
(出典)「標準修業年限卒業率」(教務内部資料)
「修了生アンケート」(平成24年8月実施)

6.2 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。(観点6-1-②)

【情報学研究科の状況】

平成24年8月に学生によるカリキュラムアンケートとして実施した研究科共通の選択必修科目である「情報学展望(1, 1B, 2, 2A, 4, 4B)」(23年度と24年度で名称に違いあり)についての学生による授業評価によれば、成果や効果については概ねよい評価が得られている。特にそのうちの外国人教員による英語での講義も受講者数は多いとは言えないが、好感をもって迎えられている。リレー式講義について若干の内容の重複を指摘する声があった。また、カリキュラム全般についての評価では、修士課程学生の約13%が満足、59%がある程度満足、21%がどちらともいえない、2%がやや不満足、5%が不満足と回答している。これは前回16年の調査に比べて若干改善している。レポート課題については、前回の調査時と同じく、役立つがあまり多いと対応できないという声が多かった。

【分析結果とその根拠理由】

カリキュラム全般についての前回の評価では、修士課程学生の11%が満足、47%がある程度満足、15%がやや不満足、4%が不満足と回答したことと比較して、全般的な改善がみられた。これらのことから、本研究科の意図する教育の成果や効果が出つつあるがレポート課題などでは、多すぎると対応できないとの回答であるが、満足度が上がっているため結果として受け入れられていると判断できる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧
(データ名)カリキュラムアンケート
(出典)カリキュラムアンケート集計結果(研究科内部資料)

6.3 就職や進学といった修了後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果が上がっているか。(観点6-2-①)

【情報学研究科の状況】

	情報学研究科修士課程進学率		
	修了者数	進学者数	進学率
平成24年3月	168	14	8.3
平成23年3月	173	24	13.9
平成22年3月	159	30	18.9
平成21年3月	174	17	9.8
平成20年3月	181	29	16

情報学研究科修士課程就職率			
	修了者数	就職者数	就職率
平成 24 年 3 月	168	147	87.5
平成 23 年 3 月	173	147	85
平成 22 年 3 月	159	127	79.9
平成 21 年 3 月	174	152	87.4
平成 20 年 3 月	181	146	80.7

上記表中就職希望者の就職率			
	就職希望者数	就職者数	就職希望者の就職率
平成 24 年 3 月	153	147	96.1
平成 23 年 3 月	148	147	99.3
平成 22 年 3 月	130	127	97.7
平成 21 年 3 月	154	152	98.7
平成 20 年 3 月	148	146	98.6

【分析結果とその根拠理由】

修士課程修了後の進路に企業の研究開発部門へ就職する者が多いことや企業アンケートの回答などにみられるように、教育の成果や効果が十分に上がっていると判断される。ただし、24年度の博士後期課程進学率の落ち込みは他の理由もあると考えられる。たとえば、学生アンケートの回答に見られるように、将来に対するなんとなくの不安という心理と金銭面での理由が挙げられる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）進学率・就職率

カリキュラムアンケート

（出典）進学率・就職率（教務資料）

カリキュラムアンケート（平成24年8月実施）

6.4 修了生や、就職先等の関係者からの意見聴取の結果から判断して、学習成果が上がっているか。（観点6-2-②）

【情報学研究科の状況】

平成24年8月実施の修了生アンケートによれば、情報学研究科の修士課程で受けた教育についてほとんどすべての項目で「十分に満足している」と「満足している」という回答が70%から90%の高い割合を示した。しかし、進路指導と自身の修士論文への取組みには不満が残るという評価が40%ほどあった。

同じ時期に実施した企業人事担当者アンケートによれば、日本語コミュニケーション能力は「高い」という回答が約15%、「まずまず」が約65%、英語コミュニケーション能力は「高い」が約10%、「まずまず」が約40%、独創性（デザイン力）は「高い」が約10%、「まずまず」が約60%、専門的知識は「高い」が80%、「まずまず」が20%、専門外への関心と学識は「高い」が約25%、「まずまず」が約45%、リーダーシップは「高い」が約10%、「まずまず」が約50%であった。

【分析結果とその根拠理由】

基礎、専門能力に関して非常に高い教育効果と成果が得られていると評価されるなど全体的には高い評価を得ているものの、相対的にみて、英語コミュニケーション能力とリーダーシップがまだ十分でないという結果であった。全般的にみて、前回の調査結果に比較して特に優れているという評価が若干下がっているが、まずまずの能力があるという評価は上がっていて、平均的には向上しており、学習成果が上がっていると判断できる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

(データ名)「修了生アンケート」(質問1)

(データ名)「企業人事担当者アンケート」(質問1)

(出典)「修了生アンケート」(平成24年8月実施)(研究科内部資料)

(出典)「企業人事担当者アンケート」(平成24年8月実施)(研究科内部資料)

第7章 施設・整備及び学生支援

7.1 教育研究活動を展開する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか。また、施設・設備における耐震化、バリアフリー化、安全・防犯面について、それぞれ配慮がなされているか。(観点7-1-①)

【情報学研究科の状況】

研究科の建物は吉田キャンパス本部構内の工学部1号館、工学部2号館、工学部3号館南館、工学部3号館西館、工学部6号館、総合研究8号館、工学部10号館、工学部総合校舎、同吉田南構内の先端科学研究棟、宇治キャンパスの旧工業教員養成所、実験用倉庫から構成され、その総面積は21,010㎡である。教員用（含む秘書室、研究員室）の部屋の総面積は3,950㎡、共同研究室（学生居室、各研究室書庫、実験室、計算機室等）の総面積7,481㎡、その他会議室・セミナー室・研究科書庫等の総面積1,372㎡である。講義室は自前のもの他に工学部共同講義室を多用している。平成24年3月工学部8号館は耐震改修を終え、総合研究8号館と改称された。現在工学部10号館は耐震改修中である。なお、本部構内（吉田地区）工学研究科暫定再配置完了後は、情報学研究科に約4,000㎡の暫定再配置が全学施設整備委員会で決定している。これに対して修士・博士後期課程の学生総数は約600名であり、教員は専任・特定教員が287名、学内協力講座教員が40名である。その他連携教員がいる。

【分析結果とその根拠理由】

情報学研究科は3キャンパス11施設に分かれている。メール等での連絡網も整備され、会議等はほとんど吉田キャンパスで行われ、一部は遠隔テレビ会議を行っているため、教員組織の運営という観点からは特に問題はないものの、教育研究組織の運営、教育課程の実現にふさわしいとはいえない。また、情報学研究科としての必要面積に対する整備率は58%で、学内最下位レベルである。設備としては、ノートPCが学生一人一台は無償貸与されるなど、教育課程の実現にふさわしいと思われる。また、総合研究8号館は耐震改修に際して段差の困難解消のためのスロープが設置されるなど、バリアフリー化に向けて漸次改善がなされているし、他の建物内であるが女子学生用の更衣室も配置されている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）利用面積集計

（データ名）暫定再配置計画

（データ名）教員名簿

（出典）情報学研究科占有床面積

（出典）平成24年3月26日施設整備委員会資料

（出典）大学院学修要覧

7.2 教育研究活動を展開する上で必要なICT環境が整備され、有効に活用されているか。(観点7-1-②)

【情報学研究科の状況】

研究科の教員、学生がリモートからアクセス可能な、計算サーバおよびネットワークサーバが下記のWeb資料にあるように、十分な計算能力とサービス能力をもって整備されている。また研究科のウェブサーバ、メールサーバとしても機能し活用されている。

また研究科の各研究室にも計算機やプリンタが配布され、教育・研究に有効利用されている。さらに、教員、学生全員にノートPCが配布され、教育・研究に有効利用されている。また、ノートPCについては、ライセンスのあるソフトウェア込みで配布しており、ソフトウェアの著作権にも配慮している。研究科としてメディアセンターのスーパーコンピュータの部局定額利用の契約を行っており、配布のPC等に開発支援環境をインストールしてあることと併せて、スーパーコンピュータの効果的な活用環境を整備している。さらに、研究科の各所に無線LANのアクセスポイントを配置し、どこからもネットワークに容易にアクセス可能にしている。京都大学情報学研究科附属情報教育推進センターを通じて大学院向けに情報分析、計算科学等の科目を提供し、計算機利用の効率化等に踏み込む進んだ教育を行っている。

【分析結果とその根拠理由】

ハードウェア、ソフトウェアの両面において、情報ネットワークが適切に整備され、有効に活用されている。いつでも、どこでも教員、学生が計算機をネットワーク経由で利用できるように資源が配置され、管理されていることが、分析結果の根拠である。しかし、レンタル計算機の契約期間の末期には PC の能力が一部の学生の期待に十分添えていない面がある。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）「情報学計算機教育システム」

「センター提供科目」

「情報学研究科セキュリティー情報」

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/IECS/index.htm>

<http://www.iedu.i.kyoto-u.ac.jp/subject#a-daigakuin>

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/Security/>

7.3 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。（観点 7-1-④）

【情報学研究科の状況】

学生は研究室内に個人の研究スペースを与えられている。一例をあげると、システム科学専攻のある研究室では、15名の学生に対して合計100平方メートルの居室スペースが与えられ、各人一つ以上の机とPCが使える。研究室図書、研究科図書、大学図書等も自由に利用できる。学術論文等も電子利用が容易に利用できる環境にある。その他に、研究科として会議室3室、セミナー室10室について運用権を有しており、これらは会議やセミナー使用時以外には、適宜、グループ討論室などとして使用されている。

【分析結果とその根拠理由】

学生は研究室内に個人の研究スペースを与えられており、書籍、文献、PC等を含め自由に利用できるため、自主的学習環境は十分に整備されている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）情報学研究科施設予約

(<https://www.tam2.adm.kyoto-u.ac.jp/portal/wps/myportal>)

（データ名）学生用設備について（システム科学専攻機械システム制御分野内部資料）

7.4 授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。

（観点 7-2-①）

【情報学研究科の状況】

毎年4月には修士課程と博士後期課程の新入生に対して専攻長と教務委員の担当で大学院学修要覧などを配布し、授業科目の履修指導のためのガイダンスを実施している。ほぼ全新生が参加している。さらに、4月と10月の履修届け作成時に指導教員は学生個別に履修指導と履修届の内容確認を行っている。また、多くの専攻では大学院入試出願期間前に「専攻説明会」を複数回開催して、専攻のアドミッション・ポリシーなどを説明し、求めに応じて各研究室が個別の説明も実施している。

【分析結果とその根拠理由】

授業科目の履修指導のためのガイダンスはおおむね適切に実施されていると判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）平成24年度全体ガイダンス開催について（内部資料）、（データ名）H24専攻別ガイダンス日程表（内部資料）、（データ名）平成24年度後期全体ガイダンス開催について（内部資料）

7.5 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。(観点7-2-②)

【情報学研究科の状況】

大学院教育において学生個別に助言を与える担任制に代わるべきものとして学生が所属する研究室内の主任指導教員がある。さらに副担任に相当するものとして、研究室の別の教員が配置されている。学習相談については別の教員、特に、助教など若手の教員の役割が重要である。教員の電子メールアドレスは研究科ウェブサイトで公開されており、電子メールを活用した教員への質問や学習相談が可能となっている。

授業科目に関する学習支援に関してはオフィスアワー設定やメール相談の受付を行っている。また、留学生に対しては英語での新入生ガイダンスの実施、英語版の大学院学修要覧の配布、英語版シラバスの整備などの形で教務関係の英語化を行うと共に、必要に応じて、チューターを配置している。さらに、身体障害学生を支援するためのサポーターの制度もある。

【分析結果とその根拠理由】

修士論文等の研究的側面に関する学習相談は、指導教員を主体として当該研究室の准教授、助教等も協力しておこなっている。授業科目に関しては、学生同士が互いに教えあうなどの互助が主体であり、これに加えてオフィスアワーやメール質問等が利用可能な状況であり、適切に学習支援が行われていると判断できる。留学生に対して英語での新入生ガイダンス、英語版の大学院学修要覧の配布、英語版シラバスの整備などの形で教務情報の英語での提供も行っている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）大学院学修要覧（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/>

（データ名）情報学研究科シラバス

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/education/syllabus.html>、

（データ名）障害者支援経費申請書（内部資料）

7.6 学生の部活動や自治会活動等の課外活動が円滑に行われるよう支援が適切に行われているか。(観点7-2-④)

【情報学研究科の状況】

大学院であるため課外活動を行う学生の割合は高くない。京都大学全体の学生生活白書によると、修士課程学生、博士後期課程学生の大多数では、課外活動に費やす時間は1週間2時間未満であり、せいぜい適度な息抜きといった程度である。

【分析結果とその根拠理由】

特別な支援は行われていないが、大学院生のほとんどは専門科目の履修と研究が大学生活の主たる部分であり、特に支援を必要とするとは思われない。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）課外活動

（出典）京都大学学生生活白書（平成23年度版）

7.7 生活支援等に関する学生のニーズが適切に把握されており、生活、健康、就職等進路、各種ハラスメント等に関する相談・助言体制が整備され、適切に行われているか。また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への生活支援等を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて生活支援等が行われているか。(観点7-2-⑤)

【情報学研究科の状況】

研究科では、ハラスメントに関しては、ハラスメント防止等に関する規程を定めるとともに、人権委員会委員やハラスメント相談員を定め、人権委員の教員を中心に対応している。進路相談については、専攻の就職委員が全体のガイダンスを行った後、企業や大学・研究機関から送られてくる就職情報を管理・周知し、学生の就職活動を支援する他、互いに連携して情報交換や調整を行い、就職委員や指導教員が学生個別に相談・指導を行っている。専攻長が就職委員を兼務する専攻が多い。また、ICT イノベーション等の研究成果を社会・企業に向けて発信する大きなイベント時にあわせて、多くの修生が就職している企業の説明会を開催して学生に最新の就職情報を提供している。

【分析結果とその根拠理由】

大学院における学生支援の中心は進路相談であり、専攻長または就職担当専任教員が企業の人事担当者との連絡窓口となり、学生の就職支援を行っているが、ハラスメント相談の件数も増えている。健康相談は保険センター、生活相談は学生部が担当し、研究科としては特に相談業務を行っていない。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）人権問題等取扱要領（内部資料）（データ名）京都大学大学院情報学研究科におけるハラスメント防止等に関する規程（内部資料）

（データ名）H24 障害者支援経費申請書（内部文書）

7.8 学生に対する経済面の援助が適切に行われているか。(観点7-2-⑥)

【情報学研究科の状況】

各種奨学生募集について、入学手続き書類とともに送付、掲示、メールなどを通じて学生に周知している。日本学生支援機構の奨学生枠配分と推薦の作業は教務委員会と専攻長が行っている。平成24年度新入生対象の予約分で、修士課程の4割弱、博士後期課程の5割程度が採用予定であった。その他の奨学金についても、各専攻数名程度が受給している。また、TA 経費の大学示達額が実際のTA 任用に不足する場合は運営費交付金で補填するなどして、学生への経済面での援助を行っている。授業料免除に関しては、申請者の2割程度が全額免除、7割程度が半額免除を認められている。

【分析結果とその根拠理由】

日本学生支援機構の奨学金は修士課程分に関してはまだ十分とはいえないが、民間奨学金はかなり少額でさらに不十分といえる。授業料免除は申請者の多くが半額免除にとどまっている。TA は授業補助業務のためあまり増やすことはできない。学生の経済面での援助のためには、何らかの資金による博士後期課程学生のRAの増員や授業料の免除などのための予算を確保する必要がある。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）奨学金利用実績（内部資料）（データ名）H24 日本学生支援機構大学院選別配分表（内部資料）（データ名）奨学金受給者一覧（留学生）（内部資料）（データ名）民間奨学生一覧（日本人）（内部資料）（データ名）H23 奨学金利用実績（内部資料）

第8章 教育の内部質保障システム

8.1 教育の取組状況や本学の教育を通じて学生が身に付けた学習成果について自己点検・評価し、教育の質を保証するとともに、教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。(観点8-1-①)

【情報学研究科の状況】

学習成果を自己点検・評価することを一つの目的として、研究科では修了生および企業の採用担当者に、平成24年度の前期にアンケートを行った。評価・広報委員会がそのアンケートの内容の検討や、データ収集・蓄積を担当している。学生が身に付けた学習成果は、研究発表会（研究室内、専攻内、公聴会）での発表・質疑応答からも評価することができる。

【分析結果とその根拠理由】

日常の研究発表などの機会を通じて、学生の修得した学習成果を評価し、これを日々の研究教育指導にフィードバックしている。さらに、修了生に対するアンケート等により、客観的なデータの取得に努めている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）修了生対象アンケート（学内資料）、（データ名）評価・広報委員会名簿（学内資料）

8.2 研究科の構成員（学生及び教職員）の意見の聴取が行われており、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。(観点8-1-②)

【情報学研究科の状況】

授業アンケートを実施し、学生からの意見聴取を行っている。この結果を研究科全体で集計し、これと比較可能な形で、各科目担当者にフィードバックしている。これを受けて、各教員は自身の授業を学生がどの程度理解しているのか等が把握でき、質の改善に貢献していると思われる。また、多くの研究室では、指導教員がきめ細かに、研究指導をマンツーマンで行い、直接コミュニケーションをとりながら教育にあたっている。一方、教職員から教育の状況について意見を聴取する機会はあまりない。

【分析結果とその根拠理由】

授業アンケートという形式での学生からの意見聴取は、現状の把握に有用であり、今後も継続すべきと思われる。また、研究室単位での個別指導を通じて、学生の意見を直接聴取でき、これをフィードバックすることにより教育の質の改善は図られている。一方で、教職員からの意見聴取については、全学レベルで教育に関して議論する場がある。また、大学院では専門性が高く、各授業科目によって内容等も大幅に異なるので、全学とは別に研究科レベルで意見聴取する必要性はあまりないと思われる。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）情報学研究科授業アンケート用紙（内部資料）

（データ名）カリキュラムについてのアンケート

（内部資料）（データ名）カリキュラムアンケートの報告書

8.3 学外関係者の意見が、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。(観点8-1-③)

【情報学研究科の状況】

学外者の意見を聴取するための組織的取り組みと、聴取した意見を教育の質の改善・向上に向けて活用する取り組みとして、以下の方策が取られている。

意見聴取の取り組み：

(1) 情報学研究科との利害関係のない学外有識者を委員とするアドバイザーボードを組織し、教育や研究に関する研究科の取組について忌憚のない意見を聴取している。アドバイザーボード委員会は、これまでに平成20年1月18日、平成21年11月5日、平成23年10月21日に開催されている。

(2) 情報学研究科の卒業生（修了生）が就職する主要な企業の人事担当者を対象としたアンケートにより、情報学研究科における教育や人材育成が十分に高い水準にあるかどうかを調査している。これまでに、平成18年7月と平成24年8月に実施されている。

(3) 研究科修了生を対象として、情報学研究科における教育内容や教育環境についてのアンケートを実施している。これまでに、平成18年7月と平成24年8月に実施されている。

聴取意見を活用する取り組み：

アドバイザーボードでの議論内容については、非公開の研究科内部資料ではあるが討議内容の完全な記録を作成し、関係教員に提供している。企業人事担当者アンケートや修了生アンケートについても、回答内容を評価・広報委員会にて精査して概要や分析結果を報告書としてまとめ、学内関係者に周知している。

【分析結果とその根拠理由】

学外者として、利害関係のない有識者、修了生を受け入れる企業の人事担当者、修了生の3区分により、幅広く教育の内容と質に関する忌憚のない意見を聴取する取り組みが行われている。聴取意見は、いずれも報告書にまとめられ、研究科内教員に周知されている。公開可能な部分は自己点検・評価報告書に記載し公表されている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

（出典）

アドバイザーボード議事録

平成19年度自己点検・評価報告書：企業人事担当者アンケート

平成19年度自己点検・評価報告書：修了生アンケート

企業人事担当者アンケート（平成24年8月実施）

修了生アンケート（平成24年8月実施）

8.4 ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。（観点8-2-①）

【情報学研究科の状況】

情報学研究科の教員を対象としたファカルティ・ディベロップメントとしては、効果的な講義技法を紹介するDVD教材（大学教員向けティーチング・ティップス集）の配布と、個々の具体的な講義内容について受講生に問う授業アンケートとを実施している。

DVD教材は、情報学研究科がNHK放送研修センターの協力を得て平成23年に作成したもので、話し方や授業資料の作成方法といった内容から、学習効果を上げるための講義内容の組み立て（構成）法などを紹介する総合的な内容となっている。

授業アンケートは、全ての講義の最終回に、受講生全員に対して無記名で意見聴取を行っている。各教員の授業方法について質問するとともに、学生自身の講義への取り組みについても問う内容となっている。

研究科の多数の教員が工学部の学部教育も担当しているが、これらの教員に関しては、新工学教育プログラム実施専門委員会が組織され、教育内容や教育方法について集中的に討議するシンポジウムが年1回開催されている。

【分析結果とその根拠理由】

各教員の教育技術を向上するための取り組み（大学教員向けティーチング・ティップス集の配布）と、個別の授業に対して受講生から意見聴取し、その結果を担当教員にフィードバックする体制が整備されている。特に、自習教材である大学教員向けティーチング・ティップス集は、教育技法を体系的に教授する画期的な内容であり、

従来各教員の自主的な取り組みに任されてきた教育や授業の質の向上を組織的に支援するものである。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

（出典）

大学教員向けティーチング・ティップス集 DVD

授業アンケート

8.5 教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質の向上を図るための研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。（観点 8-2-②）

【情報学研究科の状況】

情報学研究科では、のべ 66 の大学院の講義および演習において、のべ 121 名の大学院学生がティーチングアシスタント（TA）として教育支援活動に従事している。教育支援活動としては、遠隔講義の機器装置支援作業といった講義実施を技術的に支援する内容から、講義資料作成補助やレポートの採点補助などの教育活動に密接に関係する内容まで含まれている。

遠隔講義支援については、TA および教員に対する説明会が各期の始めに実施されている（学術情報メディアセンターが担当）。各講義や演習の教育を支援する TA に対しては、その支援内容は対象とする講義ごとに大きく異なっているため、担当の各教員が個別に指導しており、全員を一括して対象とする研修は行われていない。

【分析結果とその根拠理由】

教育支援活動のうち遠隔講義支援などの技術的な内容については、適切な研修が組織的に行われている。講義や演習などの教育内容に直接関係する TA については、教育支援内容の多様性から一括した研修は行っておらず、各教員が個別に指導している。また、各教員には TA を活用した教育支援の実例を紹介する資料が配布され、教育内容の質の向上を支援している。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

（出典）

遠隔講義説明会資料

京都大学ティーチングアシスタント活用事例集

第9章 財政基盤及び管理運営

9.1 管理運営のための組織及び事務組織が、適切な規模と機能を持っているか。また、危機管理等に係る体制が整備されているか。(観点9-2-①)

【情報学研究科の状況】

情報学研究科には、事務長以下、23名の事務職員から構成される事務部が組織されている。事務部は、総務掛（職員3名と補佐員1名）、教務掛（職員14名と補佐員1名）、学術・管理掛（職員3名、派遣職員1名、補佐員1名）、図書室（職員1名と補佐員2名）の他、G30担当（特定職員1名、補佐員1名）、附属情報教育推進センター（補佐員1名）、および臨時用務員3名で構成されている。

情報学研究科には、研究科長、副研究科長、研究科長補佐、事務長などからなる執行部を置き、迅速な処理が求められる事項に関しては、研究科長や執行部が事務部のサポートのもとで迅速な管理運営ができる体制としている。さらに、企画委員会、評価・広報委員会、制規委員会、基盤整備委員会、財務委員会の6委員会を組織し、それぞれ審議・調査事項を明確に定義し、所掌の業務を遂行している。

セクハラやパラハラといった各種ハラスメントに対しては、以下のような規程を定めて防止ならびに啓蒙活動を行っている。

- ・京都大学大学院情報学研究科におけるハラスメント防止などに関する規程（H21.12.11 教授会制定）
- ・京都大学大学院情報学研究科人権問題等取扱要領（H21.12.11 一部改正）

研究費の不正使用防止への取組としては、京都大学作成のe-Learning「研究費等の適正な使用について」を用いた自主研修を、日本学術振興会特別研究員を含めた全教員に義務付けている。

動物実験についても、基盤整備委員会の下に動物実験小委員会を組織するとともに研究科独自の実施要項を定め、適切な動物実験の実施を図っている。

【分析結果とその根拠理由】

情報学研究科の事務部の職員数は、研究科が行っている広範囲な教育・研究活動を支援するには必ずしも十分とは言えないが、補佐員の雇用や電子メール等の活用により、効率的な事務処理が行えるように努めている。研究科の管理運営も、執行部、事務部、各種委員会が密接に協力し、迅速な処理が行える体制を構築している。

各種の事故や災害に関する危機管理マニュアルの整備は今後の課題である。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

（出典）

情報学研究科系事務職員組織図

情報学事務分担表

研究科運営組織

規程集目次

動物実験実施要領

9.2 研究科の構成員（教職員及び学生）、その他学外関係者の管理運営に関する意見やニーズが把握され、適切な形で管理運営に反映されているか。(観点9-2-②)

【情報学研究科の状況】

本学構成員や学外関係者の意見やニーズを聴取するための組織的取り組みと、それらを管理運営に反映するための取り組みとして、以下の方策が取られている。

意見やニーズ聴取の取組：

- (1) 情報学研究科との利害関係のない学外有識者を委員とするアドバイザリーボードを組織し、管理運営に関する研究科の取り組みについて忌憚のない意見を聴取している。アドバイザリーボード委員会は、これまでに平成20年1月18日、平成21年11月5日、平成23年10月21日に開催されている。
- (2) 在学生に対するカリキュラムアンケートの一環として、教育・研究環境や経済的支援制度などに関する意見

聴取を行った（平成16年12月と平成24年8月に実施）。

(3) 研究科修士生を対象に実施したアンケートにおいて、研究科の教育研究環境に関する意見聴取を行っている（平成18年7月と平成24年8月に実施）。

(4) 女子学生および女子教職員を対象とした懇談会を毎年定期的に開催し、管理運営に関する意見やニーズを組織的に収集している。

聴取意見を管理運営に反映するための取組：

アドバイザーボードでの議論内容については、非公開の研究科内部資料ではあるが討議内容の完全な記録を作成し、関係教職員に提供している。在学生アンケートについても回答内容を取りまとめて自己評価報告書に記載し、公表している。女子教職員から寄せられた意見を反映し、研究室水回り（給水管、排水管）の点検修理やエレベータの改修を行った。

【分析結果とその根拠理由】

学外有識者、学生や修士生、女子学生、女子教職員の意見やニーズを把握するよう努め、適切な形で管理運営に反映している。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

（出典）

アドバイザーボード議事録

平成19年度自己点検・評価報告書：学生に対するカリキュラムアンケート

平成19年度自己点検・評価報告書：修士生アンケート

女子学生懇談会案内

女子教職員懇談会開催案内

9.3 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に関わる職員の資質の向上のための取組が組織的に行われているか。（観点9-2-④）

【情報学研究科の状況】

教員をおよび事務職員を対象として、心の健康に問題を抱えた学生や職員への対応についての研修会を年1回程度実施している。関係者全員が出席できないことを考慮して、研修会映像・音声・研修資料を記録して、ネットワーク上で後日視聴できるよう工夫している。また、情報や情報技術の安全で効果的な活用を図るため、京都大学作成のe-Learning「情報セキュリティ」を用いた自主研修を事務職員にも義務付けている。

【分析結果とその根拠理由】

情報学研究科の管理運営という側面に特化した研修は実施していない。しかし、現在大きな社会的問題となっている「心の健康」については研究科独自の研修を実施し、教職員がより適切に対処できるように努めている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

（出典）

研修会リスト

こころの健康への注意喚起（研修会ビデオ）

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/school/index.html>

9.4 研究科の活動の総合的な状況について、根拠となる資料やデータ等に基づいて、自己点検・評価が行われているか。(観点9-3-①)

【情報学研究科の状況】

情報学研究科ではこれまでに、平成12年度、平成19年度にそれぞれ自己点検・評価を実施してきた。平成12年度の自己点検・評価は研究科の広報・図書委員会が担当し、教員や学生に対するアンケート調査の結果や、事務室から提供された各種データに基づいて分析・評価活動が行われた。平成19年度の自己点検・評価は企画・評価委員会および研究科執行部が中心となって実施され、在校生、修了生、企業の人事担当者をそれぞれ対象としたアンケート調査の結果や、事務室等から提供された各種データに基づき、平成12年度の自己点検・評価実施以降の教育・研究・管理運営等についての分析・評価が行われた。平成24年度には、本「自己点検・評価レポート」の作成作業と並行して研究科の自己点検・評価が実施されており、分析・評価結果については今後報告書の形に取りまとめる予定である。

【分析結果とその根拠理由】

平成12年度、平成19年度、平成24年度と、継続的に自己点検・評価が実施されている。教員、在校生、修了生、企業採用担当者等を対象としたアンケート調査の結果や、各種データなどの根拠資料に基づいて分析・評価が行われている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）平成12年度自己点検・評価報告書

（出典）研究科 WWW ページ (<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/archive/pdf/report.pdf>)

（データ名）平成19年度自己点検・評価報告書

（出典）研究科 WWW ページ

(<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/archive/pdf/jiko-tenken1.pdf>)

（データ名）平成19年度自己点検・評価報告書（別冊 教育活動）

（出典）研究科 WWW ページ

(<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/archive/pdf/jiko-tenken2.pdf>)

9.5 本学の活動の状況について、外部者（本学の教職員以外の者）による評価が行われているか。(観点9-3-②)

【情報学研究科の状況】

これまでの自己点検・評価活動において、在校生、修了生、企業の採用担当者を対象としたアンケート調査を実施しており、それらの結果を分析・評価に役立てている。また、平成20年度から外部有識者を構成員とする情報学研究科アドバイザーボードを設置し、研究科の現況を報告し助言を受ける体制を整えている。

【分析結果とその根拠理由】

外部者を対象としたアンケート調査が継続的に実施されていること、ならびに情報学研究科アドバイザーボードが設置され活動していることにより、外部者による研究科の活動状況についての評価が行われているものと判断される。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）各種アンケート調査結果

（出典）平成19年度自己点検・評価報告書（別冊 教育活動）付録 資料集

（研究科 WWW ページ <http://www.i.kyoto-u.ac.jp/archive/pdf/jiko-tenken2.pdf>)

（データ名）第3回アドバイザーボード

（出典）内部資料

9.6 評価結果がフィードバックされ、改善のための取組が行われているか。(観点9-3-③)

【情報学研究科の状況】

研究科の活動の評価業務と、それに基づく改善への取組とを組織構成上切り分けるために、従前は企画・評価委員会においてこれらの業務を所掌していたものを、平成22年度に評価・広報委員会と企画委員会とに再編し、前者が活動の評価に関する業務を、後者が改善のための方策立案をそれぞれ担う形とした。

具体的な事例のひとつとして、平成19年度の自己点検・評価の結果を踏まえ、ICT連携推進ネットワークが企画し実施しているICTイノベーションにおいて企業説明会を併催し、学生に最新の就職情報を提供する機会を設けたことが挙げられる。

【分析結果とその根拠理由】

上述の委員会構成の再編により、評価業務とそれに基づく企画立案業務とが組織構成上明確に区別され、現在の委員会構成においてはそれぞれの役割が明確化されている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）各種委員会の審議および調査事項

（出典）情報学研究科各種委員会運営内規 別表

第 10 章 教育情報等の公表

10.1 研究科の目的が、適切に公表されるとともに、構成員（教職員及び学生）に周知されているか。（観点 10－1－①）

【情報学研究科の状況】

情報学研究科は、「情報学」という新たな学問領域の創設を目指して教育研究活動を行っている。そのため、「情報学」の位置付けとともに、教育研究上の目的をホームページならびに情報学研究科紹介冊子（和文および英文）にて公表・周知している。ホームページにて公表している内容には、教育研究上の目的に加えて、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーも含まれる。

情報学研究科内の各専攻では、入学希望者に対して入試説明会を開催しているが、その際にも情報学研究科の目的について参加者に周知している。入学時には、新入生ガイダンスを実施しており、情報学研究科の目的を周知すると共に、カリキュラム・ポリシーに沿った適切な科目の履修方法について説明している。

【分析結果とその根拠理由】

情報学研究科の目的は、ホームページや研究科紹介冊子などで広く公表している。また、入学者への周知も適切に行われている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）

情報学研究科ホームページ（<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/>）

新入生ガイダンスでの配布資料

（出典）

10.2 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されているか。（観点 10－1－②）

【情報学研究科の状況】

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー（研究科、各専攻）、教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）は、研究科ホームページにて公表している。カリキュラム・ポリシーならびにディプロマ・ポリシーについては、在校生、教員に対して各年度に配布している「大学院学修要覧」にも記載するとともに、ガイダンスにおいても説明を行うことで周知を図っている。

【分析結果とその根拠理由】

アドミッション・ポリシー（研究科、各専攻）、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーはいずれも研究科ホームページに掲載されており、学外の関係者に対して広く公表されている。また、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについては「大学院学修要覧」に記載されているとともにガイダンスの機会も利用して周知が図られている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）研究科ホームページ「教育研究上の目的」ならびに「受入方針」

（出典）<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/introduction/admission.html>

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/admission/policy.html>

（データ名）「情報学研究科ディプロマポリシー及びカリキュラムポリシーについて」

（出典）平成 24 年度大学院学修要覧

10.3 教育研究活動等についての情報（学校教育法施行規則第 172 条の 2 に規定される事項を含む。）が公表されているか。（観点 10－1－③）

【情報学研究科の状況】

教育についての基本情報である

＊教育研究上の基本組織

＊教員組織、および各教員が有する学位や業績

＊授業科目の内容や授業方法ならびに授業計画や学修成果の評価法

などは、研究科のホームページにて公表している。

教育研究活動の外部評価結果や自己点検・評価結果についても報告書にまとめ、研究科のホームページにて公表している。

情報学研究科ホームページは平成 23 年度に多言語化を実施しており、日本語、英語に加えて中国語（簡体字、繁体字）、韓国語での情報発信を行っている。

【分析結果とその根拠理由】

情報学研究科の教育研究活動情報はホームページに掲載され、公表されている。ホームページを多言語化したことにより、日本語、英語に加えて中国語（簡体字、繁体字）、韓国語での情報発信が行われている。

「情報学研究科の状況」の根拠となる資料一覧（データ名・出典）

（データ名）情報学研究科ホームページ（<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/>）

（出典）

付 録

付録 資料集

A.1 情報学研究科の教育に関する各種データ

A.1.1 情報学研究科の専攻・講座・分野・教員配置（平成 24 年 5 月 1 日）

専攻	講座名	分野名	
知能情報学	生体・認知情報学講座	生体情報処理	
		認知情報論	
		聴覚・音声情報処理	連携（発足時）
	知能情報ソフトウェア講座	ソフトウェア基礎論	
		知能情報基礎論	
		知能情報応用論	
	知能メディア講座	言語メディア	
音声メディア			
画像メディア			
生命情報学講座		発足後	
メディア応用講座	映像メディア	協力（発足時）	
	ネットワークメディア	協力（発足時）	
	メディアアーカイブ	協力（発足時）	
生命システム情報学講座	バイオ情報ネットワーク	協力（発足時）	
社会情報学	社会情報モデル講座	分散情報システム	
		情報図書館学	
		情報社会論	連携（発足時）
	社会情報ネットワーク講座	広域情報ネットワーク	
		情報セキュリティ	連携（発足時）
		市場・組織情報論	連携（発足時）
	生物圏情報学講座	生物資源情報学	
地域・防災情報システム学講座	生物環境情報学		
	総合防災システム	協力（発足時）	
	巨大災害情報システム	協力（発足時）	
医療情報学講座	社会情報心理学	協力（発足時）	
情報フルーエンシー教育講座		協力（発足時）	
複雑系科学	応用解析学講座	逆問題解析	
		非線形解析	
	複雑系力学講座	非線形力学	
応用数理学講座	複雑系数理		
	計算力学		
	知能化システム		
数理工学	応用数学講座	数理解析	
		離散数理	
	システム数理講座	最適化数理	
		制御システム論	
	数理物理学講座	応用数理モデル	連携（発足時）
数理ファイナンス講座	物理統計学		
	力学系理論		
システム科学	人間機械共生系講座	機械システム制御	
		ヒューマンシステム論	
		共生システム論	
	システム構成論講座	適応システム論	
		数理システム論	
システム情報論講座	情報システム		
	論理生命学		
医用工学			
応用情報学講座		協力（発足時）	
通信情報システム	コンピュータ工学講座	論理回路	
		計算機アーキテクチャ	
		計算機ソフトウェア	
	通信システム工学講座	デジタル通信	
		伝送メディア	
		知的通信網	
	集積システム工学講座	情報回路方式	
大規模集積回路			
地球電波工学講座	超高速信号処理		
	リモートセンシング工学	協力（発足時）	
	地球大気計測	協力（発足時）	

A.1.2 修士課程志願者・入学者の推移

修士課程 志願者、合格者、補欠者、辞退者、入学者、充足率

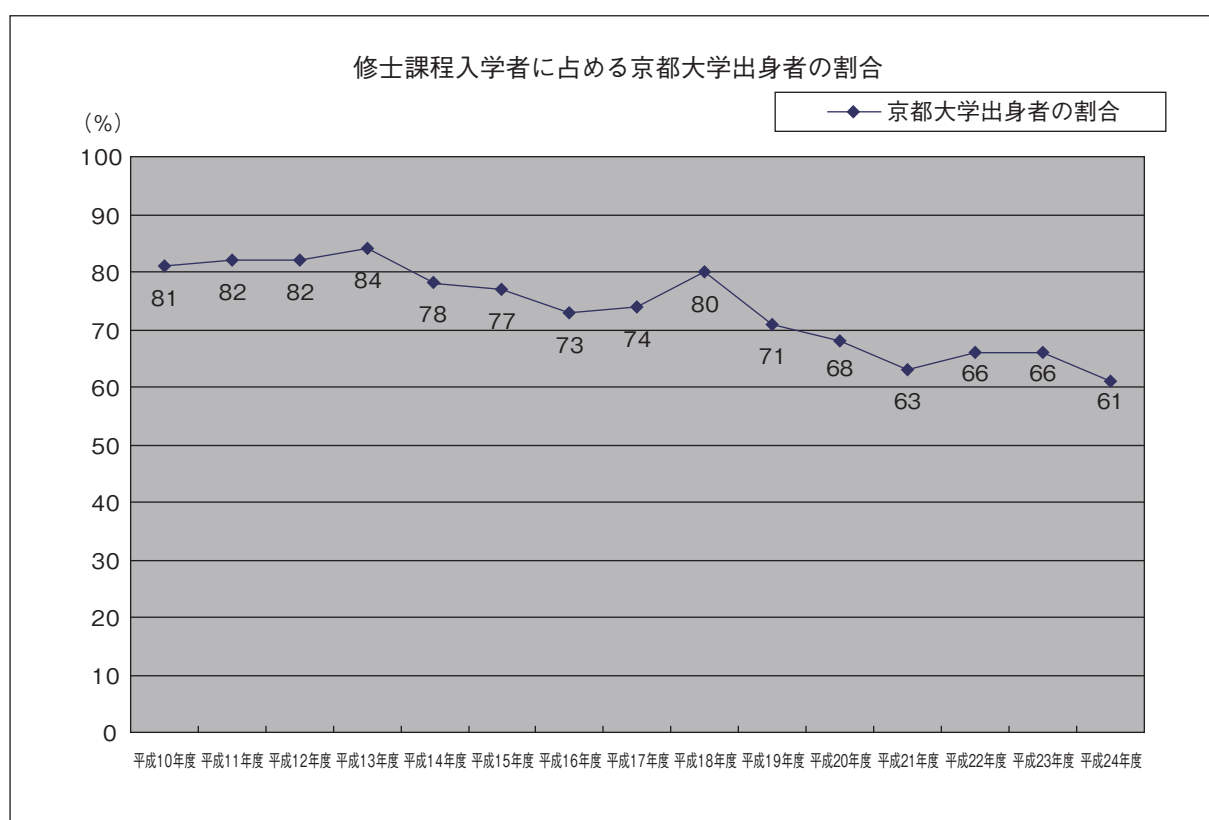
		知能	社会	複雑	数理	システム	通信	合計
H20/4	志願者	51	39	34	30	48	47	249
	合格者	40	34	18	24	37	36	189
	補欠者	3	0	0	0	5	0	8
	辞退者	8	0	3	2	2	1	16
	入学者数	32	34	15	22	36	35	174
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	86.5%	94.4%	75.0%	100.0%	112.5%	83.3%	92.1%
H21/4	志願者	57	53	20	37	48	48	263
	合格者	45	40	11	26	40	36	198
	補欠者	1	0	0	3	2	0	6
	辞退者	3	2	1	2	9	2	19
	入学者数	42	38	10	26	32	34	182
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	113.8%	105.6%	50.0%	118.2%	103.1%	80.9%	101.6%
H21/10	志願者	5	2	1	1	1	1	11
	合格者	2	2	0	1	1	1	7
	補欠者	0	0	0	0	0	0	0
	辞退者	0	0	0	0	0	0	0
	入学者数	2	2	0	1	1	1	7
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	118.9%	111.1%	50.0%	104.5%	103.1%	83.3%	100.0%
H22/4	志願者	75	46	22	35	41	51	264
	合格者	47	38	16	23	31	42	197
	補欠者	4	0	0	0	0	3	7
	辞退者	5	2	2	1	5	1	16
	入学者数	44	36	14	22	26	42	184
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	124.3%	105.6%	70.0%	113.6%	84.4%	102.4%	102.1%
H22/10	志願者	12	6	1	5	2	3	29
	合格者	2	3	0	4	1	1	11
	補欠者	0	0	0	0	0	0	0
	辞退者	0	1	0	1	0	0	2
	入学者数	2	2	0	3	1	1	9
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	124.3%	105.6%	70.0%	113.6%	84.4%	102.4%	102.1%
H23/4	志願者	63	54	38	39	64	55	313
	合格者	42	40	18	27	39	39	205
	補欠者	5	0	0	0	13	2	20
	辞退者	2	1	1	3	11	5	23
	入学者数	40	39	17	24	36	36	192
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	113.8%	108.3%	85.0%	109.1%	112.5%	85.7%	106.3%
H23/10	志願者	5	3	1	0	0	6	15
	合格者	3	1	0	0	0	6	10
	補欠者	0	0	0	0	0	0	0
	辞退者	0	0	0	0	0	1	1
	入学者数	3	1	0	0	0	5	9
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	116.2%	111.1%	85.0%	109.1%	112.5%	97.6%	106.3%
H24/4	志願者	53	54	33	29	49	64	282
	合格者	43	41	19	23	38	45	209
	補欠者	0	0	0	0	5	0	5
	辞退者	4	3	2	2	13	3	27
	入学者数	39	38	17	21	30	42	187
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	110.8%	125.0%	85.0%	95.5%	100.0%	104.8%	105.8%
H24/10	志願者	3	7	0	0	3	4	17
	合格者	2	7	0	0	2	2	13
	補欠者	0	0	0	0	0	0	0
	辞退者	0	0	0	0	0	0	0
	入学者数	2	7	0	0	2	2	13
	定員	37	36	20	22	32	42	189
	充足率	110.8%	125.0%	85.0%	95.5%	100.0%	104.8%	105.8%

A.1.3 修士課程入学者出身校

修士課程入学者 出身校内訳（平成 20～24 年度）

入学年度 (平成)	京都大学		国内他大学			外国 大学	その他	計
	合計	内訳	国立	公立	私立			
20	119	工 111、総人 2、農 2、理 3、経済 1	23	6	16	8	2	174
21	117	工 109、農 2、理 6	27	6	15	16	1	182
2110	2	工 2				5		189
22	127	工 117、総人 2、農 3、理 5	21	9	10	11	6	184
2210	1	工 1				8		193
23	132	工 119、総人 3、法 1、理 7、農 2	22	4	10	20	4	192
2310	1	工 1				8		201
24	118	工 110、総人 3、理 3、農 2	25	8	16	17	3	187
2410	4	工 4			1	8		200

修士課程入学者に占める京都大学出身者の割合（平成 10 年度～24 年度）



飛び入学による入学者数

年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
修士課程	0	1	0	0	0

注) 博士後期課程の飛び入学による入学生については、該当者はいない。

A.1.4 留学生の受け入れ状況

留学生の受け入れ状況と私費留学生に対する奨学金

(注)：研究生以外の学生のデータは、各年度の5月1日現在の人数である。

過年度学生は、修士2回生、博士3回生に含めている。

研究生のデータは、各年度の4月から3月までの受入れ人数であり、短期の在籍者も含む。

学習奨励費とは、文部科学省が私費留学生に対して出している奨学金のことである。「一般」は、学習奨励費以外の全ての奨学金を指す。

平成20年度

学年	人数	国費	私費	国籍	奨学金受給状況
修士1回生	10	1	9	中国6名、韓国1名、台湾1名、米国1名、ルーマニア1名	一般3名
修士2回生	20	4	16	中国11名、韓国2名、メキシコ2名、インドネシア1名、ベトナム1名、米国1名、ナイジェリア1名、フランス1名	学習奨励費6名、一般5名
博士1回生	9	5	4	中国2名、ベトナム2名、フランス2名、インドネシア1名、エジプト1名、タイ1名	一般3名
博士2回生	9	7	2	中国3名、フランス2名、米国2名、オーストラリア1名、台湾1名	-
博士3回生	15	5	10	中国5名、韓国3名、エジプト2名、フランス2名、台湾2名、モンゴル1名	学習奨励費1名
研究生	11	2	9	中国6名、タイ2名、台湾1名、ドイツ1名、フランス1名	一般1名
合計	74	24	50		19名

平成21年度

学年	人数	国費	私費	国籍	奨学金受給状況
修士1回生	17	3	14	中国13名、イエメン1名、バングラデシュ1名、ボスニア・ヘルツェゴビナ1名、台湾1名	学習奨励費7名、一般4名
修士2回生	13	1	12	中国7名、米国2名、韓国1名、ベトナム1名、ルーマニア1名、台湾1名	学習奨励費5名、一般2名
博士1回生	17	14	3	中国2名、韓国2名、インドネシア2名、ロシア2名、イラン1名、タイ1名、フィンランド1名、フランス1名、ベトナム1名、ベルギー1名、ルクセンブルク1名、モロッコ1名、台湾1名	-
博士2回生	9	5	4	中国2名、フランス2名、ベトナム2名、インドネシア1名、エジプト1名、タイ1名	一般2名
博士3回生	14	7	7	中国4名、フランス3名、エジプト2名、米国2名、台湾2名、オーストラリア1名	-
研究生	10	1	9	中国8名、タイ1名、韓国1名	-
合計	80	31	49		20名

平成 22 年度

学年	人数	国費	私費	国 籍	奨学金受給状況
修士 1 回生	17	2	15	中国 11 名、韓国 1 名、台湾 1 名、インドネシア 1 名、カナダ 1 名、コートジボワール 1 名、ニュージーランド 1 名	一般 4 名
修士 2 回生	17	3	14	中国 13 名、バングラデシュ 1 名、台湾 1 名、イエメン 1 名、ボスニア・ヘルツェゴビナ 1 名	学習奨励費 2 名、一般 3 名
博士 1 回生	13	8	5	中国 4 名、韓国 3 名、ベトナム 2 名、イラン 1 名、カナダ 1 名、ラトビア 1 名、米国 1 名	学習奨励費 2 名
博士 2 回生	17	14	3	中国 2 名、韓国 2 名、インドネシア 2 名、ロシア 2 名、イラン 1 名、タイ 1 名、フィンランド 1 名、フランス 1 名、ベトナム 1 名、ベルギー 1 名、ルクセンブルク 1 名、モロッコ 1 名、台湾 1 名	-
博士 3 回生	8	4	4	フランス 2 名、ベトナム 2 名、中国 1 名、インドネシア 1 名、エジプト 1 名、タイ 1 名	-
研 究 生	13	3	10	中国 9 名、韓国 2 名、インドネシア 1 名、ベルギー 1 名	-
合 計	85	34	51		11 名

平成 23 年度

学年	人数	国費	私費	国 籍	奨学金受給状況
修士 1 回生	31	4	27	中国 25 名、インドネシア 1 名、タンザニア 1 名、トルコ 1 名、マカオ 1 名、韓国 1 名、米国 1 名	学習奨励費 4 名、一般 2 名
修士 2 回生	19	2	17	中国 11 名、台湾 2 名、韓国 1 名、インドネシア 1 名、カナダ 1 名、コートジボワール 1 名、ニュージーランド 1 名、イエメン 1 名	学習奨励費 1 名、一般 3 名
博士 1 回生	15	9	6	中国 8 名、イラン 1 名、スペイン 1 名、タイ 1 名、バングラデシュ 1 名、ベルギー 1 名、韓国 1 名、米国 1 名	学習奨励費 1 名、一般 1 名
博士 2 回生	13	8	5	中国 4 名、韓国 3 名、ベトナム 2 名、イラン 1 名、カナダ 1 名、ラトビア 1 名、米国 1 名	学習奨励費 2 名
博士 3 回生	18	13	5	中国 3 名、韓国 2 名、ロシア 2 名、ベトナム 2 名、インドネシア 1 名、イラン 1 名、タイ 1 名、フィンランド 1 名、フランス 1 名、ベルギー 1 名、ルクセンブルク 1 名、モロッコ 1 名、台湾 1 名	一般 2 名
研 究 生	13	4	9	中国 10 名、韓国 1 名、ベルギー 1 名、ネパール 1 名	-
合 計	109	40	69		16 名

平成 24 年度

学年	人数	国費	私費	国 籍	奨学金受給状況
修士 1 回生	31	5	26	中国 24 名、韓国 3 名、イラン 1 名、タイ 1 名、 バングラデシュ 1 名、英国 1 名	学習奨励費 1 名
修士 2 回生	33	4	29	中国 25 名、韓国 2 名、インドネシア 1 名、タ ンザニア 1 名、トルコ 1 名、マカオ 1 名、米 国 1 名、イエメン 1 名	学習奨励費 3 名、一般 3 名
博士 1 回生	24	15	9	中国 12 名、マレーシア 2 名、イラン 1 名、カ ナダ 1 名、タイ 1 名、ニュージーランド 1 名、 ネパール 1 名、バングラデシュ 1 名、ベルギー 1 名、マケドニア 1 名、英国 1 名、台湾 1 名	学習奨励費 3 名、一般 1 名
博士 2 回生	15	9	6	中国 8 名、イラン 1 名、スペイン 1 名、タイ 1 名、 バングラデシュ 1 名、ベルギー 1 名、韓国 1 名、 米国 1 名	-
博士 3 回生	15	7	8	中国 5 名、韓国 3 名、ベトナム 2 名、イラン 1 名、 カナダ 1 名、ラトビア 1 名、フィンランド 1 名、 モロッコ 1 名	学習奨励費 1 名、一般 1 名
研 究 生	9	2	7	中国 7 名、台湾 2 名	-
合 計	127	42	85		13 名

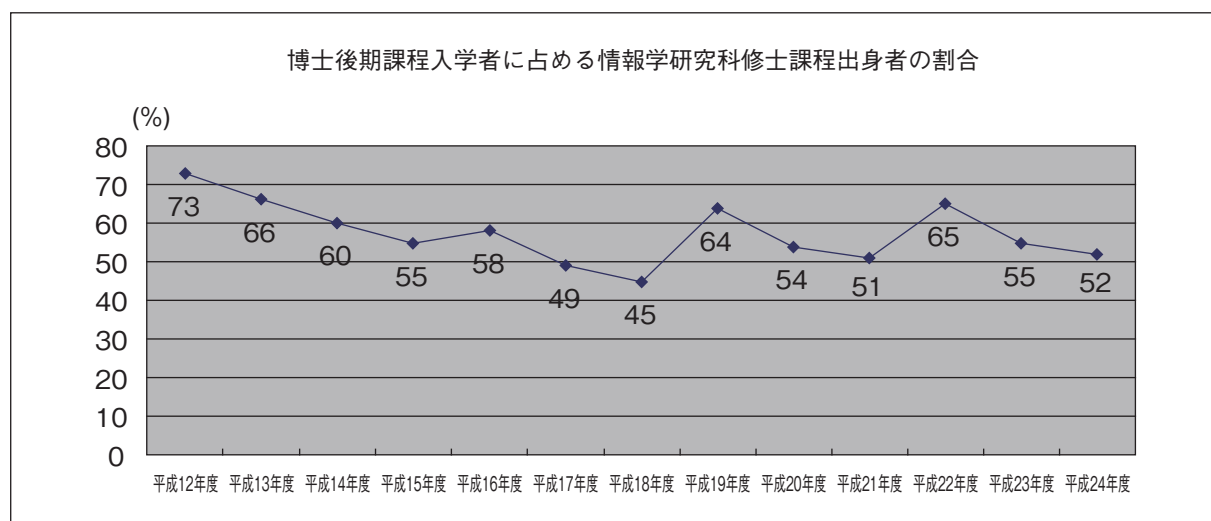
A.1.5 博士後期課程入学者出身校

博士後期課程入学者 出身校内訳（平成 20～24 年度）

入学年度 (年度)	本研究科 修士課程	京都大学他研究科修士課程	国内他大学大 学院修士課程			外国の大学 (含留学生)	その他	左記の内 社会人	計
			国立	公立	私立				
20 (4月)	22	農 1、工 2	4	0	1	4	2	8	36
20 (10月)	2		1	0	1	10	0	2	14
21 (4月)	19	経営管理 1、理 1、工 1	5	0	3	3	2	8	35
21 (10月)	4		3	0	1	8	0	3	16
22 (4月)	28	工 1	2	0	3	1	1	6	36
22 (10月)	1	理 1、工 1	2	0	1	7	0	5	13
23 (4月)	21	工 2	3	1	1	4	0	6	32
23 (10月)	6		1	1	0	12	0	6	20
24 (4月)	18	工 1	7	0	3	5	1	6	35
24 (10月)	10		2	0	1	7	0	4	20

(注) 「その他」の欄は、学部出身者の人数である。

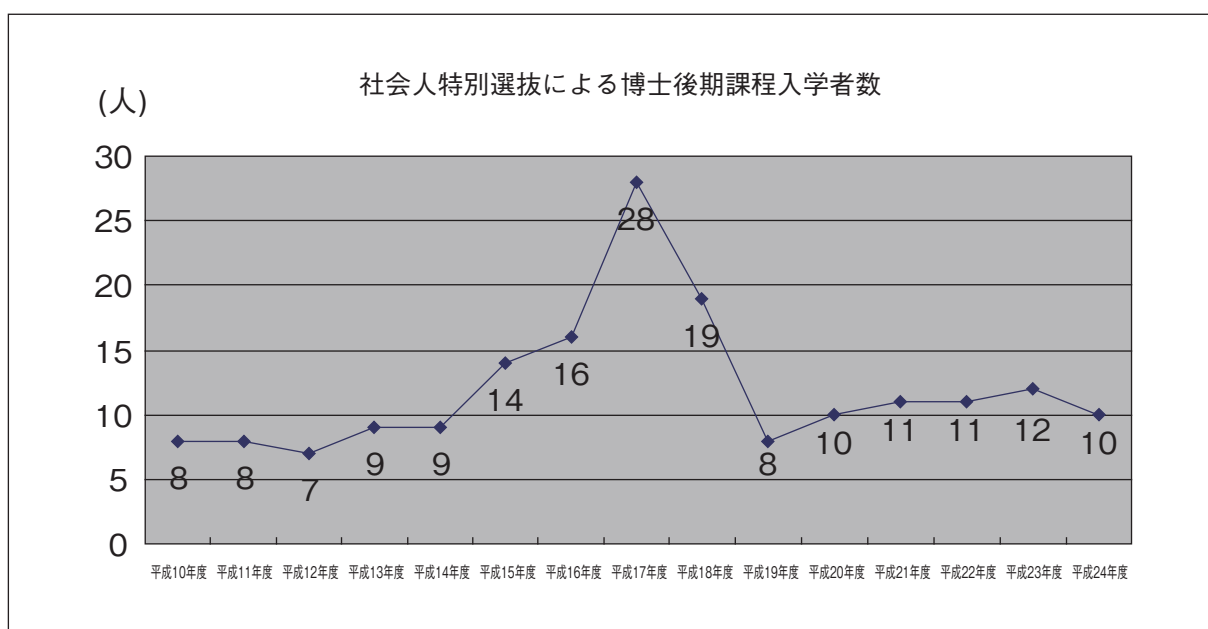
博士後期課程入学者に占める情報学研究科修士課程出身者の割合（平成 12 年度～24 年度）



A.1.6 博士後期課程「社会人特別選抜」による専攻別入学者

博士後期課程「社会人特別選抜」による専攻別入学者

入学時期	知能 情報学	社会 情報学	複雑系 科学	数理工学	システム 科学	通信情報 システム	計
平成 20 年度 4 月期	1			1	4	2	8
平成 20 年度 10 月期					1	1	2
平成 21 年度 4 月期	4	2	1			1	8
平成 21 年度 10 月期	1					2	3
平成 22 年度 4 月期		1		1		4	6
平成 22 年度 10 月期		1		1	1	2	5
平成 23 年度 4 月期	1	3		1		1	6
平成 23 年度 10 月期	2	2			1	1	6
平成 24 年度 4 月期	2	1				3	6
平成 24 年度 10 月期	3					1	4



A.1.7 修士課程カリキュラム例

平成 24 年度知能情報学専攻

修了に必要な単位数

科目区分	履修区分	単位数	備考
研究指導科目	必修	12	知能情報学特殊研究 1、同 2
研究科共通展望科目	選択必修	2 以上 4 以下	
自専攻開設科目	選択	6 以上	「知能情報学特別研究」以外の科目
合計		30 以上	

(注1) 下記のとおりで E と表記されている授業科目は英語だけでも修得できる講義科目である。同一内容の日本語名の授業科目がある場合には、英語講義科目または日本語講義科目のいずれかの単位のみ認定される。

(注2) 履修にあたっては、別途配布の「履修の手引き」を参照の上、必ず指導教員の履修指導を受けること。

	授業科目名	担当教員	毎週時数		単位	備考
			前	後		
研究指導科目	知能情報学特殊研究 1	指導教員			6	E 必修・通年 (修士 1 年次配当)
	知能情報学特殊研究 2	指導教員			6	E 必修・通年 (修士 2 年次配当)
研究科共通展望科目	情報学展望 1	岡部・上田	2		2	
	情報学展望 2	Liu,Tong,Iso ^o	2		2	E
	情報学展望 3	未定 (外国人客員教員)		2	2	E
	情報学展望 4	山本 (章)・田中 (克)・岩間・Liang・Cuturi・Jatowt・Kinny・Trifkovic・Avis	2		2	E
	情報学展望 5	山本 (章)・田中 (克)・岩間・Liang・Cuturi・Jatowt・Kinny・Trifkovic・Avis		2	2	E
	計算科学入門*	中村 (佳)・船越・木村・矢作・藤原他	2		2	
	計算科学演習 A*	矢作・木村	1		1	
	情報と知財*	田中 (克) 他		2	2	
	イノベーションマネジメント基礎*	前川・原・田中 (克) 他	2		2	
	情報分析・管理論*	浅野・中村 (聡)	2		2	前期・後期同内容
	情報分析・管理演習*	浅野・中村 (聡)		2	2	
	情報分析・管理演習*	中村 (聡)・浅野	1		1	前期・後期同内容
	情報分析・管理演習*	中村 (聡)・浅野		1	1	
	情報学による社会貢献	研究科長			(1)	E 実習 45 時間
情報学におけるインターンシップ	研究科長			(1)	E 実習 45 時間	
専攻基礎科目	生命科学基礎論	細川・前川 (真)	2		2	
	認知科学基礎論	乾・水原	2		2	(修士 1 年次配当)
	情報科学基礎論	山本 (章)・西田・黒橋・奥乃・松山・美濃・岡部・河原 (達)	2		2	前期・後期同内容
	情報科学基礎論	Liang・Cuturi		2	2	E 前期・後期同内容
	生命情報学基礎論	阿久津・矢田・市瀬	2		2	併せて生命科学基礎論の履修が望ましい
	生体情報処理演習	細川・前川 (真)	(2)		2	
	認知科学演習	乾・水原		(2)	2	(修士 1 年次配当)
	ソフトウェア基礎論	五十嵐 (淳)		2	2	
	知能情報システム特論	山本 (章)・Cuturi	2		2	E
	知能情報学特別講義	土佐		2	2	
	パターン認識特論	松山・河原 (達)・森・延原・Liang	2		2	E
	人工知能特論	西田・大本	2		2	前期・後期同内容
	人工知能特論	西田・大本		2	2	E 前期・後期同内容
	マルチメディア通信	岡部・宮崎 (修一)		2	2	
	音声情報処理特論	奥乃・河原 (達)・正木・西村		2	2	E
	言語情報処理特論	黒橋・河原 (大)・Cuturi	2		2	E
	コンピュータビジョン	松山・川嶋・延原・Liang		2	2	E
ビジュアル・インタラクション	美濃・椋木		2	2		
知能情報学特別研究	全員	(6)	(6)	6	E 通年 (修士 2 年次配当)	
専攻開設科目	信号処理セミナー	奥乃・糸山			(2)	(4 月集中 木・金 13:00 ~ 18:00)
	実世界インタラクションの計測分析法	大本・水原	2		(2)	
	計算科学演習 B*	岩下・中島・木村・矢作	1		1	夏期集中
	計算科学特論*	木村・小山田他	2		2	
	情報と教育*	稲葉・石田	2		2	

プロジェクト科目

(修了に必要な単位として算入されない)

授業科目名	担当教員	毎週時数		単位	備考
		前	後		
信号処理セミナー	奥乃・糸山			(2)	(4 月集中 木・金 13:00 ~ 18:00)
実世界インタラクションの計測分析法	大本・水原	2		(2)	
計算科学演習 B*	岩下・中島・木村・矢作	1		1	夏期集中
計算科学特論*	木村・小山田他	2		2	
情報と教育*	稲葉・石田	2		2	

A.1.8 シラバス例（通信情報システム専攻、専攻専門科目）

授業科目名 デジタル信号処理論
<英訳> Digital Signal Processing, Adv.

【担当者氏名】 情報学研究科 教授 佐藤 亨

【配当学年】 1 回生以上 【単位数】 2 【開講期】 前期 【曜時限】 水 3

【授業形態】 講義 【授業種別】 専攻専門科目 【授業言語】 日本語

【授業の概要・目的】

デジタル信号処理の基礎となる時間周波数解析の各手法について講述し、この観点からウェーブレット解析およびこれを用いた帯域分割フィルタや適応的信号圧縮等について議論する。さらに、適応的アレイ信号処理について講述する。

This lecture discusses various time-frequency analysis methods, which constitute an important basis of digital signal processing. They include wavelet analysis and its applications such as subband filters and adaptive signal compression. We also explain basics of adaptive array signal processing.

【授業計画と内容】

時間周波数解析（5～6回）：フーリエ変換と短時間フーリエ変換の関係から時間周波数分解能、解析関数、瞬時周波数などの概念について解説する。続いてWigner分布、平滑化疑似Wigner分布等の手法を説明する。応用としてAmbiguity関数、パルス圧縮などについても述べる。

ウェーブレット解析（3～5回）：連続および離散ウェーブレット変換と正規直交ウェーブレット生成のための多重解像度解析の原理について解説し、各種のスケーリング関数・ウェーブレット関数の例を述べる。応用として帯域分割フィルタや適応的信号圧縮等を扱う。適応的アレイ信号処理（3～5回）：空間を利用した信号分離の手法としてのアダプティブアンテナについて説明する。MMSE、DCMP等各種の手法について説明し、その応用としてCapon法、MUSIC法等の到来方向推定手法を扱う。

Time-frequency analysis (5-6 weeks): Starting from the relation between the Fourier transform and Short-Time Fourier Transform, we study ideas such as time-frequency resolution, analytic function, and instantaneous frequency, followed by real examples of Wigner distribution, Smoothed Pseudo Wigner distribution, etc. Applications include the ambiguity function and pulse compression.

Wavelet analysis (3-5 weeks): We first study principles of continuous and discrete wavelet transforms, and the multi-scale analysis. We then study various scaling and wavelet function. We also treat multiband filtering and adaptive signal compression as application examples.

Adaptive array signal processing (3-5 weeks): We study principles of adaptive array antenna technique such as MMSE and DCMP. We also deal with Direction-of-arrival (DOA) estimation with the Capon method and MUSIC algorithm.

【履修要件】

予備知識：フーリエ解析、変復調方式、デジタルフィルタ、アレイアンテナ
Required background: Fourier analysis, Modulation theory, Digital filters, Array antenna

【成績評価の方法・基準】

レポート（3回程度）を課し、必要に応じて定期試験を行う。

Grading is based on reports of homeworks (about 3 topics), and regular examination if needed.

【教科書】

使用しない

【参考書等】

（参考書）

C. S. Burrus et al. 『Introduction to Wavelets and Wavelet Transforms』 (Prentice Hall)

菊間信良

N. Kikuma 『アダプティブアンテナ技術

Adaptive antenna technique (in Japanese)』 (オーム社

Ohm-sha)

（関連URL）

<http://www-lab26.kuee.kyoto-u.ac.jp/~tsato/ds.html>(授業資料 Lecture notes)

（その他（授業外学習の指示・オフィスアワー等））

オフィスアワー：水曜日4時限

Office hours: Wed 4

※オフィスアワー実施の有無は、KULASIS で確認してください。

A.1.9 修士課程授業時間割 (平成 24 年度前期・後期)

平成24年度 前期時間割表

大学院情報学研究科

曜	時間	知能情報学専攻	社会情報学専攻	複雑系科学専攻	
月	8:45~10:15				
	10:30~12:00	認知科学基礎論 (乾・水原)	2号館 101		
	13:00~14:30	言語情報処理特論 (黒橋・河原(大)・Cuturi)	総合校舎 213		
	14:45~16:15	生命情報学基礎論 (阿久津・矢田・市瀬)	情報2	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 201
		情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 201		応用解析学通論B (磯)
16:30~18:00	生体情報処理演習 (細川・前川(真))	吉田南 共北3A	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 201	
	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 201			
	情報学展望4	総合校舎 213	情報学展望4	総合校舎 213	
火	8:45~10:15	情報科学基礎論(山本・西田・黒橋・奥乃・松山・美濃・岡部・河原(達))	情報2		
	10:30~12:00	知能情報システム特論 (山本・Cuturi)	8号館講義室 4 <旧共同6>	情報システム設計論I (石田・松原・Kinny・村上)	
	13:00~14:30			情報システム設計論I演習 (石田・松原・Kinny・村上)	
	14:45~16:15			情報システム分析論演習(酒井・守屋・田中・荒井・松井・Trifkovic)	
	16:30~18:00	情報と教育 (石田・稲葉)	学メ南 201	情報と教育 (稲葉・石田)	
水	8:45~10:15	人工知能特論 (西田・大本)	情報1	危機管理特論 (林・牧・鈴木)	
	10:30~12:00	パターン認識特論 (松山・河原(達)・森・延原・Liang)	情報1	情報社会論 (吉川・田中・Jatowt・石田・Kinny・酒井・守屋・Trifkovic)	
	13:00~14:30	実世界インタラクションの計測分析法 (大本・水原)	10号館 223	防災情報特論 (多々納・矢守・畑山・鈴木)	
	14:45~16:15	実世界インタラクションの計測分析法 (大本・水原)	10号館 223		
	16:30~18:00	計算科学入門(中村(佳)・船越・木村・矢作・藤原他)	学メ南 201	計算科学入門(中村(佳)・船越・木村・矢作・藤原他)	
木	8:45~10:15	計算科学演習A (矢作・木村)	学メ南 201	計算科学演習A (矢作・木村)	
	10:30~12:00			情報システム分析論(酒井・守屋・田中・荒井・松井・Trifkovic)	
	13:00~14:30	イノベーションマネジメント基礎 (前川・原・田中)	共南11	情報システム設計論II(吉川・田中・田島・中村・Jatowt・馬)	情報2 (日)
				イノベーションマネジメント基礎 (前川・原・田中)	共南11
	14:45~16:15			情報システム設計論II演習(吉川・田中・田島・中村・Jatowt・馬)	情報2 (日)
16:30~18:00	計算科学特論 (木村・小山田他)	総合校舎 213	情報システム設計論II演習(吉川・田中・田島・中村・Jatowt・馬)	情報2 (日)	
			計算科学特論 (木村・小山田他)	総合校舎 213	
金	8:45~10:15	生命科学基礎論 (細川・前川(真))	先端 103		
	10:30~12:00	情報学展望1	8号館講義室 2 <旧共同2>	情報学展望1	
		情報学展望2	2号館 101	情報学展望2	
	13:00~14:30	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学特殊研究1・2	総合 213
	14:45~16:15	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学特殊研究1・2	総合 213
16:30~18:00	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学特殊研究1・2	総合 213	

(4月集中) 信号処理セミナー(奥乃・糸山)
木・金13:00~18:00 情報3

平成24年度 前期時間割表

大学院情報学研究科

曜	時間	数理工学専攻		システム科学専攻		通信情報システム専攻		
月	8:45~10:15							
	10:30~12:00			機械システム制御論 (杉江・東)	物理 315			
	13:00~14:30			医用システム論 (松田・中尾・嶋吉)	8号館講義室 3 <旧共同5>	伝送メディア工学特論 (守倉・山本(高))	3号館 N4	
	14:45~16:15	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 201	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 201	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 201	
	16:30~18:00	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 201	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 201	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 201	
		情報学展望4	総合校舎 213	情報学展望4	総合校舎 213	情報学展望4	総合校舎 213	
火	8:45~10:15							
	10:30~12:00	数理物理学通論 (岩井・梅野・五十嵐)	8号館講義室 3 <旧共同5>			情報ネットワーク (高橋・新熊)	3号館 N1	
	13:00~14:30			統計のシステム論 (酒井・林)	総合 213	プログラミング言語特論 (八杉) 期間中8回・2限連続	情報1	
	14:45~16:15					プログラミング言語特論 (八杉) 期間中8回・2限連続	情報1	
	16:30~18:00	情報と教育 (石田・稲葉)	学メ南 201	情報と教育 (石田・稲葉)	学メ南 201	通信情報システム特別講義1 (荻原) 情報と教育 (石田・稲葉)	情報1 学メ南 201	
水	8:45~10:15	力学系理論特論 (岩井)	2号館 101			離散アルゴリズム理論 (岩間)	情報2	
	10:30~12:00					応用集積システム (佐藤(高)・越智) アルゴリズムと情報学入門(Avis)	3号館 N1 8号館講義室 2 <旧共同2>	
	13:00~14:30			論理生命科学 (石井・大羽)	総合 213	デジタル信号処理論 (佐藤(亨))	3号館 N4	
	14:45~16:15					集積回路工学特論 (小野寺)	3号館 N1	
	16:30~18:00	計算科学入門 (中村(佳)・船越・木村・矢作・藤原他)	学メ南 201	計算科学入門 (中村(佳)・船越・木村・矢作・藤原他)	学メ南 201	計算科学入門 (中村(佳)・船越・木村・矢作・藤原他)	学メ南 201	
木	8:45~10:15	計算科学演習A (矢作・木村)	学メ南 201	計算科学演習A (矢作・木村)	学メ南 201	Computational Intractability (Avis) 計算科学演習A (矢作・木村)	情報1 学メ南 201	
	10:30~12:00	最適化数理特論 (福嶋・山下)	8号館講義室 3 <旧共同5>	適応システム論 (田中・大久保)	総合 213	デジタル通信工学 (吉田)	3号館 N1	
	13:00~14:30	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)			通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)	
		イノベーションマネジメント基礎 (前川・原・田中)	共南11	イノベーションマネジメント基礎 (前川・原・田中)	共南11	イノベーションマネジメント基礎 (前川・原・田中)	共南11	
	14:45~16:15	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)			通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)	
	16:30~18:00	計算科学特論 (木村・小山田他)	総合校舎 213	計算科学特論 (木村・小山田他)	総合校舎 213		通信情報システム特別研究1 (指導教員) 計算科学特論 (木村・小山田他)	総合校舎 213
金	8:45~10:15					並列計算機アーキテクチャ (高木(直))	情報1	
	10:30~12:00	情報学展望1	8号館講義室 2 <旧共同2>	情報学展望1	8号館講義室 2 <旧共同2>	情報学展望1	8号館講義室 2 <旧共同2>	
		情報学展望2	2号館 101	情報学展望2	2号館 101	情報学展望2	2号館 101	
	13:00~14:30	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)		通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)		
	14:45~16:15	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)		通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)		
	16:30~18:00					通信情報システム特別研究1 (指導教員)	学メ南 202	

平成24年度 後期時間割表

大学院情報学研究科

曜	時間	知能情報学専攻		社会情報学専攻		複雑系科学専攻	
月	8:45~10:15						
	10:30~12:00	ビジュアル・インタラクション (美濃・椋木)	学メ南 202	情報教育特論 (喜多・上原・森)	総合校舎 213		
	13:00~14:30	認知科学演習 (乾・水原)	2号館 120	情報モデリング論 (田島)	8号館講義室 4 <旧共同6>		
	14:45~16:15	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 202	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 202		
	16:30~18:00	知能情報学特別講義 (土佐) 情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 201 学メ南 202	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 202		
火	8:45~10:15	マルチメディア通信 (岡部・宮崎)	8号館講義室 4 <旧共同6>				
	10:30~12:00			サービスモデリング論 (原・松井・前川)	総合研究 2号館 3階 大演習室 2	計算力学特論B (吉川)	3号館 W3
	13:00~14:30	ソフトウェア基礎論 (五十嵐)	8号館講義室 1 <旧共同1>	ビジネス情報論 (横澤・木下)	総合校舎 213		
	14:45~16:15	音声情報処理特論 (奥乃・河原(達)・正木・西村)	8号館講義室 1 <旧共同1>	生物圏情報学 (酒井・守屋・荒井・小山・ Trifkovic)	総合校舎 213		
	16:30~18:00			メディア情報処理論 (山肩・美濃)	学メ南 202・204		
水	8:45~10:15	情報科学基礎論 (Liang・Cuturi)	8号館講義室 4 <旧共同6>				
	10:30~12:00	人工知能特論 (西田・大本)	8号館講義室 2 <旧共同2>	マルチエージェントシステム (石田・松原・服部・喜多・ Kinny)	8号館講義室 4 <旧共同6> (日) 総合207 (英)	非線形解析特論B (木上)	2号館 414
	13:00~14:30	知能情報学特別研究 (指導教員)		分散情報システム (吉川・馬・Jatowt)	先端 511 (日) 2号館 107 (英)	複雑系数理特論B (青柳)	8号館講義室 1 <旧共同1>
	14:45~16:15	知能情報学特別研究 (指導教員)		医療情報学 (吉原・黒田・竹村・糸)	8号館講義室 3 <旧共同5>		
	16:30~18:00	知能情報学特別研究 (指導教員)					
木	8:45~10:15						
	10:30~12:00			情報組織化・検索論 (田中・Jatowt)	8号館講義室 3 <旧共同5> (日) 総合校舎 207 (英)	非線形力学特論B (船越)	総合校舎 111
	13:00~14:30	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学選択演習・セミナー	8号館講義室 3 <旧共同5>	制御理論特論B (山本・永原)	総合校舎 213
	14:45~16:15	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員) 情報学展望5	総合校舎 213	社会情報学選択演習・セミナー 情報学展望5	8号館講義室 3 <旧共同5> 総合校舎 213	情報学展望5	総合校舎 213
	16:30~18:00	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員) 情報と知財 (田中(克)他)	物理 315	社会情報学選択演習・セミナー 情報と知財 (田中(克)他)	8号館講義室 3 <旧共同5> 物理 315	情報と知財 (田中(克)他)	物理 315
金	8:45~10:15	コンピュータビジョン (松山・川嶋・延原・Liang)	3号館 N4				
	10:30~12:00						
	13:00~14:30	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学特殊研究1・2 (指導教員)	総合校舎 213	微分方程式特論B (磯)	2号館 414
	14:45~16:15	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学特殊研究1・2 (指導教員)	総合校舎 213		
	16:30~18:00	知能情報学特殊研究1・2 (指導教員)		社会情報学特殊研究1・2 (指導教員)	総合校舎 213		

平成24年度 後期時間割表

大学院情報学研究所

曜	時間	数理工学専攻		システム科学専攻		通信情報システム専攻	
月	8:45~10:15					計算量理論 (岩間)	8号館講義室 4 <旧共同6>
	10:30~12:00	システム解析通論 (中村・太田)	8号館講義室 4 <旧共同6>				
	13:00~14:30			ヒューマン・マシンスステム論 (加納・西原)	総合校舎 213	光通信システム (乗松)	3号館 N4
	14:45~16:15	情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	学メ南 202	共生システム論 (川上・塩瀬) 情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	総合校舎 213 学メ南 202	リモートセンシング工学 (山本・橋口) 情報分析・管理論 (浅野・中村(聡))	3号館 N4 学メ南 202
	16:30~18:00	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 202	情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	学メ南 202	大気環境光電波計測 (津田・古本・矢吹) 情報分析・管理演習 (中村(聡)・浅野)	3号館 N4 学メ南 202
火	8:45~10:15						
	10:30~12:00	物理統計学特論 (梅野)	総合校舎 213	情報システム特論 (高橋・笠原)	総合研究 4号館 共通2		
	13:00~14:30	離散数理特論 (永持・趙)	8号館講義室 4 <旧共同6>				
	14:45~16:15						
	16:30~18:00	メディア情報処理論 (山肩・美濃)	学メ南 202・204	スーパーコンピューティング特論 (中島・岩下) メディア情報処理論 (山肩・美濃)	3号館 N1 学メ南 202・204	通信情報システム特別講義2 (荻原) メディア情報処理論 (山肩・美濃)	8号館講義室 4 <旧共同6> 学メ南 202・204
水	8:45~10:15						
	10:30~12:00	制御システム特論 (太田)	総合校舎 213			集積システム設計論 (佐藤(高)・越智・石原)	3号館 N4
	13:00~14:30	数理解析特論 (辻本)	総合校舎 213	システム科学通論 (全員)	2号館 101		
	14:45~16:15						
	16:30~18:00						
木	8:45~10:15					Polyhedral Computation (Avis)	8号館講義室 4 <旧共同6>
	10:30~12:00	計画数学通論 (福嶋・永持・山下・趙)	物理 101			ハードウェアアルゴリズム (高木(直)・高木(-))	8号館講義室 4 <旧共同6>
	13:00~14:30	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)		通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)	
	14:45~16:15	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)		通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)	
		情報学展望5	総合校舎 213	情報学展望5	総合校舎 213	情報学展望5	総合校舎 213
	16:30~18:00	情報と知財 (田中(克)他)	物理 315	情報と知財 (田中(克)他)	物理 315	通信情報システム特別研究1 (指導教員) 情報と知財 (田中(克)他)	物理 315
金	8:45~10:15						
	10:30~12:00						
	13:00~14:30	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)		通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)	
	14:45~16:15	数理工学特別研究1・2 (指導教員)		システム科学特殊研究1・2 (指導教員)		通信情報システム特別研究1・2 (指導教員)	
	16:30~18:00					通信情報システム特別研究1 (指導教員)	学メ南 202

A.1.10 修士課程他研究科他大学等の科目の履修登録・単位取得（平成 23 年度前期・後期）

修士課程他研究科等の科目の履修登録・単位修得状況

【平成 23 年度】

	授業科目開設研究科名	登録科目数	単位修得科目数
前期	文学研究科	9	6
	経済学研究科	3	1
	理学研究科	16	5
	工学研究科	14	7
	生命科学研究科	2	2
	地球環境学舎	2	1
	経営管理教育部	3	2
後期	理学研究科	6	4
	工学研究科	4	3
	生命科学研究科	3	2

A.1.11 海外協定大学等における研究指導認定状況（平成 23 年度前期・後期）

該当者なし

A.1.12 科目等履修生の受け入れ状況（平成 23 年度前期・後期）

該当者なし

A.1.13 TA・RA の採用状況（平成 23 年度前期・後期）

TA 前期 121 人 後期 108 人

RA 前期 60 人 後期 14 人

A.1.14 開設科目別の履修登録者数（平成 23 年度前期・後期）

平成 23 年度 開設科目別履修登録者数一覧表

	【前期・通年・集中】		【後期】	
	科目名	登録者数	科目名	登録者数
(展望) 共通	情報学展望 1B	147	情報学展望 3A	12
	情報学展望 2A	54	情報学展望 4B	27
	情報学展望 5A	15	情報と知財	51
共通	計算科学入門	70	メディア情報処理論	25
	計算科学演習 A	33	情報分析・管理論	17
	イノベーションマネジメント基礎	71	情報分析・管理演習	17
	情報分析・管理論	57		
	情報分析・管理演習	55		
知能情報学専攻	知能情報学特殊研究 1	44	情報科学基礎論	4
	知能情報学特殊研究 2	46	認知科学演習	8
	研究論文	43	ソフトウェア基礎論	13
	生命科学基礎論	49	知能情報学特別講義	3
	認知科学基礎論	55	人工知能特論	18
	情報科学基礎論	10	マルチメディア通信	19
	生命情報学基礎論	11	音声情報処理特論	24
	生体情報処理演習	8	コンピュータビジョン	16
	知能情報システム特論	18	ビジュアル・インタラクション	22
	パターン認識特論	39		
	人工知能特論	33		
	言語情報処理特論	49		
	知能情報学特別研究	2		
	社会情報学専攻	社会情報学特殊研究 1	39	社会情報モデルセミナー
社会情報学特殊研究 2		46	社会情報ネットワークセミナー	9
研究論文		36	生物圏情報学セミナー	7
情報社会論		48	防災情報学セミナー 1	1
情報システム設計論 I		40	防災情報学セミナー 2	1
情報システム設計論 II		41	防災情報学セミナー 3	2
情報システム分析論		43	医療情報学演習	3
防災情報特論		78	情報教育学セミナー	3
危機管理特論		28	分散情報システム	18
暗号と情報社会		49	マルチエージェントシステム	12
			情報組織化・検索論	30
			生物圏情報学	22
			医療情報学	13
			ビジネス情報論	26
			情報教育特論	7
			情報モデリング論	15
			サービスモデリング論	11
複雑系科学専攻	複雑系科学特殊研究 I	17	微分方程式特論 A	10
	複雑系科学特殊研究 II	13	非線形力学特論 A	22
	研究論文	13	計算力学特論 A	10
	応用解析学通論 A	30	制御理論特論 A	4
	複雑系力学通論 A	22		
	応用数理学通論 A	11		
	非線形解析特論 A	16		
	応用解析学特論 I	10		
	応用解析学特論 II	9		
	複雑系数理特論 A	13		
	応用数理学特論 II	10		
	応用解析学セミナー I	4		
	応用解析学セミナー II	2		
	複雑系力学セミナー I	3		
	応用数理学セミナー I	6		
	応用数理学セミナー II	3		

	【前期・通年・集中】		【後期】	
	科目名	登録者数	科目名	登録者数
数理工学専攻	数理工学特別研究 1	25	計画数学通論	28
	数理工学特別研究 2	24	数理解析特論	12
	研究論文	20	数理解析特論	23
	システム解析通論	37	離散数理特論	25
	最適化数理特論	32	制御システム特論	18
	物理統計学特論	26		
	力学系理論特論	90		
	金融工学	20		
	応用数理工学特論 A	17		
	応用数理工学特論 B	14		
システム科学専攻	システム科学特殊研究 1	36	システム科学通論	37
	システム科学特殊研究 2	28	ヒューマン・マシンシステム論	21
	研究論文	25	共生システム論	28
	機械システム制御論	118	情報システム特論	28
	適応システム論	38	スーパーコンピューティング特論	10
	統計的システム論	59		
	論理生命学	41		
	医用システム論	29		
	計算神経科学	16		
	計算知能システム論	20		
通信情報システム専攻	数新情報システム特別研究 1	43	計算量理論	11
	数新情報システム特別研究 2	43	ハードウェアアルゴリズム	21
	研究論文	38	並列分散システム論	6
	離散アルゴリズム理論	32	プログラミング言語処理系	26
	アルゴリズムと情報学入門	21	多面体計算学；理論, 実際と理工学への応用	10
	デジタル通信工学	31	光通信システム	9
	情報ネットワーク	33	集積システム設計論	27
	集積回路工学特論	70	大気環境光電波計測	6
	組合せ数学特論	37	リモートセンシング工学	6
	並列計算機アーキテクチャ	26	通信情報システム特別講義 2	21
	プログラミング言語特論	50		
	計算困難性：NP 完全性, 整数計画法, 及びスケジューリング問題への応用	19		
	デジタル信号処理論	8		
	伝送メディア工学特論	26		
	応用集積システム	26		
	通信情報システム特別講義 1	27		
プロジェクト	信号処理セミナー	13	プロジェクトマネジメント演習	3
	戦略的コミュニケーションセミナー	17	計算科学特論	4
	計算科学演習 B	15		
	情報と教育	5		

A.1.15 修士課程 学位取得状況（平成 20～22 年度入学生）

H24.9 現在

		知能	社会	複雑	数理	システム	通信	合計
H20.4	入学者	32	34	15	22	36	35	174
	修了者	29	33	11	20	35	33	161
	退学者	1	0	4	2	1	1	9
	除離籍	0	0	0	0	0	0	0
	在学者	2	1	0	0	0	1	4
	修了率	90.6%	97.1%	73.3%	90.9%	97.2%	94.3%	92.5%
H21.4	入学者	42	38	10	26	32	34	182
	修了者	41	34	8	26	31	32	172
	退学者	1	1	1	0	0	2	5
	除離籍	0	1	0	0	1	0	2
	在学者	0	2	1	0	0	0	3
	修了率	97.6%	89.5%	80.0%	100.0%	96.9%	94.1%	94.5%
H21.10	入学者	2	2	0	1	1	1	7
	修了者	2	1	0	1	1	1	6
	退学者	0	0	0	0	0	0	0
	除離籍	0	0	0	0	0	0	0
	在学者	0	1	0	0	0	0	1
	修了率	100%	50%		100%	100%	100%	86%
H22.4	入学者	44	36	14	22	26	42	184
	修了者	39	29	12	20	23	38	161
	退学者	2	0	2	0	1	0	5
	除離籍	0	0	0	0	0	0	0
	在学者	3	7	0	2	2	4	18
	修了率	88.6%	80.6%	85.7%	90.9%	88.5%	90.5%	87.5%
H22.10	入学者	2	2	0	3	1	1	9
	修了者	2	2	0	2	0	0	6
	退学者	0	0	0	0	0	0	0
	除離籍	0	0	0	0	0	0	0
	在学者	0	0	0	1	1	1	3
	修了率	100%	100%		67%	0%	0%	67%

A.1.16 修士課程 職業別・産業別の就職状況、就職率、進学状況（平成23年度修了生）

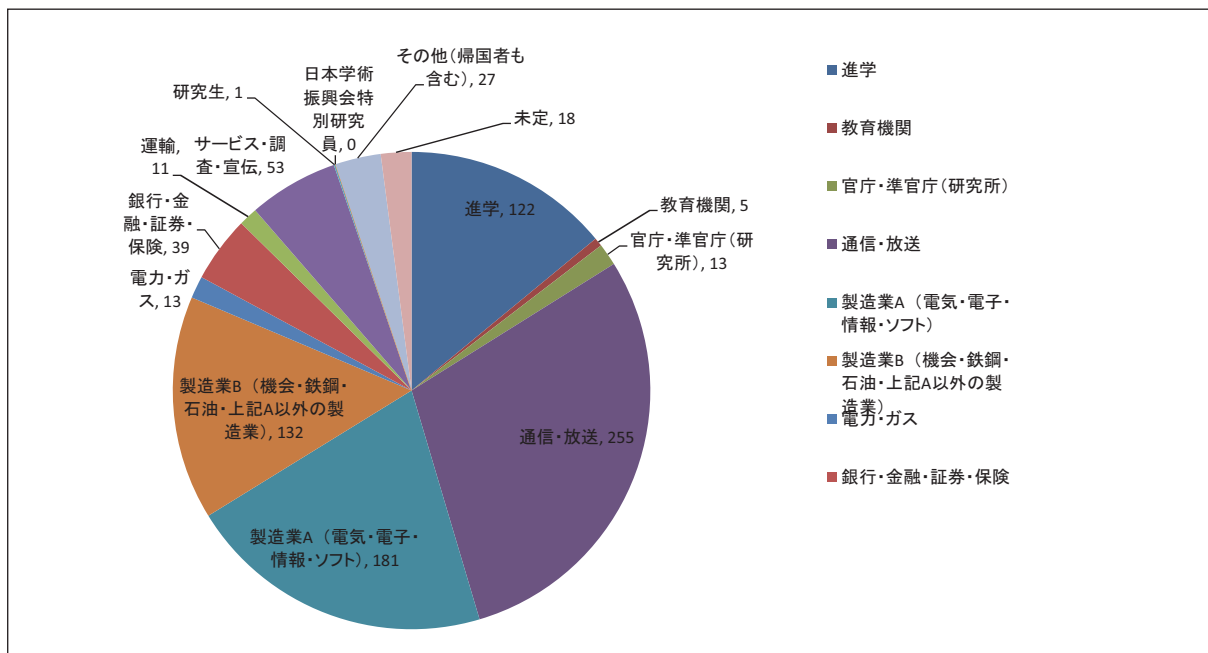
平成23年度 修士課程 進学状況・就職率

修了者	176	進学	19	10.80%
		就職	149	84.66%
		一時的就職	1	0.57%
		未定	5	2.84%
		その他	2	1.14%

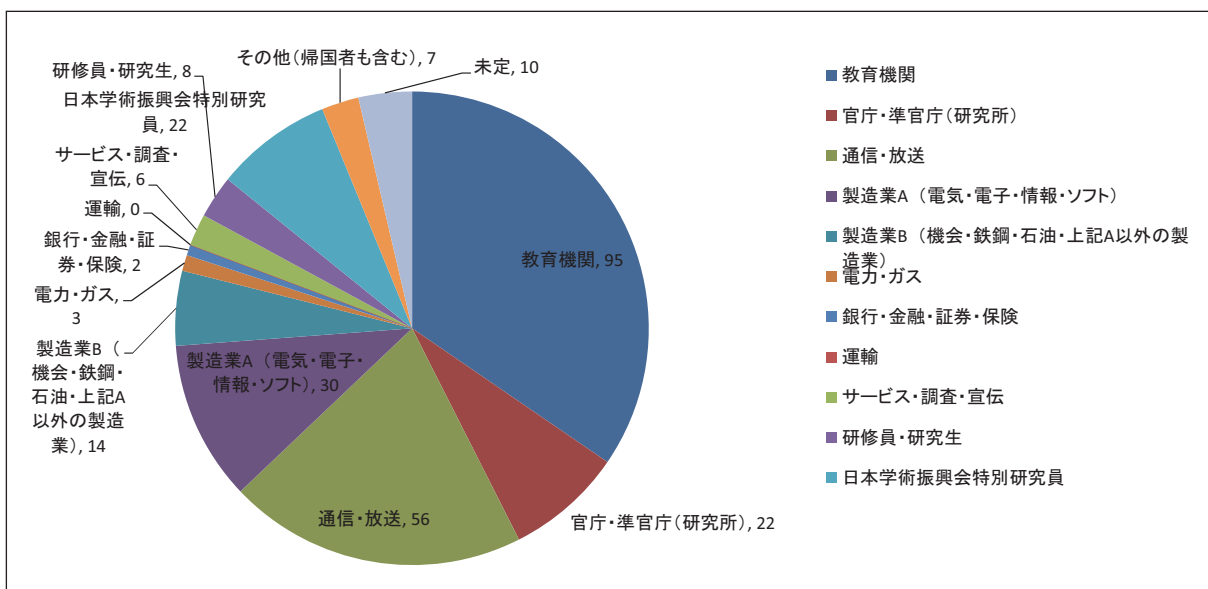
業種	分類	知能 情報学	社会 情報学	複雑系 科学	数理 工学	システム 科学	通信情報 システム	合計
製造業	食品・飲料・たばこ・ 飼料製造業							
	繊維工業、衣服・その 他の繊維製品製造	1						1
	印刷・同関連業	1						1
	化学工業・石油・石炭 製品製造業		1					1
	鉄鋼業、非鉄金属・金 属製品製造業				1			1
	一般機械器具製造業							
	電気・情報通信機械器 具製造業	9	2	2	4	8	12	37
	電子部品・デバイス製 造業					1	2	3
	輸送用機械器具製造業	1	3		2		1	7
	精密機械器具製造業							
	その他の製造業	4	1		1	4	3	13
電気・ガス・熱供給・水道業		1	1				1	3
情報通信業		16	20	4	4	3	13	60
運輸業・郵便業			1					1
金融・ 保険業	金融業		1	3	1			5
	保険業				1			1
サービス業	法務							
	学術・開発研究機関							
	その他のサービス業							
宿泊業・飲食サービス業					1			1
教育・学習 支援業	学校教育					1		1
	その他の教育・学習支 援業							
複合サービス事業				2	1	4	1	8
公務	国家公務員	1				1		2
	地方公務員		2					2
上記以外		1			1			2
合 計		35	32	11	17	22	33	150

A.1.17 修了生（修士課程、博士後期課程）の進路のグラフ

修士課程修了者の進路（H19～H23 合計人数）



博士後期課程修了者の進路（H19～H23 合計人数）



A.1.18 博士後期課程定員充足率と課程博士学位授与率 H24.12 現在

情報学研究科 博士課程	定員	(内留学生)	定員充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	74	5	52.7%	12	21	29
	39	12				
平成20年度	60	18	83.3%	6	25	34
	50	10				
平成21年度	60	18	85.0%	11	21	22
	51	11				
平成22年度	60	9	81.7%	10		
	49	11				
平成23年度	60	22	86.7%	1		
	52	12				
平成24年度	60	20	90.0%			
	54	10				
総計	374	92	78.88%	40	67	85
	295	66				
学位取得率				20.71%	47.86%	60.71%

表の見方

- ・ 定員： 研究科全体の博士後期課程の学生定員
- ・ 入学者： 当該年度の4月と10月の入学者の合計（国費私費の留学生、社会人入学を含む）
- ・ 定員充足率： 入学者数／定員
- ・ 期間短縮修了者： 1年以上3年未満の在籍期間で課程博士の学位を取得した者（期間短縮のためには3名の論文調査委員の中に他専攻・他研究科の教員が加わることが課せられている）
- ・ 期間短縮修了者の学位取得率： 期間短縮修了者数／入学者数（平成19年度～平成21年度入学者）
- ・ 3年以内修了者： 入学後標準年数の3年以内に課程博士の学位認定された者
- ・ 3年以内修了者の学位取得率： 入学後3年以内修了者数／入学者数（平成19年度～平成21年度入学者）
- ・ 課程博士取得者： 入学後現在までに課程博士の学位を取得した者（課程博士取得のためには、単位認定の上、入学後6年以内に論文調査委員会が発足する必要がある）
- ・ 課程博士取得者の学位取得率： 課程博士学位取得者数／入学者数（平成19年度～平成21年度入学者）
- ・ この表には、退学、または、単位認定退学後、「論文博士」の学位を取得した者を含めていない
- ・ 「H19新定員」とは、専攻ごとの学生定員の見直し（平成18年11月）の結果、平成19年度に実施された平成20年度入試における新しい学生定員（研究科の総学生定員は変わらない）

知能情報学専攻 博士課程	定員	(内留学生)	定員充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	17	2	70.6	2	6	8
	12	4				
平成20年度	15	6	106.7	1	6	11
	16	1				
平成21年度	15	2	86.7	3	3	3
	13	5				
平成22年度	15	4	100.0	1		
	15	0				
平成23年度	15	8	106.7			
	16	3				
平成24年度	15	8	140.0			
	21	5				
総計	92	30		7	15	22
	93	18				
学位取得率				14.63%	39.02%	53.66%

社会情報学専攻 博士課程	定員	(内留学生)	定員充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	14	1	71.4	1	2	6
	10	3				
平成20年度	14	6	85.7	1	9	10
	12	0				
平成21年度	14	7	92.9	3	7	7
	13	2				
平成22年度	14	4	85.7	2		
	12	2				
平成23年度	14	7	92.9	1		
	13	5				
平成24年度	14	9	107.1			
	15	1				
総計	84	34		8	18	23
	75	13				
学位取得率				14.29%	51.43%	65.71%

複雑系科学専攻 博士課程	定員	(内留学生)	定員充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	8	0	12.5	1	1	1
	1	0				
平成20年度	6	0	33.3	0	0	0
	2	0				
平成21年度	6	0	66.7	0	1	1
	4	1				
平成22年度	6	0	33.3	0		
	2	0				
平成23年度	6	0	50.0			
	3	0				
平成24年度	6	0	33.3			
	2	0				
総計	38	0		1	2	2
	14	1				
学位取得率				14.29%	28.57%	28.57%

数理工学専攻 博士課程	定員	(内留学生)	充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	8	1	50.0	1	2	3
	4	1				
平成20年度	6	2	66.7	0	1	3
	4	1				
平成21年度	6	2	100.0	1	4	5
	6	0				
平成22年度	6	0	66.7	3		
	4	2				
平成23年度	6	1	100.0			
	6	1				
平成24年度	6	1	33.3			
	2	0				
総計	38	7		5	7	11
	26	5				
学位取得率				14.29%	50.0%	78.57%

システム科学専攻 博士課程	定員	(内留学生)	定員充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	12	0	58.3	5	5	6
	7	3				
平成20年度	8	2	125.0	3	6	6
	10	5				
平成21年度	8	6	100.0	1	2	2
	8	0				
平成22年度	8	0	62.5	0		
	5	1				
平成23年度	8	2	75.0			
	6	1				
平成24年度	8	0	25.0			
	2	0				
総計	52	10		9	13	14
	38	10				
学位取得率				36.0%	52.0%	56.0%

通信情報システム 専攻 博士課程	定員	(内留学生)	定員充足率	期間短縮 修了者数	3年以内 修了者数	課程博士 取得者数
	入学者	(内社会人)				
平成19年度	15	1	33.3	2	5	5
	5	1				
平成20年度	11	2	54.5	1	3	4
	6	3				
平成21年度	11	1	63.6	3	4	4
	7	3				
平成22年度	11	1	100.0	4		
	11	6				
平成23年度	11	4	72.7			
	8	2				
平成24年度	11	2	109.1			
	12	4				
総計	70	11		10	12	13
	49	19				
学位取得率				33.33%	66.67%	72.22%

A.1.19 学生の受賞状況（平成 19 年度～平成 23 年度）

【知能情報学専攻】

1. 武田 龍, 山本 俊一, 駒谷 和範, 尾形 哲也, 奥乃 博, RSJ/SICE AWARD for IROS2006 BEST PAPER Nomination Finalist 2007 年 10 月 31 日. 「Missing-Feature based Speech Recognition for Two Simultaneous Speech Signals Separated by ICA with a pair of Humanoid Ears」
2. 横矢 龍之介, IEEE 関西支部 学生研究奨励賞 2008 年 2 月 28 日. 「Experience Based Imitation Using RNNPB」(共著: Tetsuya Ogata, Jun Tani, Kazunori Komatani, Hiroshi G. Okuno) IROS2006
3. 藤原 弘将, 情報処理学会 山下研究賞, 2008 年 3 月 14 日. 「音楽音響信号と歌詞の時間的対応付け手法: 歌声の分離と母音の Viterbi アラインメント」(共著: 後藤真孝, 緒方淳, 駒谷和範, 尾形哲也, 奥乃博) 音楽情報処理研究会, 2006-MUS-66, pp. 37-44. 5.
4. 福林 雄一朗, 情報処理学会 第 70 回全国大会 学生奨励賞 2008 年 3 月 14 日. 「音声対話システムにおける WFST に基づく文法検証を利用した動的ヘルプ生成」(共著: 駒谷和範, 尾形哲也, 奥乃博)
5. 神田 尚, 情報処理学会 第 70 回全国大会 学生奨励賞, 2008 年 3 月 15 日. 「RNNPB による音響模倣・分節化を用いた音素獲得モデルの提案」(共著: 尾形哲也, 駒谷和範, 奥乃博)
6. 北原 鉄朗, 情報処理学会 2007 年度第 3 回 IPSJ Digital Courier 船井若手奨励賞, 2008 年 4 月 19 日. 「Probabilistic Representation of Instrument Existence for Polyphonic Music」(共著: Masataka Goto, Kazunori Komatani, Tetsuya Ogata, and Hiroshi G. Okuno) IPSJ Digital Courier, Vol. 3, pp. 1-13
7. 吉井 和佳, 情報処理学会 2007 年度第 3 回 IPSJ Digital Courier 船井若手奨励賞, 2008 年 4 月 19 日. 「An Audio Player with Functions of Realtime Drum-Part Rearrangement for Active Music Listening」(共著: Masataka Goto, Kazunori Komatani, Tetsuya Ogata, and Hiroshi G. Okuno) IPSJ Digital Courier, Vol. 3, pp. 134-144
8. 勝丸 真樹, 情報処理学会 第 71 回音声言語情報処理研究会 第 185 回自然言語処理研究会 学生奨励賞, 2008 年 5 月 23 日. 「音声対話システムにおける簡略表現認識のための誤認識増加を抑制する自動語彙拡張」(共著: 駒谷和範, 尾形哲也, 奥乃博)
9. 萩行 正嗣, 情報処理学会 第 71 回音声言語情報処理研究会 第 185 回自然言語処理研究会 学生奨励賞, 2008 年 5 月 23 日. 「表層・語彙的特徴量に基づくプログラムの面白さ分析」(共著: 柴田 知秀, 黒橋 禎夫)
10. Yasser F. O. Mohammad, 西田豊明, IEA/AIE-2008 最優秀論文賞, 2008 年 6 月 20 日. 「A Cross-Platform Robotic Architecture for Autonomous Interactive Robots」
11. 徳田 浩一, 情報処理学会 第 70 回全国大会 大会奨励賞, 2008 年 7 月. 「音源定位結果と音声認識結果を HMD に統合呈示する聴覚障害者向け音環境理解支援システム」(共著: 駒谷和範, 尾形哲也, 奥乃博) 情報処理学会第 70 回全国大会, 5ZD-7, Mar. 2008
12. 須見 康平, 情報処理学会 第 70 回全国大会 大会優秀賞, 2008 年 7 月. 「ベース音高を考慮したポピュラー音楽に対する和音進行認識」(共著: 糸山克寿, 吉井和佳, 駒谷和範, 尾形哲也, 奥乃博) 情報処理学会第 70 回全国大会, 2X-5, Mar. 2008
13. 西出 俊, IEEE Robotics and Automation Society Japan Chapter Young Award, 2008 年 9 月 22 日. 「Active Sensing based Dynamical Object Feature Extaction」
14. 水本 武志, 武田 龍, 吉井 和佳, 駒谷 和範, 尾形 哲也, 奥乃 博, IEEE/IROS2008 Award for Entertainment Robots and Systems Nomination Finalist, 2008 年 9 月. 「A Robot Listens to Music and Counts Its Beats Aloud by Separating Music from Counting Voice」
15. 吉井 和佳, 武田 龍, 奥乃 博, IEEE/IROS2008 Award for Entertainment Robots and Systems Nomination Finalist, 2008 年 9 月. 「A Robot Uses Its Own Microphone to Synchronize Its Steps to Musical Beats While Scatting and Singing」
16. 松山 匡子, 情報処理学会 第 76 回音声言語情報処理研究会・第 191 回自然言語処理研究会 学生奨励賞, 2009 年 5 月 22 日 受賞「バージン発話タイミングを導入した指示対象同定」(共著: 駒谷和範, 武田龍, 尾形哲也, 奥乃博)
17. 武田 龍, 奥乃 博, 人工知能学会 2008 年度研究会優秀賞, 2009 年 6 月 18 日. 「ビートトラッキングロボットの構築と評価」
18. Yasser F. O. Mohammad, 西田 豊明, IEA/AIE-2009 最優秀論文賞, 2009 年 6 月 27 日. 「Measuring Naturalness During Close Encounters Using Physiological Signal Processing」
19. 神田 尚, 尾形 哲也, 高橋 徹, 駒谷 和範, 奥乃 博, 計測自動制御学会 SI2008 優秀講演賞 2009 年 8 月 10 日. 「連

- 続音響信号と構音情報の分節化に基づく母音音声模倣モデル]
20. 中田 篤志, 情報処理学会関西支部 支部大会 学生奨励賞, 2009年9月29日. 「非言語マルチモーダルデータを用いた会話構造分析」(共著: 福間良平, 角康之, 西田豊明)
 21. 川西 康友, SPC2009 Best Paper Award, 2009年10月30日. 「Background Image Generation Keeping Lighting Condition of Outdoor Scenes」(共著: 満上育久, 椋木雅之, 美濃導彦)
 22. 前澤 陽, 日本音響学会関西支部 奨励賞, 2009年12月5日. 「弦の音響差異を考慮したバイオリン演奏音響信号に対する運指推定」
 23. 岡田 満雄, IEEE Workshop on Consumer Communications and Networking Conference (CCNC2010) Best Demonstration Award, 2010年1月11日. 「A web-based privacy secure content trading system for small content providers using semi-bind digital watermarking」
 24. 前澤 陽, 情報処理学会 第72回全国大会 学生奨励賞, 2010年3月10日. 「クラシック音楽理解能力拡張インターフェイスのための同音旋律音量推定手法と主旋律推定への応用」
 25. 山川 暢英, 情報処理学会 第72回全国大会 学生奨励賞, 2010年3月10日. 「環境音から擬音語への自動変換における特徴量抽出法の検討」
 26. 吉井 和佳, 2009年度船井研究奨励賞, 2010年4月17日. 「デジタル音楽配信時代における音楽鑑賞支援に関する研究」
 27. Loic Merckel, International Conference on Computer Graphics Theory and Applications Best Student Paper Award, 2010年5月21日. 「Change-Point Detection on the Lie Group SE (3) for Segmenting Gesture-Defined Spatial Rigid Motion」(共著: 西田豊明)
 28. 大塚 琢馬, 水本 武志, 高橋 徹, 駒谷 和範, 尾形 哲也, 奥乃 博, IEA/AIE-2010 最優秀論文賞, 2010年6月2日. 「Music-ensemble robot that is capable of playing the theremin while listening to the accompanied music」
 29. 米谷 竜, ICPR2010 IBM Best Student Paper Award, 2010年8月26日. 「Gaze Probing: Event-Based Estimation of Objects being Focused On」
 30. 平澤 恭治, EEE Robotics and Automation Society Japan Chapter Young Award 2010年10月19日.
 31. Angelica Lim, 水本 武志, Louis-Kenzo Cahier, 大塚 琢馬, 高橋 徹, 駒谷 和範, 尾形 哲也, 奥乃 博, IROS2010 NTF Award for Entertainment Robots and Systems, IROS2010 NTF Award Finalist for Entertainment Robots and Systems, 2010年10月22日.
 32. 澤田 洋介, 細川 浩, 堀 あいこ, 松村 潔, 小林 茂夫, Brain Research 誌 Brain Research Awards for citations contributing to the 2009 Impact Factors. 2010年11月6日. 「Cold sensitivity of recombinant TRPA1 channels」
 33. 安良岡 直希, 日本音響学会関西支部 若手奨励賞, 2010年12月5日.
 34. 大塚 琢馬, 2010年度 C&C 若手優秀論文賞, 2010年12月20日. 「Music-ensemble robot that is capable of playing the theremin while listening to the accompanied music」
 35. 松山 匡子, 駒谷 和範, 尾形 哲也, 奥乃 博 教授, 人工知能学会研究会 優秀賞, 2011年6月2日. 発語行為レベルの情報をを用いた音声対話システムの構築とデータ分析
 36. Yasser Mohammad, 西田 豊明, SII2011 Best Paper Award (Control), 2011年12月21日. 「On Comparing SSA-based Change Point Discovery Algorithms」
 37. 信田 春満, 情報処理学会 第74回全国大会 学生奨励賞, 2012年3月8日. 「再帰型神経回路モデルを用いた視野変化予測と場所知覚ニューロンの発現」
 38. Angelica Lim, 情報処理学会 第74回全国大会 学生奨励賞, 2012年3月8日. 「The DESIRE Model: Cross-modal emotion analysis and expression for robots」
 39. 西川 直毅, 情報処理学会 第74回全国大会 学生奨励賞, 2012年3月6日. 「楽曲印象軌跡に基づく楽曲検索システムの実装と評価」
 40. 柳楽 浩平, 情報処理学会 第74回全国大会 学生奨励賞, 2012年3月6日. 「Complex Infinite Sparse Factor Analysis による周波数領域での音声信号のブラインド音源分離」
 41. 阪上 大地, 情報処理学会 第74回全国大会 学生奨励賞, 2012年3月7日. 「倍音コーパスを用いた初期値依存の低い多重基本周波数推定法」

【社会情報学専攻】

42. 中島 悠、椎名 宏徳、山根 昇平、電気通信普及財団 第23回テレコム技術学生賞、2008年3月17日。「Disaster Evacuation Guide: Using a Massively Multiagent Server and GPS Mobile Phones」(共著:八槇博史,石田亨) IEEE Computer Society, The 2007 International Symposium on Applications and the Internet (SAINT-07), Jan. 2007
43. 田仲 理恵、人工知能学会 第22回全国大会 優秀賞、2008年8月13日。「文脈情報を用いた機械翻訳サービスの連携」(共著:石田亨,村上陽平) 人工知能学会第22回全国大会, 2A2-1, June 2008
44. 高橋 慧、iDB フォーラム 2008 学生奨励賞、2008年9月22日。「地球観測データ統合解析のためのデータ系譜とアノテーションのモデル化」(共著:絹谷弘子,吉川正俊)
45. 近藤 誠一、The 8th IFIP Conference on e-Business, e-Services, and e-Society (I3E2008) Best Paper Award, 2008年9月25日。「Extending RBAC for Large Enterprises and Quantitative Risk Evaluation」(共著:岩井原瑞穂,吉川正俊,虎渡昌史)
46. 石松 昌展、FIT2009 情報処理学会 第8回情報科学技術フォーラム FIT 論文賞、2009年9月3日。「表形式の言語資源からのメタデータ抽出」(共著:田仲正弘,石田亨)
47. Heeryon Cho, 2009年度 日本社会情報学会第12回大学院学位論文賞、2009年9月12日。「Analysis of Cultural Differences in Pictogram Interpretations」
48. Julien Bourdon, 第8回 合同エージェントワークショップ&シンポジウム (JAWS2009) 学生奨励賞、2009年10月29日、「Trust Chaining for Provider Autonomy in Composite Services」
49. 山根 昇平、澤田 祥一、服部 宏充、小田垣 まりか、中嶋 謙互、石田 亨、PRIMA 2009, Best Multimedia Paper Award, 2009年12月15日。「Participatory Simulation Environment gumonji/Q: A Network Game Empowered by Agents」
50. 宮澤 佑樹、情報処理学会 第73回全国大会 学生奨励賞、2011年3月2日。「都市交通における協調的な運転行動の計算モデル化」

【数理工学専攻】

51. 今田 友樹、日本オペレーションズ・リサーチ学会 第27回学生論文賞、2009年7月29日。「外平面的化学グラフの立体異性体に対する構造表現および生成アルゴリズム」

【システム科学専攻】

52. 南 裕樹、システム制御情報学会 奨励賞、2007年5月17日。「三又ヘビ型ロボットの開発と推進制御実験」
53. 大黒 健太郎、日本オペレーティングリサーチ学会 学生論文賞、2007年9月28日。「Algorithmic Computation of the Queue Length Distribution in the BMAP/D/c Queue」
54. Tuan Phung-Duc, QTNA2008 Best Student Paper Award, 2008年8月2日。「Analytical Solutions for M/M/3/3 and M/M/4/4 Retrial Queues」
55. Tuan Phung-Duc, 日本OR学会 若手によるOR横断研究研究部会主催 若手研究交流会2008 学生優秀発表賞、2008年10月12日。「系内状態に依存した到着・サービスを有する M/M/c/K 再試行型待ち行列」
56. 木村 達明, 日本OR学会 若手によるOR横断研究研究部会主催 若手研究交流会2008 学生優秀発表賞、2008年10月12日。「M/G/1型マルコフ連鎖における定常裾分布ベクトルの幾何漸近公式」
57. 松井 秀往, 第11回情報論的学習理論ワークショップ 奨励賞、2008年10月30日。「情報幾何を用いた Expectation propagation の推定誤差の評価とその性質の解析」(共著:田中利幸)
58. 木村 達明, 日本OR学会 待ち行列研究部会 2008年度研究奨励賞、2009年2月21日。「Light-Tailed Asymptotics of Stationary Tail Probability Vectors of Markov Chains of M/G/1 Type」
59. 品川 真英, 2011年度 システム制御情報学会 奨励賞、2011年5月18日。「3リンクヘビ型ロボットにおける運動学的特異点の解析と実証実験」
60. 山浦 寛史, 金子 めぐみ, 林 和則, 酒井 英昭, IEEE VTS Japan 2011 Young Researcher's Encouragement Award, 2011年9月6日。「Superposition Coding Scheme with Discrete Adaptive Modulation for Wireless Relay Systems」
61. 品川 真英, 2011年度計測自動制御学会関西支部・システム制御情報学会若手研究発表会 優秀発表賞、2012年1月19日。「マルチエージェントの分散協調囲い込み制御に関する一考察」
62. 平井 嗣人, 日本OR学会待ち行列研究部会 研究奨励賞、2012年1月20日。「Performance analysis of

- backup tasks in cloud computing: an extreme value theory approach」
63. 河合 直聡, 岩下 武史, 中島 浩, HPCS2012 最優秀論文賞, 2012 年 1 月 25 日. 「ブロック化赤 - 黒順序付け法に基づく並列マルチグリッドポアソンソルバ」
 64. 河合 直聡, HPCS2012 HPCS IEEE Computer Society Japan Chapter 優秀若手研究賞, 2012 年 1 月 25 日. 「ブロック化赤 - 黒順序付け法に基づく並列マルチグリッドポアソンソルバ」
 65. 泉 晋作, 2011 年度計測自動制御学会 学術奨励賞, 2012 年 2 月 22 日. 「分散制御によるロボットマスゲーム」

【通信情報システム専攻】

66. 木寺 正平, 可児 祐介, 阪本 卓也, 佐藤 亨, 2007 IEEE International Conference on Ultrar-WideBand (ICUWB2007) Best Student Paper Award, 2007 年 9 月 25 日. 「An experimental study for a high-resolution 3-D imaging algorithm with linear array for UWB radars」
67. 廣本 正之, IEEE 関西支部 学生研究奨励賞, 2008 年 2 月 28 日 受賞 「A Specialized Processor Suitable for AdaBoost-Based Detection with Haar-like Features」(共著: Kentaro Nakahara, Hiroki Sugano, Yukihiko Nakamura, and Ryusuke Miyamoto) CVPR2007
68. 菅野 裕揮, IEEE 関西支部 学生研究奨励賞, 2008 年 2 月 28 日. 「Efficient Memory Architecture for JPEG2000 Entropy Codec」(共著: Hiroshi Tsutsui, Takahiko Masuzaki, Takao Onoye, Hiroyuki Ochi, and Yukihiko Nakamura) ISCAS2006
69. 日向 文彦, IEEE 関西支部 GOLD 賞, 2008 年 2 月 28 日.
70. 廣本 正之, 情報処理学会 DICO2008 シンポジウム ヤングリサーチ賞 優秀論文賞, 2008 年 7 月 11 日. (ヤングリサーチ賞) 2008 年 8 月. (優秀論文賞) 「メディアストリーミングにおける高速移動通信網に適した動的符号化レート制御手法の検討」(共著: 筒井弘, 越智裕之, 小佐野智之, 石川憲洋, 中村行宏)
71. 寺田 晴彦, 情報処理学会 システム LSI 設計技術研究会 DA シンポジウム 2007 優秀発表学生賞, 2008 年 8 月 26 日. 「統計的遅延解析における遅延分布間の最大値計算手法」(共著: 福岡孝之, 土谷亮, 小野寺秀俊)
72. 廣本 正之, 2009 DSPS Educators Conference IEEE CAS Japan Chapter Best Student Demonstration Award, 2009 年 9 月 11 日. 「CoHOG を用いた歩行者検出の実時間実装」(共著: 宮本龍介)
73. 服部 幸市, 7th IEEE Workshop on Embedded Systems for Real-time Multimedia (ESTIMedia 2009) Best Paper Award, 2009 年 10 月 16 日. 「A High-Throughput Pipelined Architecture for JPEG XR Encoding」(共著: 筒井弘, 越智裕之, 中村行宏)
74. 宮脇 成和, 土谷 亮, 小野寺 秀俊, 2011 International SoC Design Conference Samsung Award, 2011 年 11 月 18 日. 「A 10.3Gbps TransImpedance Amplifier with Mutually Coupled Inductors in 0.18-um CMOS」
75. 久保木 猛, IEEE 関西支部 学生研究奨励賞, 2012 年 2 月 17 日. 「A 16Gbps Laser-Diode Driver with Interwoven Peaking Inductors in 0.18-um CMOS」
76. Islam A. K. M. Mahfuzul, IEEE 関西支部 学生研究奨励賞, 2012 年 2 月 17 日. 「Variation-sensitive Monitor Circuits for Estimation of Die-to-Die Process Variation」
77. 吉田 悠一, 第 2 回 日本学術振興会 育志賞, 2012 年 3 月 1 日. 「グラフと制約充足問題に対する準線形時間アルゴリズム」
78. 吉田 悠一, 2011 年度 京都大学 総長賞, 2012 年 3 月 19 日.

A.1.20 女子学生の入学と学位取得状況

女子学生・学位授与者の数と比率（専攻別）

	年度	入学期	専攻					通信情報システム
			知能情報学	社会情報学	複雑系科学	数理工学	システム科学	
修士課程入学者 平成 20 年度～ 24 年度	H20	4 月入学	2	5	1	1	2	1
		10 月入学	0	1	0	1	0	0
	H21	4 月入学	4	9	0	0	0	0
		10 月入学	0	1	0	1	0	0
	H22	4 月入学	6	2	2	1	2	0
		10 月入学	0	2	0	1	1	0
	H23	4 月入学	4	10	4	2	3	2
		10 月入学	0	1	0	0	0	1
	H24	4 月入学	8	8	2	1	0	0
		10 月入学	0	2	0	0	0	0
平成 20 年度～ 24 年度合計			24	40	9	7	8	4
博士後期課程入学者 平成 20 年度～ 24 年度	H20	4 月入学	1	0	0	1	0	0
		10 月入学	1	0	0	1	0	0
	H21	4 月入学	0	3	0	0	1	0
		10 月入学	0	1	0	0	0	1
	H22	4 月入学	2	0	0	0	0	1
		10 月入学	1	0	0	0	0	0
	H23	4 月入学	2	2	0	0	1	0
		10 月入学	2	1	0	1	0	2
	H24	4 月入学	3	5	0	0	0	0
		10 月入学	1	1	0	0	0	0
平成 20 年度～ 24 年度合計			13	13	0	3	2	4
博士（情報学）学位授与者数 平成 19 年度～平成 23 年度	H19		1	1	0	0	0	0
	H20		1	1	0	1	1	0
	H21		2	1	0	1	0	0
	H22		0	2	0	0	0	0
	H23		2	1	0	0	0	0
平成 19 年度～平成 23 年度合計			6 〔7%〕	6 〔7%〕	0 〔0%〕	2 〔2%〕	1 〔1%〕	0 〔0%〕

（注）学位授与者の〔 〕の数値は 女性学位授与者 / 全学位授与者 で計算されたものである。

A.2 専攻ごとのアドミッション・ポリシーと大学院入試（平成 24 年度）

【知能情報学専攻】

アドミッション・ポリシー：

知能情報学専攻では、生体、特に人間の情報処理機構を解明し、その知見を高次情報処理の分野に展開し、しなやかな情報処理システムを実現することをめざしています。生命情報コース、認知情報コース、ソフトウェア基礎論コース、メディア情報学コースの4コースを設け、生命情報学、認知科学、情報メディア、ソフトウェア科学に立脚した知能情報学の研究教育を行っています。

本専攻では、知能情報学の深い素養を身につけ、社会の各方面でリーダーシップをとることのできる技術者・研究者の育成を目指した研究教育を行っています。研究面では、研究室を拠点とする独創的な研究を推進し、産学連携や学会活動などを通じて社会にその成果を還元しています。教育面では、講義・演習に加えて、異なる専門分野でのインターンシップを通して所属する研究室のテーマを主領域とし、専攻の他分野のテーマを副領域とする学習を奨励しています。非情報系出身者に対しては、知能情報学専攻での学習に必要な事項をまとめた情報科学基礎論の講義などによって基礎知識習得の支援をしています。知能情報学における研究と教育を密接に連携させることにより、特定の研究分野だけに特化するのではなく、専攻内外の異分野の交流を通じて、広範囲な知識と深い専門知識をもつバランスの取れた人材の育成に努めています。平成 22 年度から、日本語能力を前提とせず英語だけで修了可能な国際コースを設置し、留学生・日本人学生を問わず国際的に活躍できる人材の育成に努めています。

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 8月入試では専門科目の問題を多分野にわたり計 25 問用意し学生に選択（4 問）させている。英語能力の評価のために、すべての受験生に TOEFL あるいは TOEIC のスコア提出を求めている。学内開催だけでなく、東京でも入試説明会を実施した。

分析： 多様な専門性、背景（留学生、社会人）、出身大学（関西、関東）の学生の受け入れに効果をあげている。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 問題作成時は、チェックシートに従い、ワーキンググループと専攻全体との二段階でチェックを行なっている。採点時の答案の匿名化と判定会議時の成績の匿名化を行っている。採点を入試本部で行うことを徹底している。過去問の公開と非公開問題の試験会場での回収を行っている。入試委員 2 名と 1 名の補佐が準備と当日の業務を行っている。国際コース開設に伴い、8 月入試、2 月入試とも出題は和文に参考英訳を併記している。

分析： 合否判定における公平性の確保に効果をあげ、採点における事故の防止に効果をあげている。試験内容に関する情報の学内外での公平性の確保に効果をあげている。出題ミス、実施ミスの防止に効果をあげている。また、22 年度 10 月入学 2 名、23 年度 4 月 11 名、23 年度 10 月入学 3 名、24 年度 4 月入学 14 名の留学生・日本人学生が入学後に国際コースを履修している。

【社会情報学専攻】

アドミッション・ポリシー：

社会情報学専攻では、高度に複雑化する情報化社会の構造を解明し、実際に情報システムを構築することができる人材の育成を目指しています。さらに、文化、経済、環境、防災の各方面でグローバル化する人間の社会活動を支える人材を育成します。

そのため、多様な分野の出身者を受け入れており、入学試験においては各自が学んだ専門分野の知識を問う専門科目の他、情報学の基礎知識を問う情報学基礎を修士課程、博士課程で課しており、さらに修士課程については論理的思考を問う一般論述を課しております。入学試験ではこれらの筆記試験と面接口頭試問の成績をあわせて評価を行います。

入学後は、修士課程、博士課程とも複数アドバイザー制を導入しており、直接の指導教員の他、2 名のアドバイザーを加えた指導を行っています。また、修士課程においては、専攻基礎科目として情報社会論、情報システム設計論及び演習、情報システム分析論及び演習を課しています。

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 研究科及び専攻のアドミッション・ポリシーにある「情報学の新たな学問領域を開拓しようという意欲を持った学生の受け入れ」、「理系文系という枠組みにとらわれず、多様なバックグラウンドを持つ学生の受け入れ」のために、「多様な専門分野からの選択形式による試験問題出題」を実施するという取り組みを行っている。また、英語能力のより一般的評価をおこなうため、語学試験に TOEFL や TOEIC を取り入れた。一方、留学生特別選抜については、試験問題を邦文、英文の併記で作成するなどの配慮を行っている。多様な入学選抜として、AO 入試、国際コース、社会人特別選抜など積極的に取り入れている。それらの根拠データは、社会情報学専攻のアドミッション・ポリシーや募集要項、社会情報学専攻入試問題などである。

分析： 多様な専門分野からの選択形式による入試問題出題などの取組の結果、多様なバックグラウンドを持つ学生の受け入れの成果があがっている。課題としては、社会情報学専攻修士課程の教育に必要な最低限度の共通の知識の確保であり、これに対して、受験者全員に「情報学基礎」を必須としていることや、入学後に専攻基礎科目 4 科目等を必修科目に指定している。これらの根拠理由は、工学部情報学科からの入学者、他学部他学科からの入学者、他大学からの入学者が適切なバランスで入学していることである。そのデータは、入試説明会配付資料や、専攻ホームページの「修士入学者の出身大学 <http://www.soc.i.kyoto-u.ac.jp/alma.html>」などである。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 事前の入試問題に関する検討会を専攻全体で実施し、試験問題の公正化や出題ミスに対応している。また、口頭試問では受験者学生のバックグラウンドや志望動機の説明・確認の機会を設けるなどの取組を行っている。それらは募集要項や社会情報学専攻入試問題に読み取れる。

分析： 入試問題に関する検討会実施や口頭試問での聴取の取組の結果、公正な入試実施の成果があがっている。この根拠は、必須としている「情報学基礎」の成績が、受験者のバックグラウンドとは必ずしも関係していないことである。今後も引き続き、多様な専門分野からの選択的な出題の難易度のバランスを、より適正であるよう調整する必要がある。

【複雑系科学専攻】

アドミッション・ポリシー：

複雑系とは、構成要素間の大規模な相互作用や非線形性によって全体として自己組織化・大自由度カオス・記憶学習・連想などのさまざまな挙動や機能を示すシステムです。本専攻では、この複雑系のふるまいの原理と構造の解明、複雑系のもたらす膨大な情報の解析とそこから有用な情報の抽出、および複雑系に適したシステム設計法の開発を目指しています。そして具体的には、数学解析や数値解析による複雑な数理モデルの解構造の解明、複雑力学系でのカオス、パターン形成等の非線形現象、複雑系のモデル化や解法アルゴリズムの開発、システムの制御・知能化・自己組織化などについて教育・研究を行っています。特に本専攻では、現象にかかわる「理（ことわり）」を理解し解明するという理学的な視点と、そこで得られた知見を利用した「物作り」という工学的な視点の融合を重視しています。その上で、各研究室では個別指導を中心とした綿密な専門教育が行なわれる一方で、講義面では専攻基礎科目を開設するなど、広い視野を持つ人材の育成にも配慮しています。

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 専攻のアドミッションポリシーは、専攻のホームページに掲載すると同時に、学生募集要項と一緒に配布する「志望区分案内」の中の本専攻に関わる部分の先頭に掲載し、受験生への周知を図っている。修士課程入試における筆記試験は、アドミッションポリシーに沿った分野内容の問題を出題しており、受験生の負担を軽減するために、専門科目の選択問題数を 1 とした（従来は 2）。また、口頭試問においては、受験者の提出した志望説明書に関連する質問を行う中で、各受験者の希望する勉学内容がアドミッションポリシーに沿っているかどうかを判断している。博士後期課程入試においては、アドミッションポリシーに沿った博士後期課程での勉学研究に必要な基礎的な学力と研究遂行能力の有無を、筆記試験と口頭試問により判断することとしている。また、口頭試問においては、受験者の入学後に研究したいテーマに関する質問を行うことによって、各受験者の希望する勉学研究内容がアドミッションポリシーに沿っているかどうかを判断している。対策を裏付けるデータの名称：①複雑系科学専攻 Web サイトトップページ複雑系科学専攻についてアドミッションポリ

シーの項。②学生募集要項と一緒に配布する「志望区分案内」の複雑系科学専攻に関わる部分の先頭ページ。③過去の筆記試験の問題（基礎科目、専門科目、英語）。④複雑系科学専攻口頭試問座長メモ。

分析： 修士課程入試では、筆記試験において、アドミッションポリシーに合う基礎学力の有無を判断することになっているが、これまでの入学者の本専攻での勉学修了状況から考えて、アドミッションポリシーに沿った適切な学生の受入が行われていると判断される。また、修士課程入試の口頭試問は、必要な場合はかなり時間を延長して行い、受験者の希望する勉学内容が本専攻のアドミッションポリシーに合致するかどうかを見極めるようにしており、この口頭試問もアドミッションポリシーに沿った学生の受入に機能していると思われる。また、博士後期課程入試においても、口頭試問は原則として40分程度おこなって、受験者の希望する研究テーマについて十分に聞いているので、現在の入学試験の方法は、アドミッションポリシーに沿った学生の受入のために十分に機能していると判断される。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 修士課程入試の筆記試験の専門科目および基礎科目の出題にあたっては、出題グループごとに充分検討した問題案を、5名の委員からなる会議で確定させたあと、別メンバーからなる会議で再度チェックする体制としている。具体的には、この再チェックの会議においては、各々の問題を出題者以外のメンバーが実際に解くことによって内容、表記をチェックし、その結果をもとに全員で協議してチェックを行うことにしている。また、筆記試験の採点結果については、採点結果用紙への記入時と表計算ソフトへのデータ入力時に、必ず複数の者で確認するようにしている。修士課程入試における口頭試問対象者は、6名の委員からなる委員会において、主に筆記試験の結果をもとにして決定する体制としている。また、口頭試問は専攻の講師以上の教員全員が参加（助教は任意参加。以下同様）して行う体制としている。修士課程入試の最終的な合否判定は、専攻の講師以上の教員全員が参加して行う体制としている。博士後期課程入試における口頭試問は、原則として40分程度行い、基礎学力や研究遂行能力を十分見極められるようにしている。さらに、必要な場合は筆記試験も行い、基礎学力の見極めを十分に行うことにしている。修士課程入試および博士後期課程入試の最終的な合否判定は、専攻の講師以上の教員全員が参加して行う体制としている。対策を裏付けるデータの名称：①各問題検討委員会の招集記録（検討内容は非公開）

分析： 過去の出題ミスの反省を踏まえて、今回の修士課程入試筆記試験においても、厳しいチェック体制とすることにより、出題ミス等もなく公正かつ適切に実施できた。今後も、同様の厳しいチェック体制を続けることにより、出題ミスの再発は防げられると思われる。修士課程入試における口頭試問対象者は、6名の委員が出る委員会決定されており、公正かつ適切に決定されていると判断される。修士課程入試における口頭試問は、専攻の講師以上の全教員が参加して行われており、公正かつ適切な方法であると判断される。最終的な合否判定の会議も、専攻の講師以上の全教員が参加して行われ、公正かつ適切に実施されていると判断される。

【複雑系科学専攻： 推薦入試】

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 専攻のアドミッション・ポリシーは、専攻のホームページに掲載すると同時に、学生募集要項と一緒に配布する「志望区分案内」の中の本専攻に関わる部分の先頭に掲載し、受験生への周知を図っている。

提出書類に基づく評価では、主に成績証明書と志望説明書に基づく評価を行い、その中でアドミッション・ポリシーに合う基礎学力をもち、アドミッション・ポリシーに沿った勉学内容を希望しているかどうかを判断している。

また、口頭試問においては、受験者の提出した志望説明書に関連する質問を行う中で、各受験者の希望する学習内容がアドミッション・ポリシーに沿っているかどうかを判断している。

提出書類に基づく評価の結果と口頭試問の結果に基づいて、合否判定を行っている。

対策を裏付けるデータの名称：① 複雑系科学専攻 Web サイトトップページ→複雑系科学専攻について→アドミッション・ポリシーの項。② 学生募集要項と一緒に配布する「志望区分案内」の複雑系科学専攻に関わる部分の先頭ページ。③ 複雑系科学専攻 修士課程推薦入試取り扱い要領。④ 複雑系科学専攻口頭試問座長メモ。

分析： 提出書類に基づく評価において、アドミッション・ポリシーに合う基礎学力の有無を判断することになっているが、これまでの推薦入試入学者の本専攻での勉学状況から考えて、アドミッション・ポリシーに沿った適切な学生の受入が行われていると判断される。また、推薦選抜入試での口頭試問は、一般選抜入試の場合よりも長く行って、受験者の希望する勉学内容が本専攻のアドミッション・ポリシーに合致するかどうかを十分見極めると同時に、必要に応じて十分な基礎学力の有無を確認するようにしており、この口頭試問もアドミッ

ション・ポリシーに沿った学生の受入に十分機能していると思われる。以上のことより、本専攻で採用している入学試験の方法は、アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入のために充分機能していると判断される。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 提出書類に基づく評価では、6名の委員が、提出された成績証明書の一般選抜の基礎科目、専門科目、英語に相当する科目の成績、および志望説明書などに基づいて評価を行う制度としている。また、口頭試問は専攻の講師以上の教員全員が参加して行う体制としている。

最終的な可否判定は、提出書類に基づく評価の結果、口頭試問の結果と志望説明書等をもとにして、専攻の講師以上の教員全員が参加して行う体制としている。

対策を裏付けるデータの名称：① 複雑系科学専攻 修士課程推薦入試取り扱い要領。② 書類審査用紙。③ 口頭試問点数記入用紙。

分析： 提出書類に基づく評価では、6名の委員が多数の項目について評点をつけ、その評点を平均するシステムとしているので、公正かつ適切に行われていると判断される。

口頭試問は、専攻の講師以上の全教員が参加して行われており、公正かつ適切な方法であると判断される。

最終的な可否判定の会議も、専攻の講師以上の全教員が参加して行われ、公正かつ適切に実施されていると判断される。

【数理工学専攻】

アドミッション・ポリシー：

数理工学専攻では情報学研究科の3本柱のうち数理モデリングに重点をおいた人材育成を目指します。情報化社会における生産、通信、情報処理、および事業の効率化等の問題を解決するには、数理モデルを立てて考えるのが有効です。なぜなら、大規模なシステムの問題解決には計算機の活用が必須ですし、計算機は抽象化(数値化)されたデータを扱うものだからです。そして、数理モデルを正しく立てて正しく処理するには、つまり、計算機になにをさせるべきかを正しく判断するには、数学的センスと物理学的想像力という基礎力が肝要です。

数理工学専攻はこのような考えのもとに、システム論系、OR系、数学系、物理学系の講座から構成されていて、カリキュラムもバランスよく編成されています。技術革新の目覚ましい現代には確かな基礎力が個人の研究開発能力の持続には一層大事でありますので、授業科目では基礎力の充実を図り、修士論文では最新のテーマで研究することを目指しています。

数理工学専攻はこのような人材養成の目標のために、「数理モデルで問題解決」に興味のある学生を広く募っています。そのため、入学試験においても、それぞれ6問ずつ出題されている基礎科目、専門科目の中から、受験生が各2問を選択して解答できるよう配慮しています。

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 2回の専攻説明会で、アドミッション・ポリシーを知らせている。数理工学では出題者全員で問題の検討を行い、出題の適切性の判断をしている。数理的思考により問題解決能力の涵養を図るという指導方針に沿って、実社会の現場でもちあがる問題を深く研究したいという社会人を受け入れているが、そのような社会人が実際に受験した。また、留学生で、修士課程を修了後、一旦帰国した者が再度博士後期課程に入学を希望してきたとう実績がある。また、外国人留学生のために問題文の参考英訳をつけ、英文での解答も認めている。

分析： 適切な学生の受入方法が採用され、機能している。数理的思考には深い学識と研究環境が必要であるという意味で、今後ともリカレント教育としての博士後期課程の役割が重要であると考えているし、その実績がある。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 入試問題作成にあたっては各問題を複数名で担当し、全問題を専攻内の講師以上の教員が一堂に会した会議で精査し、妥当性・難易度のチェックを行っている。機密保持には細心の注意を払っている。修士課程試験の過去の筆記試験問題を専攻 Web 上で公開し、各科目の試験内容に関する学内外の受験生間での情報格差の解消、および試験内容の質の確保に努めている。データ：専攻 Web「入試情報」のページ

博士後期課程では成績証明書を審査の上、学業成績の優秀なる者には筆記試験を免除している。博士後期課程では専門分野の研究能力が特に大事なので、講師以上の全教員の前でこれまでの研究成果と将来の展望につい

て発表させ、質疑応答を通じて、受験者の研究推進能力を審査している。

分析： 筆記試験答案採点および判定会議の際に受験生の匿名性の確保を徹底し、入試は公正に実施されていると判断する。

過去に若干の出題ミスがあったが、入試問題検討の体制を強化し、適切に改善した。

【システム科学専攻】

●アドミッション・ポリシー

高度情報化の進展に伴ってコンピュータネットワークシステムや生産システムをはじめとした現代社会における様々なシステムは自動化・知能化が進行するとともに、ますます大規模となり、また複雑化しています。

このようなシステムを開発・運営していくためには、人間あるいは環境との相互作用に着目し、それらを総合的に捉え、分析・構成する新たなシステム研究の方法論が必要です。システム科学専攻では、情報学の多様な専門分野を強固に繋ぐ横糸の役割を果たすような統合的なシステム論の構築に取り組むとともに、実用性・実証性を重視した新たなシステム研究の方法論の構築を目指しています。

本専攻の活動領域は情報学に関するシステム構造が全て対象となり、極めて広範なものであるため、入学試験の専門科目に幅広い選択肢を用意して多様なバックグラウンドを持つ学生や社会人に広く門戸を開き、機械・電気・数理・医学という様々な学問的背景を持つ研究者による教育を行っています。

このように多様な専門性を有機的に結合できるような複眼的な視野を持つとともに、柔軟な思考が可能な研究者・技術者を育成します。また、人間・環境・社会と人工的システムとの高度な調和・適応の追求や、確率・統計的手法を用いたシステム数理の解明への取り組みを通じ、実用性・実証性に優れたシステムの構築を目指す意欲的な人材を養成します。

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 入試においては、専攻共通の基礎科目として数学を課すとともに、英語については TOEFL あるいは TOEIC を用いた評価を採用している。専門科目については、アドミッション・ポリシーに沿って機械系、情報系、電気系にわたる 8 科目を準備し、2 科目を学生に選択させている。また、5 月～6 月に入試説明会を 2 回開催し、各分野の教員から直接その研究内容等を説明する機会を設けている。

分析： 基礎共通科目と選択形式の専門科目という入試形態、および入試説明会が奏功して、多様なバックグラウンドを持つ学生が入学している。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 問題作成時には、各科目を複数名が担当し、担当者相互でチェックする共に、専攻全体で全科目について再度詳しくチェックしている。そこでは表記ミスや問題ミスのチェックはむろんのこと、問題間のオーバーラップ、出題範囲や難易度の適切性、表現の明快性にいたるまで種々の観点から詳細に検討している。また、過去問等も専攻ホームページにおいて公開している。採点時や判定時には受験者の匿名性を厳格に保持している。試験当日においても、各受験室に必ず複数の教員が配置されている。試験本部室では、受験者からの質問に対応できるように、問題作成者とただちに連絡できる体制を整えている。

分析： 適切な実施体制で公正に入学者選抜が実施されている。問題作成時の二重チェックにより問題ミスを防ぐことにも十分な効果をあげている。

【通信情報システム専攻】

アドミッション・ポリシー：

高度情報化社会を現実のものとするためには、人間社会のニーズを捉えた高度な情報処理技術と通信技術の更なる進展が不可欠である。情報処理技術の分野ではコンピュータの社会への浸透、とりわけ企業から個人への利用拡大に伴い情報処理装置の高機能化・高性能化とともに小型化への要求やユーザーフレンドリーなシステムの実現などが強く求められている。また通信技術の分野では、世界規模の企業活動あるいは個人活動を支えるインフラストラクチャとして何時でも何所でも自由に大容量のマルチメディア情報を送受信することのできる高機能・高信頼な通信網の実現が求められている。さらに IT 時代に向け、産業構造として発展の経緯を異にする情報処理と通信とがその距離を縮め密接不可分な関係に進展するものと考えられる。

本専攻ではこういった時代の流れを先取りするとともに、それぞれの要を世界最高水準の技術によって実現するため、情報処理の中核となる新しい計算機システム構成とアルゴリズム・ソフトウェア、高度情報化社会を支える情報伝送・ネットワーク技術、大規模高性能な情報回路とLSI技術、デジタル信号処理技術等の教育研究を行っている。また、協力講座においては地球大気環境の観測・情報処理等に関する教育研究を行っている。特に修士課程においては、上記の研究分野についての基礎教育を行い、いわゆるハードウェアとソフトウェアを統合することのできる、また、目的に合わせて理論と応用を結合することのできる研究者・技術者の育成・輩出を目指している。

この目的を達成するため、入学者選抜に際しては、これに必要な電気電子工学、情報学、計算機工学の十分な基礎学力を有すると共に、これを発展させ応用する能力を有することを基準として選抜を行う。また、本専攻の特色として、博士後期課程の社会人学生を数多く受け入れてきた実績がある。産業界でのキャリアを重視することが本専攻の重要な柱の一つである。

4.2 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

状況： 入試に先立ち、問題検討会議を開き、入試問題がアドミッション・ポリシーに沿って適切に出題されていることを確認している。本専攻は、電気系学生と情報系学生が受験するため、それぞれの専門にあわせて、専門科目が選択できるように配慮している。

分析： 修学状況などを見る限り、これらの対策は機能していると思われる。

4.3 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

状況： 採点時の答案の匿名化、判定会議時の成績の匿名化を行っている。採点を入試本部で行うことを徹底している。過去問を公開している。入試委員5名が準備にあたり、また試験当日もこの5名が本部で待機し、緊急時に備えて万全の体制をとっている。合否判定会議直後に専攻会議を開き、当該入試実施に関して問題点の提起と解決方法の策定を行っている。

分析： 合否判定における公平性の確保と採点における不正の防止に効果をあげている。試験内容に関する情報の学内外での公平性の確保に効果をあげている。出題ミス、実施ミスの防止に効果をあげ、入試方法の改善に役立っている。

A.3 教育改善のための取り組み事例（平成 19 年度～平成 24 年度）

- ・平成 21 年度文部科学省特別経費「知識社会におけるイノベーション人材養成のための全学共通情報教育プログラムの開発・実施」（平成 21 年度～平成 25 年度）が採択され、その実施のために情報教育推進センターが平成 21 年度に研究科内に設置された。現在までに、センターが提供する 21 の講義科目について、全講義の映像・教材アーカイブを作成し、学生の復習自習、および教員の FD 活動のために用いた。これらの映像教材アーカイブの視聴のために iTouchLecture と呼ばれるソフトウェアを自主開発するとともにサーバ環境を整え使用した。このソフトウェアは、iPod touch, iPhone, iPad 等のモバイル機器で視聴したり、質問やコメント等アノテーションを行うことができる。
ホームページ：<http://www.iedu.i.kyoto-u.ac.jp/>
- ・GCOE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」（平成 19 年度～平成 23 年度、社会情報学専攻、知能情報学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻、学術情報メディアセンター）が実施された。社会・コミュニティ・組織・個人の間で知識が滞りなく循環することを促し、情報科学技術と人間・実社会との間にある多くの技術的、社会的課題を解決することを目的として、「原初知識モデル」、「フィールド情報学」、「知識サーチ」、「知識グリッドコンピューティング」という 4 つの教育研究コアを設置して拠点形成および教育研究を推進した。
ホームページ：<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>
- ・先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム「社会的 IT リスク軽減のための情報セキュリティ技術者・実務者育成 (IT Keys)」（平成 19 年度～平成 22 年度）に参加した。民間・公共の各種組織において情報セキュリティ対策の立案遂行を主体的に実施しうる人材の育成を目標とし、組織管理技法および情報システムの総合リスク対策技術を体系的に習得するために関西圏を中心とした情報系 4 大学院（奈良先端科学技術大学院大学、京都大学、大阪大学、北陸先端科学技術大学院大学）による連携型教育コースが設けられた。本研究科では、基礎科目群として指定された本研究科開講科目の中から 2 科目 4 単位以上に加え、本学および大阪大学中之島センターで開講される先進科目群 2 科目 4 単位、情報通信教育研究北陸リサーチセンター等で合宿形式で開講される実践科目群 3 科目 6 単位を履修することで本プログラム修了認定証が授与される。期間終了後もプログラムの提供は継続している。
ホームページ：<http://it-keys.naist.jp/>
- ・先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム「高度なソフトウェア技術者育成と実プロジェクト教材開発を実現する融合連携専攻の形成 (IT Spiral)」（平成 18 年度～平成 21 年度）に参加した。情報通信技術、特にソフトウェアの高度な技術者育成を目標とし、ソフトウェア工学分野で教育・修得すべき内容をより豊富にかつ体系的・実践的に教育課程に取り込むため、関西圏の情報系 9 大学院（大阪大学、大阪工業大学、京都大学、高知工科大学、神戸大学、奈良先端科学技術大学、兵庫県立大学、立命館大学、和歌山大学）に分散している該当分野の卓越した専門家群を結集し、融合連携型専攻の構築を進めた。期間終了後もプログラムの提供は継続している。
ホームページ：<http://it-spiral.ist.osaka-u.ac.jp/>
- ・英語による授業等の実施体制の構築や、留学生受け入れに関する体制の整備、戦略的な国際連携の推進等、国際化拠点の形成の取組を支援することにより、留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材の養成を図ることを目的とする国際化拠点整備事業（グローバル 30）の拠点大学の一つとして京都大学が採択され、世界最先端の独創的な研究資源を活かし、地球社会の現代的な課題に挑戦する次世代のリーダー育成のための教育を実践することを目指す事業「京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム (Kyoto University Programs for Future International Leaders: K.U.PROFILE)」（平成 21 年度～平成 25 年度）が実施されている。本研究科では、3 専攻（知能情報学専攻、社会情報学専攻、通信情報システム専攻）が平成 22 年度からカリキュラムとして国際コースを設定することによって K.U.PROFILE に参画している。国際コースでは、国外から新たに着任した教員を中心にして英語で提供する科目を新設するとともに既存科目の一部を英語で実施している。さらに、研究指導の一部英語化し、入学試験を和英併用にすることにより、英語だけで修士・博士の学位を取得可能にしている。国際コースのカリキュラムは、留学生だけでなく日本人学生も積極的に履修することを期待して設計されている。また、事務部門にも人員を新規に配置し、留学生の学修や日常生活を

支援している。

ホームページ：<http://www.g30i.kyoto-u.ac.jp/>

- ・ K.U.PROFILE への参画に合わせて、教務関連の情報や行事の英語化を実施した。具体的には、学生募集要項（平成 22 年 10 月から）、教務情報（平成 22 年 10 月から）、新入生ガイダンス（平成 22 年 4 月から）が挙げられる。
- ・ 研究科ホームページの多言語化（英語、簡体中国語、繁体中国語、韓国語）を実施した。（平成 23 年 2 月）
ホームページ：<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/>
- ・ 各専攻の様々な活動においても国際化が図られるようになってきている。具体的には、主として博士課程の学生、若手教員・研究員を対象に、英語で研究発表を行い、議論する「IST セミナー」の定期的な開催（知能情報学専攻）、専攻内の各分野が毎月 1 回話題提供を行う談話会における英語講演の増加（通信情報システム専攻）、平成 22 年実施の大学院入試から入試問題に英語の参考訳を付すことで留学生に便宜を図る取り組み（数理工学専攻）などが挙げられる。
- ・ 災害、環境などの問題に対応するための新たな学際領域「グローバル生存学」を設定し人材育成を行う博士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」（平成 23 年度～平成 29 年度）が採択された。本研究科からは社会情報学専攻、通信情報システム専攻が参加している。
- ・ 異分野の専門家が協働する際の共通言語としての「デザイン学」を確立し、社会のシステムやアーキテクチャをデザインできる博士人材の育成を目指す博士課程教育リーディングプログラム「デザイン学大学院連携プログラム」（平成 24 年度～平成 30 年度）が採択された。本研究科を主体とするプログラムであり、本研究科からは知能情報学専攻、社会情報学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻が参加している。現在は、プログラムに関連した新規科目の開講の準備などの作業を進めている。
- ・ 博士課程教育リーディングプログラムの設置に関連して京都大学学位規程において学位「博士（総合学術）」が新たに定められたことに対応して、プログラム修了生に対する学位「博士（総合学術）」の授与について検討を開始している。
- ・ 平成 18 年度から平成 19 年度にかけて実施された「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業のなかでシミュレーション科学を支える高度人材育成（モデリング、アルゴリズム、計算機アーキテクチャの機能的統合）を行うために開設された実習重視型の講義「シミュレーション科学」を、事業終了後も研究科共通科目として継続している。その成果は、たとえば数理工学専攻の修士論文全体においてシミュレーション部分の高精度化をもたらすといった形で表れている。
- ・ 平成 20 年度後期から、研究指導科目を除く修士課程の全科目を対象として授業アンケートを実施している。アンケートの結果を科目担当教員にフィードバックし、教員による教育改善に役立てられるようにしている。
- ・ 修士課程の入学選抜において、英語能力の評価に際して筆記試験に代えて TOEFL 等を利用している。修士課程外国人留学生の入学選抜においては平成 19 年 2 月から、通常の入学選抜においては平成 20 年 8 月から実施している。
- ・ 修士課程第 2 次募集の実施時期について検討し、複雑系科学専攻では受験生の便宜を図って平成 23 年度から 12 月に実施することとした。受験生の増加という形で効果が上がっている。
- ・ 工学部 8 号館（平成 23 年度）、工学部 10 号館（平成 24 年度）の耐震改修が行われ、研究教育環境等の改善がなされた。

・ 新規に締結した学生交流協定：

平成 21 年度

リンシェーピン大学（スウェーデン）

オウル大学電気情報工学科（フィンランド）

キングモンクット工科大学（タイ）

平成 22 年度

バレンシア工科大学コンピュータ科学科（スペイン）

スイス工科大学（スイス）

A.4 学生に対するカリキュラムアンケート

情報学研究科では、これまでに平成12年12月、平成16年12月の2回にわたり「学生によるカリキュラムアンケート調査」を実施してきた。前回の調査から8年近くが経過するなかで、平成19年4月には大学院設置基準においてファカルティ・ディベロップメントの実施が義務化されるなど、教育の改善に関してより一層の取り組みが求められるようになってきている。

本アンケート調査は、情報学研究科における教育活動の定点観測としての役割と同時に、平成22年度から平成27年度までの期間に設定された京都大学の第2期中期目標期間の折り返し地点の年度を迎えるにあたって、教育機能の現状を把握し問題点、改善点を明らかにしていくことを目的として、平成24年8月に実施されたものである。

本アンケート調査における設問は、定点観測としての役割を果たすべく、基本的には前回のアンケート調査における設問を踏襲している。ただし、設問7-1では、前回の調査以降に「情報学展望」以外の研究科共通科目の充実が図られてきたことを反映して、研究科共通科目についての設問とした。また、学修環境と各種支援制度に関しては前回の調査ではひとつの設問にまとめられていたが、今回は設問10、設問11とに分け、さらに学修環境について問う設問10では項目分けを行うことでより細かい調査を行うこととした。

本アンケート調査にご協力いただき真摯に回答を寄せてくれた学生諸君に感謝するとともに、本調査を通じて情報学研究科における教育の現状を的確に把握し、教育システムの改善と将来ビジョンの構築を進めていきたい。

平成24年度 評価・広報委員会

アンケート調査の実施

平成24年8月に情報学研究科全学生を対象としたカリキュラムアンケートを実施した。回答数は次の表の通りである。

専攻名	回答数	修士課程	博士後期課程	社会人博士
知能情報学	12	10	1	0
社会情報学	10	7	2	1
複雑系科学	1	0	0	0
数理工学	5	4	1	0
システム科学	8	8	0	0
通信情報システム	19	13	2	1
所属不明	3	1	0	0
合計	58	43	6	2

【設問1】入学の動機について

(修士、博士、社会人博士ごとに回答をしてください)

■ (修士) (A, B, C, Dの中からもっとも近いものをひとつだけ選び○で囲んでください。

Dの場合は、さらに、余白に具体的内容を記入してください。)

A 志望する専門分野をより深く学び、研究したいから。

B 就職に有利だから。

C 趨勢

D その他

■ (博士)

A 志望する専門分野をより深く学び、研究したいから。

B 将来大学教員になりたいから。

C 研究機関への就職に有利だから。

D 指導教員から勧められたから。

E その他

■ (社会人博士)

- A 自ら志望
- B 大学からの勧誘
- C 勤務先からの勧誘
- D その他

修士課程	回答率	前回調査	前々回調査
A 志望する専門分野をより深く学び、研究したいから。	76.7%	71.0%	66.0%
B 就職に有利だから。	16.3%	13.0%	18.0%
C 趨勢	4.7%	9.0%	12.0%
D その他	2.3%	7.0%	4.0%
その他の具体的内容 ・記述なし			

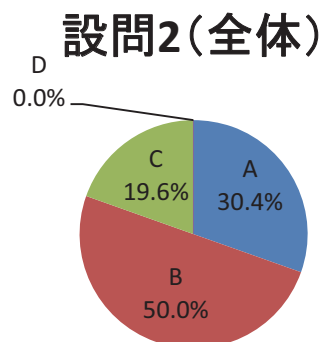
博士後期課程	回答率	前回調査	前々回調査
A 志望する専門分野をより深く学び、研究したいから。	60.0%	76.0%	77.0%
B 将来大学教員になりたいから。	20.0%	10.0%	4.0%
C 研究機関への就職に有利だから。	20.0%	5.0%	4.0%
D 指導教員から勧められたから。	0.0%	7.0%	15.0%
E その他	0.0%	2.0%	0.0%
その他の具体的内容 ・記述なし			

社会人博士	回答率	前回調査	前々回調査
A 自ら志望	100.0%	100.0%	データなし
B 大学からの勧誘	0.0%	0.0%	
C 勤務先からの勧誘	0.0%	0.0%	
D その他	0.0%	0.0%	
その他の具体的内容 ・記述なし			

【設問2】 将来の志望について

(社会人博士以外の方に回答をお願いします)

- A 将来どのような仕事をしたいかについて、具体的な希望とビジョンを持っている。
- B 将来の仕事についてそれなりの希望はあるが、具体的なビジョンは持てないでいる。
- C 将来の仕事については、もう少し勉強して決めればよいと思っている。
- D その他(具体的内容)



修士課程	回答率	前回調査	前々回調査
A 将来どのような仕事をしたいかについて、具体的な希望とビジョンを持っている。	30.0%	33.0%	30.0%
B 将来の仕事についてそれなりの希望はあるが、具体的なビジョンは持てないでいる。	47.5%	61.0%	55.0%
C 将来の仕事については、もう少し勉強して決めればよいと思っている。	22.5%	5.0%	11.0%
D その他	0.0%	1.0%	4.0%
その他の具体的内容 ・記述なし			

博士後期課程	回答率	前回調査	前々回調査
A 将来どのような仕事をしたいかについて、具体的な希望とビジョンを持っている。	33.3%	45.0%	35.0%
B 将来の仕事についてそれなりの希望はあるが、具体的なビジョンは持てないでいる。	66.7%	38.0%	50.0%
C 将来の仕事については、もう少し勉強して決めればよいと思っている。	0.0%	14.0%	15.0%
D その他	0.0%	2.0%	0.0%
その他の具体的内容 ・記述なし			

【設問3】カリキュラムに対する満足度

(修士の方に回答をお願いします)

(A, B, C, D, E の中からもっとも近いものをひとつだけ選び○で囲んでください。)

1) シラバス

A 満足 B ある程度満足 C どちらともいえない D やや不満足 E 不満足

2) 時間割

A 満足 B ある程度満足 C どちらともいえない D やや不満足 E 不満足

3) ガイダンス・履修指導

A 満足 B ある程度満足 C どちらともいえない D やや不満足 E 不満足

4) 教務関係の事務的なサポート

A 満足 B ある程度満足 C どちらともいえない D やや不満足 E 不満足

5) 教室・教育設備

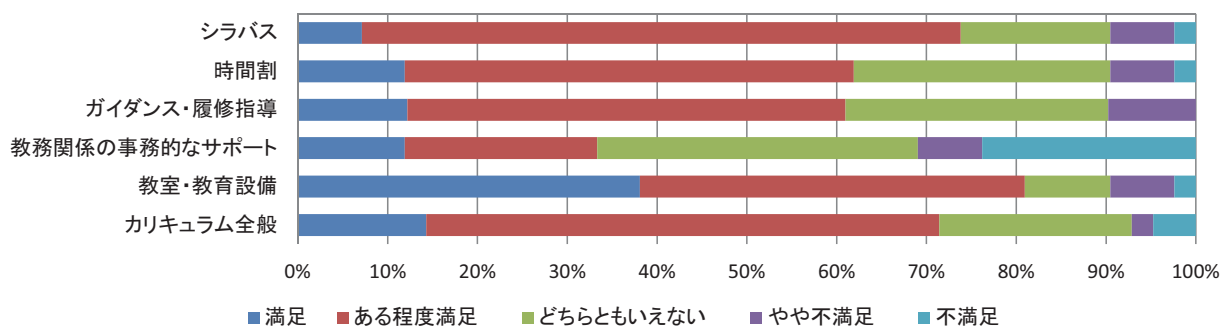
A 満足 B ある程度満足 C どちらともいえない D やや不満足 E 不満足

6) カリキュラム全般

A 満足 B ある程度満足 C どちらともいえない D やや不満足 E 不満足

1～6) の設問で、特にどのような点が不満足(やや不満足)であったか書いてください。

設問3



1) シラバス

修士課程	回答率	前回調査
満足	7.1%	16.0%
ある程度満足	66.7%	42.0%
どちらともいえない	16.7%	20.0%
やや不満足	7.1%	17.0%
不満足	2.4%	5.0%

自由記述

- ・シラバスはほとんど参考にしなかったし、それで問題も感じなかったので何とも言えない。
- ・必要単位数が少し多めで、研究に割く時間が減ってしまうのが不満だった。
- ・システム科学専攻では似たようなテーマの講義が複数存在する。(ベイズの定理、粒子フィルタなど)
- ・シラバスは、ほとんど見ることがなかった。
- ・大学院にもなって、授業の単位に追われて研究の時間が減るのはおかしい。諸外国と違ってDrに進む人は少ないのだから、就職活動もあり修士の間に研究できる時間は限られている。
- ・講義内容自体には不満はないが、必要単位数が多く、講義が多くならざるを得ないためスケジュールが過密になることが少し大変です。特に、まとまった時間が必要な研究が行えなくなる点が厳しいです。

2) 時間割

修士課程	回答率	前回調査
満足	11.9%	16.0%
ある程度満足	50.0%	45.0%
どちらともいえない	28.6%	27.0%
やや不満足	7.1%	9.0%
不満足	2.4%	2.0%

自由記述

- ・時間割について、必修科目が前期に偏りすぎている。後期に研究や就職活動に専念できるようにするための配慮であることはわかるが、もう少し後期に移してもいいと思う。

3) ガイダンス・履修指導

修士課程	回答率	前回調査
満足	12.2%	12.0%
ある程度満足	48.8%	26.0%
どちらともいえない	29.3%	47.0%
やや不満足	9.8%	11.0%
不満足	0.0%	4.0%

自由記述

- ・記述なし

4) 教務関係の事務的なサポート

修士課程	回答率	前回調査
満足	11.9%	19.0%
ある程度満足	21.4%	36.0%
どちらともいえない	35.7%	30.0%
やや不満足	7.1%	12.0%
不満足	23.8%	3.0%

自由記述

- ・事務の方の手違いが多い
- ・教務のサポートもほとんど受けなかった。
- ・教務関係は対応がすごく雑なことが多かった。

- ・事務の対応に好感が持てない。多くの人間を捌かないといけないのは分かるが、一人ひとりをおさなりに扱ってよいわけではない。サービスを提供する立場にいることを理解していない。
- ・情報学研究科事務の連絡の不手際
- ・単位認定の条件など教員の意向が事務と共有されていなかったためか、教務関係の質問への対応が酷いものだった

5) 教室・教育設備

修士課程	回答率	前回調査
満足	38.1%	21.0%
ある程度満足	42.9%	42.0%
どちらともいえない	9.5%	20.0%
やや不満足	7.1%	16.0%
不満足	2.4%	1.0%

自由記述

- ・教室の無線 LAN が時々つながらなくなるのだけ困った。
- ・二号館の椅子が硬くて座りにくい。
- ・支給されたノート PC が使い難い

6) カリキュラム全般

修士課程	回答率	前回調査	前々回調査
満足	14.3%	11.0%	2.0%
ある程度満足	57.1%	47.0%	42.0%
どちらともいえない	21.4%	22.0%	25.0%
やや不満足	2.4%	15.0%	23.0%
不満足	4.8%	4.0%	8.0%

自由記述

- ・記述なし

【設問 4】学習程度と成績評価

(修士の方に回答をお願いします)

これまで受講した科目の勉強状況と合否について、該当する(科目数)(おおよそでよい)を教えてください。

- 自分ではよく勉強したと思う科目()科目
 - その中で合格した科目()科目
 - その中で不合格になった科目()科目
- 勉強しようと思っていたが途中で勉強しなくなった科目()科目
 - その中で合格した科目()科目
 - その中で不合格になった科目()科目
- はじめから勉強しなかった科目()科目
 - その中で合格した科目()科目
 - その中で不合格になった科目()科目

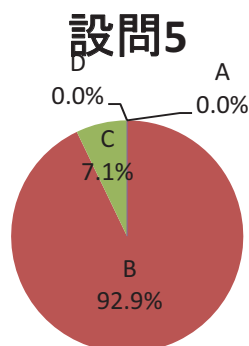
修士課程	科目数	回答率	前回調査	前回調査
A 自分ではよく勉強したと思う科目	209	72.3%	752 (63%)	593 (56%)
A1 その中で合格した科目		49.8%	95%	96%
A2 その中で不合格になった科目		4.3%	2%	4%
B 勉強しようと思っていたが途中で勉強しなくなった科目	57	19.7%	291 (24%)	208 (19%)
B1 その中で合格した科目		43.9%	63%	56%
B2 その中で不合格になった科目		28.1%	34%	44%
C はじめから勉強しなかった科目	23	8.0%	158 (13%)	268 (25%)
C1 その中で合格した科目		13.0%	55%	60%
C2 その中で不合格になった科目		17.4%	41%	40%

【設問5】レポート

(修士の方に回答をお願いします)

講義に伴うレポートについて。(A, B, C, D の中からもっとも近いものをひとつだけ選び○で囲んでください。D の場合は、さらに、余白に具体的内容を記入してください。)

- A 科目内容を理解するのに役立つから、なるべく頻繁に出してほしい。
- B 科目内容を理解するのに役立つが、あまり多いと対応できないので、ほどほどに。
- C 自分で勉強すべきで、レポートなど不要である。
- D その他



修士課程	回答率	前回調査	前々回調査
A 科目内容を理解するのに役立つから、なるべく頻繁に出してほしい。	0.0%	7%	11%
B 科目内容を理解するのに役立つが、あまり多いと対応できないので、ほどほどに。	92.9%	85%	79%
C 自分で勉強すべきで、レポートなど不要である。	7.1%	5%	5%
D その他	0.0%	3%	5%

その他の具体的内容

- ・やっている間は忙しかったが、それによって身に着いたものを考えると良かったと思う。ただ、情報系の基礎的なレポート(データベース関連など)は、情報系の学部出身の身としては煩わしいだけのものもあった。可能であれば、コース分け(レポート多く、テストや採点基準楽と、レポート少なくテストや採点基準厳しい)が同じ授業の中であると助かるなと感じた。

【設問6】科目選択の動機

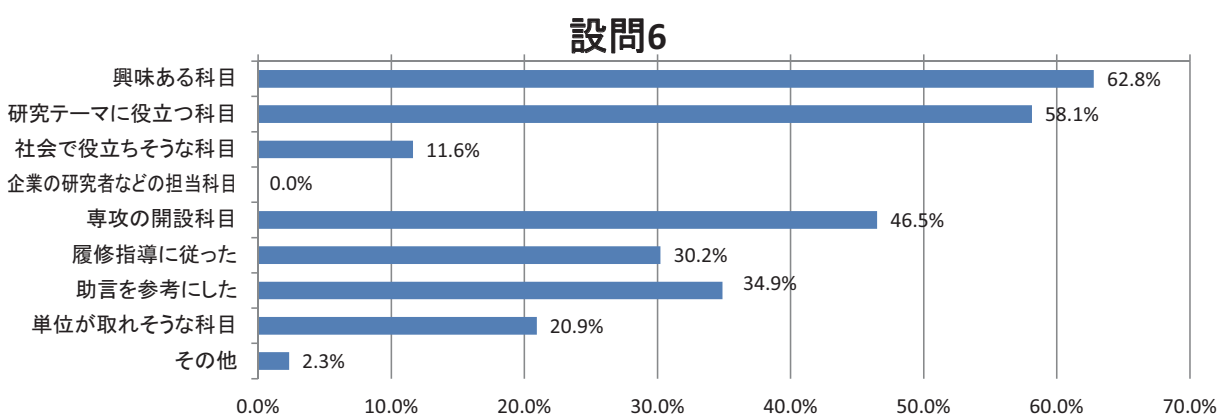
(修士の方に回答をお願いします)

「京都大学の基本理念」においては「自学自習」の学習姿勢の重要性がうたわれています。

あなたが修士課程で自分自身の受講科目を決めるにあたって留意したことは何でしょうか。

(A～Jのいずれかを選んでください。Jについては具体的内容を記入してください。複数回答可)

- A 自分の興味のある科目を中心に受講した
- B 自分の研究テーマに役立つ内容の科目を選んだ
- C 社会に出て役立つような科目を中心に受講した
- D 企業の研究者など普段あまり話を聞くことのない担当者の科目を受講した
- E 自分の専攻の開設科目であることを優先した
- F 自分の専攻の履修指導に従った
- H 先輩や指導教員などからの助言を参考にした
- I 受講する以上は単位がとれそうな科目を選んだ
- J その他



修士課程	回答率	前回調査
A 自分の興味のある科目を中心に受講した	62.8%	31.0%
B 自分の研究テーマに役立つ内容の科目を選んだ	58.1%	19.0%
C 社会に出て役立つような科目を中心に受講した	11.6%	6.0%
D 企業の研究者など普段あまり話を聞くことのない担当者の科目を受講した	0.0%	4.0%
E 自分の専攻の開設科目であることを優先した	46.5%	10.0%
F 自分の専攻の履修指導に従った	30.2%	10.0%
H 先輩や指導教員などからの助言を参考にした	34.9%	11.0%
I 受講する以上は単位がとれそうな科目を選んだ	20.9%	6.0%
J その他	2.3%	1.0%
その他の具体的内容 ・興味があるもの、必要そうなもの、全く興味がなく自分で勉強したくないので授業で理解したいものを必要単位数と研究に必要な時間を考慮して空いているコマに入れました。		

【設問7-1】研究科共通科目について

1) 修士課程科目「情報学展望」は、研究科全体の学生を対象とした、情報学の概説と動向などについて扱う専攻横断型の選択必修科目です。

- A. あなたが受講した情報学展望を記入してください。
- B. 情報学展望の授業内容や進め方についてどのような印象をもったか書いてください。

2) その他の研究科共通科目について

- A. あなたが受講した研究科共通科目を記入してください。
- B. 上記科目の授業内容や進め方についてどのような印象をもったか書いてください。

1)-A. あなたが受講した情報学展望を記入してください。

	修士課程	博士後期課程	社会人博士
情報学展望 1	60.0%	0.0%	0.0%
情報学展望 1B	22.5%	0.0%	0.0%
情報学展望 2	5.0%	0.0%	0.0%
情報学展望 2A	5.0%	0.0%	0.0%
情報学展望 4	7.5%	0.0%	0.0%
情報学展望 4B	2.5%	0.0%	0.0%
未受講	2.5%	0.0%	0.0%

1)-B. 情報学展望の授業内容や進め方についてどのような印象をもったか書いてください。

修士課程自由記述	情報学展望
・情報セキュリティに関する話が主で「展望」という名前には合っていないように思ったが、内容自体は興味深く、授業もわかりやすかった。	情報学展望 1
・外国の方の講義の仕方がこれまでの授業とかなり違って戸惑った。	情報学展望 2
・セキュリティの話に終始しており、内容自体は非常に面白くまた勉強になったが、これを展望と呼ぶのか?という疑問は感じた。	情報学展望 1
・最初はちょっと難しいと思いますけど、徐々に慣れれば、たくさんものを学びました。自分の視野も広くになった。	情報学展望 4
・実際役に立ちそうな知識を得られてよかった。	情報学展望 1
・深い内容も紹介され、興味深かった。	情報学展望 1
・なかなか知らない分野の話が続き、前提知識がほとんどないまま進んでつらかった	情報学展望 4
・幅広くセキュリティの内容をおさえていた	情報学展望 1
・俗にいう「情報」についてでの知識が深められると感じた。	情報学展望 1
・何を目的としているのかがあまりよく伝わってこなかった。	情報学展望 1B
・知っている事が多い	情報学展望 1
・現状を踏まえた授業でよくまとめられていた。授業(プレゼン)の進め方が教員よって違ったので、ある程度は統一してほしい。	情報学展望 1
・ほとんど知っていることなので講義の3分の2はでなくても良かったと思っている	情報学展望 1
・中心となるテーマに関して、さまざまな視点から知識を紹介しました。	情報学展望 1
・研究内容と直接は関係しない事柄であるが、どういう形であれ技術者であるからには知っておくべき内容であると感じた。講義の内容も面白く頭に入りやすかった。	情報学展望 1
・興味を持たせるような講義だった	情報学展望 1
・学生の様子を見て授業を進めてくださったので、非常に良かった	情報学展望 1
・情報を扱うものとして知っておくべきことだと思った	情報学展望 1
・もっと広く「情報学」を学ぶと思っていた。	情報学展望 1
・分かりやすかった	情報学展望 1
・教員が二人のリレー方式だったが一部重複している内容があった	情報学展望 1
・広く浅い内容だった	情報学展望 1
・スライドがわかりやすく、とても参考になった。もう少し内容を深めてくれたらもっとよかったと思う。	情報学展望 1
・フランク	情報学展望 1
・情報セキュリティについて実例を交えた話を聞くことができ、貴重な体験になった。	情報学展望 1
・興味を引くような授業の進め方でよかった	情報学展望 1
・広く浅く網羅しているという印象をもった。	情報学展望 1B
・情報リテラシーの時事関連の話やディスカッションがあってよかった。	情報学展望 1B
・情報学展望 4Bの方は毎回招待講演により英語講義で各人の研究している内容や先行研究などを説明してもらえました。	情報学展望 4B

・情報学展望 2A は一般的なリレー講義でした。	情報学展望 2A
・情報化社会で過ごすうえで必要となる知識を得ることができました。また受講時、ウィルス作成罪が成立したので勉強になりました。	情報学展望 1B
・最初の授業で全体の流れを丁寧に説明して下さったので、容易についていけた。授業毎に配布されるプリントが理解しやすくまとめられていて良かった。	情報学展望 2A
・現在の電子情報に関する倫理的な側面について考える機会となってよかったように感じます。	情報学展望 2 / 情報学展望 4
・非常に熱心に指導してくださっている姿が印象に残っています。	情報学展望 1B
・展望というが、IT セキュリティを中心とした授業でした。	情報学展望 1B
・スライドを使いながら、具体例が多く分かりやすかった。授業時間以内に法案の可決があるなどタイムリーな話題もあり、情報系の学生として必要な知識を身につけられたように思う。	情報学展望 1B
・情報学展望科目はほとんどよく準備され、有意義で楽しい科目となった。	情報学展望 1B
博士後期課程自由記述	
・記述なし	
社会人博士自由記述	
・記述なし	

2)-A. あなたが受講した研究科共通科目を記入してください。

修士課程自由記述	
<ul style="list-style-type: none"> ・計算科学入門 ・情報分析・管理論 ・計算科学入門、情報と知財 ・情報分析・管理論 情報分析・管理演習 計算科学演習 A ・情報分析管理論・演習 ・情報分析・管理論（演習） ・情報分析管理論・演習 ・イノベーションマネジメント基礎 ・イノベーションマネジメント基礎 ・情報分析管理論、情報分析管理演習 ・計算科学演習 A, 計算科学入門 ・情報学展望のみ ・情報管理論、情報管理演習 ・デジタル通信工学, 伝送メディア工学特論, 情報ネットワーク, 集積回路工学特論, 応用集積システム, 通信情報特別講義 1, 通信情報特別講義 2, 暗号と情報社会 ・受講していない。 ・情報と知財, 情報分析・管理論, 情報分析・管理演習, 計算科学入門 	
博士後期課程自由記述	
・記述なし	
社会人博士自由記述	
・記述なし	

2)-B. 記科目の授業内容や進め方についてどのような印象をもったか書いてください。

修士課程自由記述	科目名
・今の研究に役立つ内容でよかった	計算科学入門
・様々なトピックについて、演習形式で学べたので実感が持てたのでよかった。	情報分析・管理論
・計算科学入門：最前線の研究にも触れており、非常に興味深いものであった。	計算科学入門
・情報と知財：実際に知財関連で働いてる方々の講義で、実践的であると感じた	情報と知財
・演習と課題レポートが多く大変だった。	複数科目
・様々な分析手法について触れていた	情報分析管理論・演習
・プログラムを扱うという点でいわゆる「情報」ばい科目であると感じた。	情報分析・管理論(演習)
・授業自体が面白くて、授業の後はすぐ演習するので覚えやすいと思うが、週二回の授業だが、3単位しかもらえないのは時間的にもったいない	情報分析管理論・演習
・毎週の課題の量が多くて大変だった。	イノベーションマネジメント基礎
・学部生や他研究科の方々と意見を出し合う講義で大変面白かった	イノベーションマネジメント基礎
・分かりやすかった	複数科目
・計算科学入門は個別研究の事例の中に専門的でよく分からない物があった	計算科学入門
・少し課題が多くスケジュール的にきつい時が多かったですが、実践的な内容が多くて研究にも役に立ちました。	複数科目
・進め方は学部時代のものともあまり変わらないなと思いました。	
・レポート試験の講義は、演習等がないとさぼりがちになってしまう印象がある。	複数科目
・受講していない。	受講していない。
・著作権やデータ管理など、基本的な知識を得られ受講してよかったと思っている。	複数科目
博士後期課程自由記述	
・記述なし	
社会人博士自由記述	
・記述なし	

【設問 7-2】 希望する科目新設

情報学研究科において、あるいは、所属の専攻において、今後どのような内容の科目が新設されればよいと思われますか。

修士課程自由記述
・展望についてはきちんと情報学についての展望についての授業を行い、現在の内容（セキュリティ）はまた別で共通科目にしてくれると嬉しいと感じた。
・社会に役に立つできるの科目とか実践的なのかとかほかの領域と共通があるのがいいと思います。
・新しい情報技術を幅広く知ることができるような科目
・現状のもので満足ですが、プロジェクト科目も卒業単位に認めてほしいと感じました。
・今のままでよい。
・なかなか知らない分野の話が続き、前提知識がほとんどないまま進んでつらかった
・プログラミング系の科目
・IT 企業社長らによるベンチャー論のリレー講座（昔、VBA でやっていたような科目）
・スポーツ関係の情報学
・自身の研究内容を他の受講生に対して紹介する。リレー形式で紹介していき、どの程度要領よく説明できるかを評価する。
・必修科目と被らなければいいですが、被っている状態の中では、機械学習の講義を解説してほしい
・外部から進学した人のためのアルゴリズム実習。競技プログラミングを通してアルゴリズムの基礎を学ぶ

<ul style="list-style-type: none"> ・他の人の研究を知るために、ディスカッションする場を提供する科目があれば良いと思います。 ・哲学が関わる科目があってほしい。
博士後期課程自由記述 <ul style="list-style-type: none"> ・海外短期留学
社会人博士自由記述 <ul style="list-style-type: none"> ・記述なし

【設問 8】 修士論文について

■（修士1回生）（いずれかを選んでください）

- 1) 修士論文のテーマはどのように決めるつもりか
 A 主に指導教員の指導に従って B 指導教員と相談して C 主に自分自身で
 D 指導教員以外のアドバイスに従って E その他
- 2) 学会・研究会発表の経験があるか
 A ある B ない
- 3) 研究の進展度はどうか（自己評価として）
 A 順調 B ほぼ順調 C どちらともいえない D 順調ではない E 未着手
- 4) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足している点をお書きください
- 5) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足していない点をお書きください

1) 修士論文のテーマはどのように決めるつもりか

修士1回生	回答率	前回調査
A 主に指導教員の指導に従って	27.3%	17.0%
B 指導教員と相談して	69.7%	67.0%
C 主に自分自身で	3.0%	13.0%
D 指導教員以外のアドバイスに従って	0.0%	3.0%
E その他	0.0%	0.0%

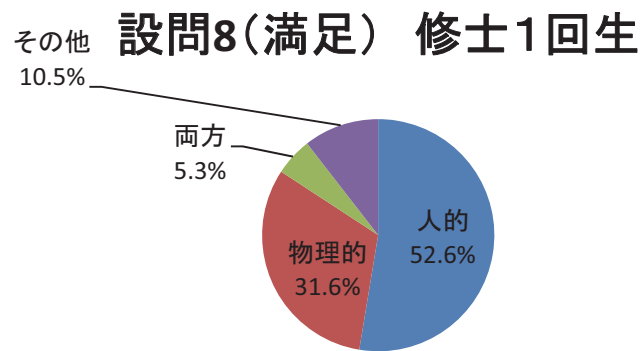
2) 学会・研究会発表の経験があるか

修士1回生	回答率	前回調査
A ある	45.5%	58.0%
B ない	54.5%	42.0%

3) 研究の進展度はどうか（自己評価として）

修士1回生	回答率	前回調査
A 順調	3.0%	3.0%
B ほぼ順調	24.2%	20.0%
C どちらともいえない	30.3%	33.0%
D 順調ではない	27.3%	32.0%
E 未着手	15.2%	13.0%

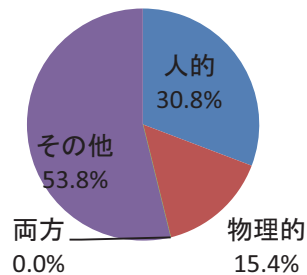
4) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足している点をお書きください



主に指導、人的環境	10件	
・指導教員をはじめとする研究室の先生方の定期的なフォロー		
・現在は修士論文を目標としてはいないが、学会への論文投稿を目標に研究を進めている。手厚く指導していただいております、感謝しています。		
・研究室のミーティングとさまざまな活動を通じて自分の研究分野の発展と状況についての理解がある程度保持している		
・丁寧な指導		
・学外実習が出来ている点		
・先生は丁寧にアドバイスを頂いている		
・素晴らしい教官に恵まれた点。		
・指導教官はとても熱心な人で、いろいろな面において助かりました。		
・研究についてしっかり話し合う機会がある		
・指導教官の指導が丁寧で行き届いている		
主に設備、物理的環境	6件	
・自分用のPCがある。		
・設備は充実している		
・設備は十分		
・計算機資源が豊富		
・計算機環境は十分だと思う		
・設備など研究環境が充実していること		
人的環境と物理的環境の両方	1件	
・毎週ミーティングをして頂き、実験施設も充実している。		
その他の理由	2件	
・まだ、ほとんど進めていないので何とも言えない。		
・研究テーマを自分自身で選べる点		

5) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足していない点をお書きください

設問8(不満足) 修士1回生



主に指導、人的環境	4件	
・修士論文を書くための指導がほとんどない		
・どの時点でどれくらい出来ていたら順調なのかよくわからない点		
・いまいち研究室としてのビジョンが見えない その割にこちらからの働きかけに対するレスポンスが悪い		
・指導教員に出張が多く、相談する時間・機会が失われている		
主に設備、物理的環境	2件	
・客観的な理由もありますが、10号館の耐震工事により、研究室がKRPに移転され、環境がよくなりましたが、交通が不便になりました。		
・クーラーの温度設定が高すぎて集中できない		
人的環境と物理的環境の両方	0件	
・記述なし		
その他の理由	7件	
・前期の講義がいっぱい、必要がある知識を把握するために修士論文を準備する時間があまりない、自分は時間分配に対しても注意すべきだと思います。		
・まだ、ほとんど進めていないので何とも言えない。		
・共同研究など、指導教員が進めているプロジェクトのほうに時間を割く必要に迫られ、自分の研究にあまり時間を割けていない点		
・資金不足		
・進捗状況が芳しくない。		
・講義やレポートが多く、ほとんど研究に割く時間がない		
・講義やレポートが多く、なかなか研究に時間を割けない		

■（修士2回生以上，および，本研究科出身の博士）（いずれかを選んでください）

1) 修士論文のテーマはどのように決めたか

- A 主に指導教員の指導に従って B 指導教員と相談して C 主に自分自身で
D 指導教員以外のアドバイスのに従って E その他

2) 修士課程在学中に学会・研究会発表の経験があるか

- A ある B ない

3) 修士論文の研究成果は十分であったか（自己評価として）

- A 十分 B ほぼ十分 C どちらともいえない D 十分ではない

4) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足できた点をお書きください

5) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足できなかった点をお書きください

1) 修士論文のテーマはどのように決めたか

修士2回生以上, および, 本研究科出身の博士	回答率	回答率
A 主に指導教員の指導に従って	28.6%	0.0%
B 指導教員と相談して	57.1%	0.0%
C 主に自分自身で	7.1%	0.0%
D 指導教員以外のアドバイスに従って	0.0%	0.0%
E その他	7.1%	0.0%

2) 修士課程在学中に学会・研究会発表の経験があるか

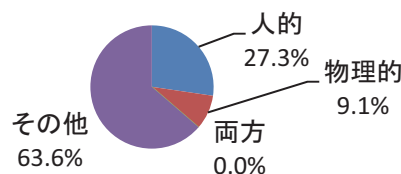
修士2回生以上, および, 本研究科出身の博士	回答率	回答率
A ある	85.7%	0.0%
B ない	14.3%	0.0%

3) 修士論文の研究成果は十分であったか (自己評価として)

修士2回生以上, および, 本研究科出身の博士	回答率	回答率
A 十分	15.4%	0.0%
B ほぼ十分	23.1%	0.0%
C どちらともいえない	30.8%	0.0%
D 十分ではない	30.8%	0.0%

4) 修士論文の準備過程 (指導, 設備等) において満足できた点をお書きください

設問8(満足) 修士2回生以上, および, 本研究科出身の博士

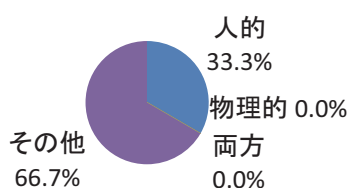


主に指導、人的環境	3件	
<ul style="list-style-type: none"> 非常に熱心に指導していただき非常に満足しています。 自分の研究分野についてのいろいろな知識を教えていただいて、たくさん勉強できました。 必要なタイミングで直接指導教官と相談する機会を設けていただけたことに満足している。学生のことを考えつつ、研究内容についてアドバイスいただけた。 		
主に設備、物理的環境	1件	
<ul style="list-style-type: none"> 学部時代と同じ研究室だったので、使い勝手が良かった。 		
人的環境と物理的環境の両方	0件	
<ul style="list-style-type: none"> 記述なし 		
その他の理由	7件	
<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関する情報を得やすい環境にあること 国際会議や学会での発表の機会が多くあり、論文も投稿する機会を与えていただけているから。 考える時間があまりない。自分の方式よりはかつための技術に依存している。 それまでに得られていた研究成果を、それなりの長さの英語論文としてまとめるという作業に集中して取り組むことができ、満足しています。修士論文を下地にして、その後学術誌に論文を投稿し、無事に掲載されました。 		

・修士期間の複数のトッピングをあわせてストーリーを作りました。	
・海外で発表する経験が豊富に得られたこと。研究室外の研究者と共同で研究する機会が多く得られたために、視野が狭まらなかったこと。	
・論文作成にあたる指針の周知が分かりやすく、特段問題となるものはなかった	

5) 修士論文の準備過程（指導，設備等）において満足できなかった点をお書きください

設問8(不満足) 修士2回生以上，および，本研究科出身の博士



主に指導、人的環境	1件	専攻 知能
・教員みな、自分だけやる気があれば。手放さない。		
主に設備、物理的環境	0件	専攻
・記述なし		
人的環境と物理的環境の両方	0件	専攻
・記述なし		
その他の理由	2件	専攻 社会 通信
・テーマの深さと実験結果を十分に証明してなかったこと。		
・実験に必要な試作回路の設計スケジュールに無理があり、指示された計画そのものが問題だったと思う		

【設問9】 博士後期課程について

■（修士）（A, B, Cのいずれかを選んで回答してください。A, Cにはさらに具体的内容を記入してください。）

A 博士後期課程進学を考えていない。

（博士後期課程についてどのようなイメージをもっているか書いてください）

B 博士後期課程進学を希望している。または、進学が内定している。

C 博士後期課程進学を決めかねている。または、迷っている。

（その理由のうち主なものを書いてください）

修士課程	回答率	前回調査
A 博士後期課程進学を考えていない。	66.7%	45.0%
B 博士後期課程進学を希望している。または、進学が内定している。	7.4%	11.0%
C 博士後期課程進学を決めかねている。または、迷っている。	25.9%	44.0%

博士後期課程進学を考えていない。博士後期課程についてどのようなイメージをもっているかの具体的内容
・研究が本当に好きな人でないと進むのは難しいと思う。
・研究の計画や論文投稿など全て自立的に行わなくてはならない
・よくわからないから。
・研究室の雑多な作業を任せられ、その上就職などにも有利ではなく、学校の教員になろうと思わない限りメリットを感じない
・自殺率が高い。病んでしまう。社会的弱者。
・現在のテーマを、修士修了後さらに3年間続けることが想像できない。

- ・自分で明確なテーマを持って取り組んでいるイメージ。今の自分にはそれがない。
- ・本当に研究したい人だけが行くもの
- ・博士後期課程に進学する場合は将来研究で生計を立てる人が多いと思っている。
- ・博士後期課程に進学した場合、就職に困りそうなイメージがある。企業がうまく採用してくれるかどうか不明なので。
- ・専門分野の研究を心から楽しんでいる人が進学するイメージ

博士後期課程進学を決めかねている。または、迷っている。理由の具体的内容

- ・博士号を取得後研究者としてやっていく自信がない
- ・博士課程の内容には非常に魅力を感じるが、現実的に収入のことを考慮するならば就職した方が有利であり、就職にも強い興味があるので、決めかねている。
- ・自分は研究に合うかどうか分からない、研究をうまく出来るに対して、あまり自信がないのです。
- ・博士進学した場合の就職や金銭問題
- ・就職するのに必要かどうか分からないため
- ・修士課程で面白いテーマができるかどうか、つまり、博士に行って、研究を続ける価値があるかどうか
- ・博士卒業時に就職できるか。

■ (博士) (A, B, C のすべてに回答してください)

A 博士後期課程に進学・入学してよかったと思う点について書いてください

B 博士後期課程に進学・入学してよくなかったと思う点について書いてください。

C 現在、希望する進路について書いてください。

博士後期課程に進学・入学してよかったと思う点の具体的内容

- ・自分の興味のある分野について学び続けることができる。海外連携や企業との共同研究など、社会人一年目ではできない経験ができる。
- ・企業での生活の経験がないので主観的な判断となりますが、かなりの時間を自由な研究活動に費やすことができることが最大の利点だと思います。
- ・修士期間のテーマをもう一步進めること。
- ・修士で残っていた研究テーマに取り組めたこと。海外や国内の研究所、大学に滞在して研究や発表を行う経験が豊富に得られたこと。
- ・しっかり腰を据えて研究活動に取り組めたこと。様々な講演を聴くことができた。

博士後期課程に進学・入学してよくなかったと思う点の具体的内容

- ・友人が卒業し、同期もいなくなり、孤独な環境になった。
- ・今はよくても、やはり将来の不安が大きいです。
- ・基本的に各自が研究を行うだけなので、他の博士学生との交流を行う機会が少ないこと。
- ・期待した研究ができなかった点、研究指導が不十分な点、指導教員と指導教員以外の教員の指示がばらばらでダブルスタンダードが多い点、本研究科では業績が評価されない点、進学当初より景気が大幅に後退しており就職が難しい点

現在、希望する進路についての具体的内容

- ・大学教員
- ・大学教員、国立もしくは企業の研究所の研究員等が理想ですが、それが無理でもなんらかの科学研究に近い位置の職につければよいと考えています (サイエンスライターなど)。
- ・研究職
- ・企業に就職
- ・就職
- ・企業研究機関への就職

【設問 10】学修環境

情報学研究科における学修環境，研究環境に関して，下記の各項目について意見，感じたことがあれば書いてください。

- A 施設，設備
- B コンピュータ，情報通信環境
- C ガイダンス（研究科，専攻），履修指導

A 施設，設備

修士課程自由記述
<ul style="list-style-type: none">・ KRP は遠い・・・(やむを得ないことと思うが)・ いいね・ 教室棟の移動が多い・ 改修後の 8 号館は非常に利用しやすくなったという印象があります・ とても快適ですごしやすい。・ よい・ 10 号館の授業を行う部屋のコンセントが少ない・ 10 号館以外の講義室にもコンセントが欲しい・ やや古い・ 10 号館の情報 2 においては若干コンセントが足りないとなっていますが、延長コードの使用によって、何とか解決となりました。・ 問題ないと思う・ 10 号館に戻りたい。KRP は京大から遠い。・ 自転車の空気入れがほしい。・ 研究室が宇治にあるので、授業を受けに吉田に行った時、一息つける場所や荷物を置いておく場所がなく少し不便でした。・ 十分な設備だと思います。・ とても良いと感じました。・ 耐震改修もあり，環境や設備には満足している。・ よい
博士後期課程自由記述
<ul style="list-style-type: none">・ 工学部 2 号館，8 号館，10 号館等の建物の老朽化に不満がありましたが，最近の耐震改修工事による改善で特に不満はなくなったと思います。・ 計算機は多いが，工作機械などが無い。計算機は各研究室で買えるので，研究科には，スーパーコンピュータや工作機械など，研究室で買うには高い or 大きいものが充実してほしい・ 書籍の購入の手続きが面倒だと聞き，これまで利用せず，自費で購入している。・ 研究遂行に必要な測定器がないのにもかかわらず研究遂行を指示するのは問題だと感じた。
社会人博士自由記述
<ul style="list-style-type: none">・ 記述なし

B コンピュータ, 情報通信環境

修士課程自由記述

- ・無線 LAN にもう少し安定してアクセスできるようにしてほしい。
- ・配布のノート PC のスペックは非常に低く、かなりしんどい
- ・遅い！更新してください
- ・貸し出しノート PC が重い
- ・スパコンを自由に使うことができるのは良いのですが、マニュアルの存在があまり周知されていないなど、利用者に優しいシステムがあまり構築されていないのが残念だと思います。
- ・学習に用いているが、とても便利である。
- ・よい
- ・貸出コンピュータのスペックをもう少し高くしてほしい
- ・配布されたノート PC のスペックが最悪。
- ・便利だと思う
- ・MIAKO のスループットをもう少し大きくしてほしい。Eduroam は良いシステムなのに、あまり広報されていない。
- ・MIAKO だと VPN 接続するのが面倒
- ・とても満足です。ただ、若干デスクトップがあればいいかもしれないという感じです。
- ・無線 LAN が利用できる部屋がまだ限られている印象を受ける。
- ・問題ないと思う
- ・ノート PC が使い難い
- ・富士通のひどいデザインの PC ではなく macbook を支給すべき。あるいは Linux を標準 OS にすべき。
- ・レンタル PC の動作が遅く、研究室所有の PC でシミュレーションをすることが多かった。研究科として高速な計算機サーバを用意してほしい。
- ・無線 LAN の設定のための資料はガイダンスで配ってほしかった。
- ・十分な通信環境だと思います。
- ・とても良いと感じました。
- ・研究科配布のノート PC が、若干使い辛いように思う。(バッテリー持続時間など)
- ・大丈夫

博士後期課程自由記述

- ・研究科配布ノート PC が、リプレース当初の時点で既にほぼ使い物にならなかったです(性能, バッテリーの持ち)。必要な研究室では独自にコンピュータは導入しているはずなので、不要ではないでしょうか。無線 LAN について、研究科独自に AP を設置していた頃はなぜか Linux 環境からの KUINS PPTP 接続がつながりにくいという問題があったのですが、全学共通の MIAKO 仕様になってからは改善しました。
- ・無線 LAN が使いにくい。以前よりは使いやすくなった点は評価できる。

社会人博士自由記述

- ・記述なし

C ガイダンス (研究科, 専攻), 履修指導

修士課程自由記述

- ・成績表が学部の時と同じくらい早くに出て欲しい
- ・いいね
- ・研究科のガイダンスは長すぎだと思います。
- ・履修に対する理解が深まり、よかった。
- ・よい
- ・よいと思う
- ・とても満足です。事務や指導教員なども大変優しく、熱心な人です。
- ・取った方がいい課目などのアドバイスはなかった気がする
- ・レポートが多い。同じ期間にまとめて出題されると辛い。

<ul style="list-style-type: none"> ・説明が日本家電メーカーの説明書のようにわかりにくい。もっと読む人のことを考えて。 ・満足しています。 ・よい
<p>博士後期課程自由記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修士時代に幅広く興味のある科目を履修するように指導されたものの、後に日本学生支援機構第1種奨学金返還免除申請の際に、「全優」で1点がつくという項目で、修了に必要な単位数を超えた部分も含めて全優でなくてはならないと聞いて、興味があつて履修した科目の成績評価が厳しくて優がとれず（他は全て優以上だった）、1点がつかなかつたことに矛盾を感じました。かと言って、上位30単位の全優を条件にすると、条件を満たせるまで興味のない科目を履修し続けるという戦略をとってしまうので、なかなか難しい問題かもしれません。いっそ全優による1点加算をなくしてしまうのが最善かな、と個人的には考えます。（ちなみに、免除申請自体は他の項目がよかったおかげで無事に全額を免除していただきました。ありがとうございます。） ・博士の履修指導は初年度以外なかった ・博士課程進学後にガイダンスの案内が全く通知されていないのはどうかと思う。
<p>社会人博士自由記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会人博士だと、ガイダンス他、キャンパスに通うことが制限されます。また、他の学生との交流もほとんどないため、学内での情報に疎くなりがちでした。

【設問 11】 各種支援制度、留学制度など

情報学研究科における生活支援等の体制（相談、助言体制、就職支援等）、奨学金など経済的支援制度、TA、RA、留学制度などについて意見、感じたことがあれば書いてください。

<p>修士課程自由記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生に向かつての留学機会がちょっと少ないと思います。ほぼ日本人学生さんだけですか。もしほかの国と交流機会がもっと多くなれば、わざわざ卒業した後アメリカとかカナダへ留学続ける必要があんまりないと思います。 ・TA、RA チャンス少ない！ ・留学はまだ少し金銭やカリキュラムとの兼ね合いでハードルが高い ・TAは学生にとって収入源だけでなく、他人へ教えることによって学習する場でもあるので、TAにかかる予算は現状通り維持すべきだと思います ・留学制度などが充実していない印象がある。海外の研究室と連携して、そこに留学する制度などがあればいいと思う。 ・奨学金の返済免除基準を明確にしてほしい。 ・まだM1で、TA、RA やった経験がない。G30は英語で授業を受けるし、授業料も減免できるのはいいと思う ・奨学金やTA制度は大変助けになっていますが、予算内、もう少し増やせばよかったと思います。 ・授業によってTAの負担の差が大きい。 ・返済義務のない、借金ではない奨学金を増やしてください。 ・TAに関して授業ごとにTAの負担の差が激しいので、負担の見直しや給与で差をつけるなどの対策をしてほしい。 ・支援を希望する人には十分な支援が受けられる環境にあると感じています。 ・奨学金やTAなどの制度が充実しているので、自宅生ならバイトせずに生活できるのがよいと思います。 	
<p>博士後期課程自由記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(研究科の問題ではありませんが) 学振特別研究員の奨励金をいただいておりますが非常に恵まれていると感じていますが、独立生計で学費免除を申請しても半額しか認められず、年額27万円弱をとられるのが重い負担となっています。また、日本人学生に対する奨学金にあたるものが、上記の特別研究員制度を除けばほぼ日本学生支援機構の貸与奨学金に限られているという現状も問題とを考えます(大学院分については返還免除制度があると言っても不確実なものです)。 	

<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートをメールで送信だと、結局個人を特定する可能性を残すので印刷した紙の方が良いと思いました。 ・TA, RA 制度の充実を望む。 ・各種支援制度に限らず、あらゆる環境が工学研究科と比べて圧倒的に劣っていると感じる。正直言って、早い段階で別の大学に転学した方がよかったと思う。 	
社会人博士自由記述	
<ul style="list-style-type: none"> ・記述なし 	

A.5 修了生アンケート

目次

まえがき

アンケート調査の依頼

- 質問 01 情報学研究科修士課程で受けた教育や指導についての満足度
- 質問 02 情報学研究科の共通科目「情報学展望」についての感想（自由記述）
- 質問 03 在学中の奨学金など経済的支援、設備、旅費などのサポート（自由記述）
- 質問 04 修士論文となった研究成果の対外発表や論文発表について（自由記述）
- 質問 05 修士論文の研究指導の進め方について（自由記述）
- 質問 06 研究科横断的な教育の「専門コース」の必要性について（自由記述）
- 質問 07 実務的・実践的教育の「特別コース」の必要性について（自由記述）
- 質問 08 近い研究分野が別々の専攻に分散していることの問題点（自由記述）
- 質問 09 情報学研究科で今後行うべき研究や設置すべき専攻（自由記述）
- 質問 10 学部・大学院で得た知識や経験が就職後に有用であるか（自由記述）
- 質問 11 京都大学情報学研究科出身者と他大学、他研究科出身者の違い（自由記述）
- 質問 12 情報学研究科の同窓会活動について（自由記述）

各専攻における教育・カリキュラムについて

知能情報学専攻

社会情報学専攻

複雑系科学専攻

数理工学専攻

システム科学専攻

通信情報システム専攻

まえがき

情報学研究科は、平成10年に設立されてから平成24年3月までの14年間に、合計2300名の修士課程修了生を社会や博士後期課程等に送り出してきた。情報学研究科の教育研究上の目的としては、平成20年に以下の文章を教授会において決定し、研究科ホームページ等で公表している。

情報学研究科は、人間と社会とのインタフェース、数理的モデリング、および情報システムを3本柱として創設され、情報学の新たな学問領域を開拓し、総合的な視野から先駆的・独創的な学術研究を推進することで、情報学の国際的研究拠点としての役割を果たすことを目指している。また、高度な研究能力と豊かな学識を涵養することで、情報学を発展させる研究者、および、質の高い専門的職業人を養成し、知識社会のさまざまな課題を解決するリーダーとなる視野の広い優れた人材を育成することを教育の目的としている。さらに、産官学連携・地域連携や社会への情報発信を通して、健全で調和の取れた知識社会の発展に寄与し、京都大学の基本理念である「地球社会の調和ある共存」に貢献する事が情報学研究科の大きな目標である。

ここで謳われている目的に沿った教育が行われているかどうか、教育のさらなる改善を図っていくにはどうすればよいか、また社会からの期待に適っているかどうか、といった事項を、研究科としては不断に確認し、必要に応じて見直しを進めていく必要がある。本調査は、情報学研究科修士課程の修了生を対象として実施したアンケート調査であり、実際に情報学研究科の教育を受けた経験者による、研究科の教育に関する一種の外部評価としての意味合いを有している。

本アンケート調査は、情報学研究科同窓会の協力のもとで実施された。アンケートは同窓会の名簿システムにおいて把握されている修士課程修了生に対して電子メールで発送され、得られた回答を集計した。同窓会で把握できている修了生の割合は高くないため、得られた回答の総数は20件程度に留まっている。設問は、基本的には平成18年に行った前回のアンケート調査におけるものと同一であるが、前回の調査に含まれていた「情報学シンポジウム」に関する設問は、同シンポジウムの性格づけがこの6年の間に大きく変化してきているため、今回の調査では省略した。

真摯な回答を寄せていただいた修了生の方々、ならびに調査の実施にご協力いただいた情報学研究科同窓会に感謝の意を表するとともに、本調査にもとづいて、情報学研究科における教育と人材育成についてより一層の改善に努めていきたい。

なお、本報告書に記載するにあたり、自由記述欄の回答において内容を変えない範囲で表現を修正した箇所がある。



京都大学大学院情報学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-5370 FAX：075-753-5379
総務掛
140questionnaire@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

アンケートへのご協力をお願い

平成 24 年 7 月 30 日

京都大学大学院情報学研究科
修士課程修了生各位

情報学研究科は、平成 10 年 4 月の設立以来 14 年が経過し、通算 2300 名の修士課程修了生を社会や博士後期課程に送り出してきました。その間、京都大学も平成 16 年 4 月に国立大学法人となり、中期目標・中期計画のもとに教育改善や組織改革の課題等に取り組んでおります。平成 18 年には、情報学研究科の自己点検・評価に関連し、修了生の皆様に在学中の教育や研究指導に関するアンケート調査を実施させていただきました。

本年度は、第 2 期の中期目標・中期計画のもとで、研究科の教育に関する自己点検・評価が予定されています。前回のアンケート調査の結果とも対比することでこれまで研究科で行ってきた教育改善等に関する自己点検・評価のための資料といたしたく、今回、本研究科の修了生の皆様にアンケートを実施させていただくことといたしました。

お忙しいところを大変恐縮ですが、どうかよろしくご協力の程、お願い申し上げます。

ご回答いただいたアンケートは、集計して今後の研究科と専攻における教育改善や教育評価の際に参考にさせていただきますが、その他の目的で本アンケート結果を利用することはございません。回答に際しましてお名前の記入は不要です。

添付のファイルにご回答をご記入いただきました上、本電子メールへの返信メールに添付してお送りください。もしくは、印刷出力したものを FAX や郵送にてご送付いただきましても結構です。整理の都合上、8 月 14 日（火）までにご返送いただけますようお願い申し上げます。

なお、本アンケート用紙は情報学研究科同窓会のご協力を得て、同窓会の名簿システムを利用して送付しております。

京都大学大学院情報学研究科
研究科長 佐藤 亨

■質問 1

情報学研究科の修士課程で受けた教育や指導等についてお尋ねします。

次の 1) から 10) の各項目について、以下の 3 から 0 のいずれかを選んで をチェック願います。

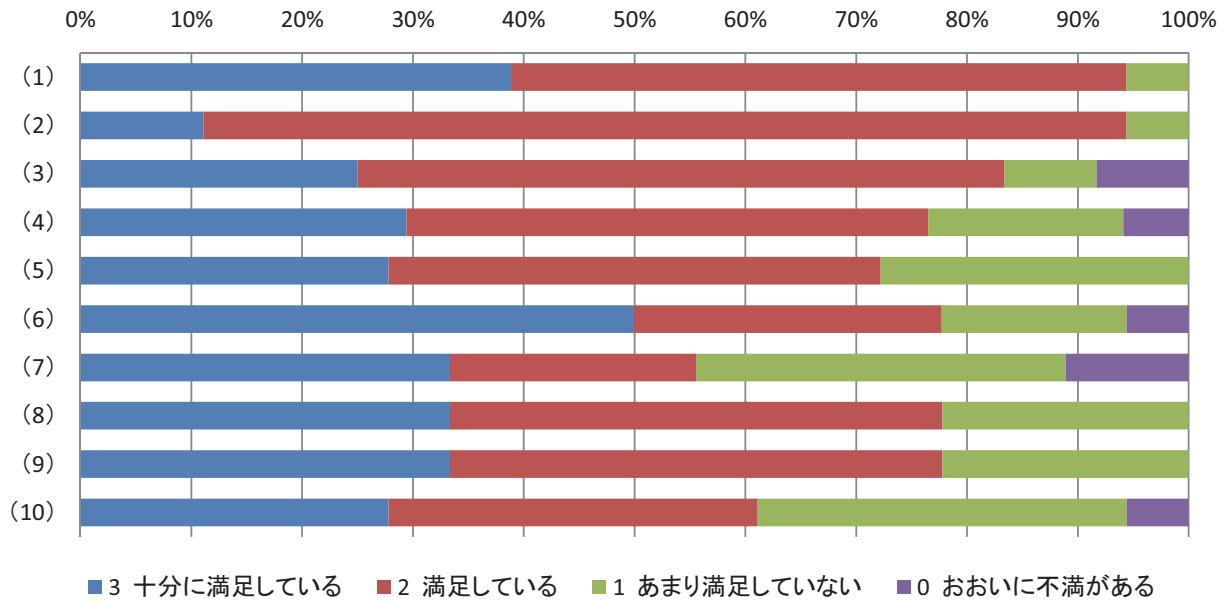
- 3 十分に満足している
- 2 満足している
- 1 あまり満足していない
- 0 おおいに不満がある

また、項目 (1) から (10) に関連して、特に強く印象に残っていることがあれば、自由記述欄にお書き下さい。
(自由記述)

- ・質問 10 への回答でも述べますが、修士課程の授業科目の内容が、学部の授業科目に比べてインパクトの小さいものであったのが残念であったと記憶しています。一方、私の在籍当時、他大学・他学部からの進学者に対して、学部科目の聴講を強く勧めていたことから、実効上は学部科目を含めるといふ形により、十分な量と質の授業の確保がなされていたといえるのかもしれませんが。
- ・PC、実験機材等、研究に必要な環境が整っていた。そのため、自分のやる気さえあれば、どんなことでもできると思う。
- ・事務・教務の対応が最悪だったことだけは強く印象に残っている。
- ・大学院の授業のレベルが学部と同レベルまたはそれ以下の内容であることが多く、不満。
- ・情報学研究科発足時の入学だったため、授業内容など工学研究科とあまり変わらなかったと思うが、一部情報学の他専攻の授業で学部までとはまったく毛色の違った授業が新鮮で面白かった。
- ・研究の進め方につき、私の代では直接指導していただける先輩はいらっしゃいませんでした。そのため、先生に直接指導して頂くことが多かったのですが、その際なぜそんなこともわからないのかという怒られながらの指導が多く、結局は身に付かず研究の方法はわからないまま卒業したのが本音です。優秀な世代の先生方との差を非常に感じた3年間でした。
- ・私は人類の知の先端に立つような仕事をしたかったのだが、私のいた講座の教授たちはどう考えても卑小な目標しか持たず、大きな夢を語るとつまらない論理的なミスをあげつらって、学生の可能性をつぶしてしまうような人たちだった。大学に何かを期待した私が間違いとも周囲の者は慰めるが、やはり許せない。人類の知の先頭に立ちたいのだ、せっかく賢く生まれたのだから、単に楽しく知的な人生を送りたいだけではないのだ、という気持ちを持った志高い学生が生き生きとしている場所をどうか提供してほしい。
- ・インドネシア EAR でおよそ 1 か月間の観測を行った。海外に行ったことがなかったのでいい経験になった。
- ・複数アドバイザー制度の導入は良かったと思う。特に外部の先生にアドバイザーをお願いしたので、「大学院に行く人間づきあいや世界が狭くなるのでは？」と少し不安だったが、逆に世界がひろがり大変充実した修士時代を過ごすことが出来たので良かった。

- | | | | | |
|----------------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| (1) 修了した専攻開設の「授業科目」の内容 | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (2) 修了した専攻開設の「授業科目」の進め方 | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (3) 修了した専攻に「実験・実習科目」があればその内容 | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (4) 修了した専攻開設の科目における学部教育との連続性への配慮 | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (5) 修了した専攻におけるカリキュラム | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (6) 修了した専攻・分野における修士論文の指導 | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (7) 修了した専攻・分野における進路指導や就職サポート | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (8) 自分自身の「授業科目」「実験・実習科目」への取り組み | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (9) 自分自身の修士論文への取り組み | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |
| (10) 修士論文の成果 | <input type="checkbox"/> 3 | <input type="checkbox"/> 2 | <input type="checkbox"/> 1 | <input type="checkbox"/> 0 |

質問1



■質問2

情報学研究科の共通科目（必須）である「情報学展望」を受講しどのような感想をもたれたでしょうか。（自由記述）

- ・もう覚えていない・・・
- ・あまり印象に残っていません・・・
- ・専攻と直接関係がない内容であっても、応用に関する考察のために有用だと考える。
- ・記憶がない。
- ・すみません・・・。情報学展望という講義の記憶がありません。
- ・オムニバス形式の授業だったので、さまざまな分野の話を聞くことができよかった。為になった。
- ・申し訳ありませんが、覚えておりません。
- ・すいませんが、もう記憶に無いです。あったとしても、私の今の仕事が、情報処理のたぶん最先端なので、大学で聞いたような大学の先生が自分の知っている範囲で組み立てた話など、よほど考えて作ったもので無い限り、まるで聞いた意味は無かった、聞くだけ時間の無駄であったのではないのでしょうか。大学では勉強に没頭する時間が貴重です。余計な話を聞いても、虚しくなるだけです。
- ・申し訳ありません。この科目の内容について記憶があまりありません。
- ・複雑系科学専攻（応用解析学講座）の自分とは内容があまりにも関係性が無さ過ぎて、レポート内容に困った。
- ・Quite an impressive eye opener. Shame that I didn't have enough energy to study further.
- ・受講した「情報学展望」は、講師の先生が毎回変わるオムニバス形式であった。個々の授業では興味深い内容もあったが、全体的な方向性が理解できなかった。また、計算機（科学）に関する知識が前提になっている場合もあり、そのようなバックグラウンドを持たない院生にとっては難解に感じる講義もあった。
- ・情報セキュリティについての基本的な事項が学べて良かった。
- ・覚えていない。
- ・情報学というと情報工学的な観点でしか見ていなかったが、いろいろな観点から情報学をみるようになった。新しい視点を与えた。
- ・情報学という分野があまりにも広い分野から構成されているため、「自分が受講したい、受講してついて行けそう」と思う内容が自分がMIの時には開講されていなかったが、翌年の展望の内容の方が興味深く感じたので、情報学を広くとらえる、という点から考えると複数専攻の先生方のリレー講義（広く浅い）の方がいいのかな、と思った。

■質問3

在学中の経済的支援（奨学金等）、研究設備や研究旅費のサポート等を振り返ってどのような感想や意見をお持ちでしょうか。

（自由記述）

- ・あまり記憶にない
- ・研究設備や研究旅費のサポート等は充実していました。奨学金等は特別なものではありませんでした。
- ・研究設備、研究旅費については充実していたと思う。
- ・個人的には非常に強いサポートを受けた。ただし在学中にはその本来の目的を達成することに意識がなかったのが心残りではある。
- ・おおむね平均的に思う。研究設備についてはもう少し充実していればと思った。
- ・奨学金にはお世話になった。
- ・育英会の奨学金をもらっており、研究に関しては所属研究室からのサポートも十分で、全く不満はなかった。
- ・修士のときは、奨学金をもらうことができなかったので、生活面で少し苦勞しました。研究設備や旅費のサポートについては満足しています。
- ・研究設備や研究旅費のサポートにつきましても、不満はございません。ただ、研究成果によって奨学金の返済免除の制度があると思いますが、修士論文後に賞をいくつか受賞したにもかかわらず、卒業時点ではなかったため、返済免除に申し込むことができませんでした。大変残念でした。
- ・研究設備（主にPCや書籍）について不便を感じたことはありませんでした。
- ・1回だけ海外の研究集会（ドイツ）に同行させていただいたときに、十分すぎる旅費の補助があったのは非常に満足している。普段の研究設備に関しては、もともと専攻が多額の研究費を使うような分野でなかったため、あまり恩恵を受けた記憶は無い。
- ・I didn't get any scholarship. They are so competitive that the possibility is basically not worth the time. However I got some money from the lab as TA salary, which helped my life quite a lot.
- ・在学中は、日本学生支援機構の第1種奨学金を受けることができたりいくつかの学会への参加のための旅費を研究室から支援していただいたりした。また、修士修了直前にGCOEプログラムにおける「海外武者修行プログラム」の支援を受けて海外での研究成果の発表や研究内容についての議論を行うことができた。このような支援は博士課程での研究の進展にもつながり大変ありがたいものであった。しかし、一般論としては、奨学金の予約採用を受ける院生の選び方は院入試の成績だけではなく、実際の経済的状況を考慮に入れるべきである。
- ・費用面では不満はなかった。廃却する計算機類について、他研究科の研究室でパソコンを買うお金もないという研究室があると聞いたことがあるのでうまく移管できないかと感じた。
- ・博士に対しては学振以外のサポートも厚くすべき。・研究関係のサポートについては大変満足している。・修士学生への奨学金等の支援については個人的にはそれほど必要性は高くないと考えるが、他大の修士学生は手厚く支援されている。
- ・学会出張や海外での観測などすべてにおいて旅費が出たのはよかった。ただ、海外への出張などある程度の出費が必要な場合は一時金の支給などはしてほしかった。
- ・私は奨学金等は使用しなかったですが、研究設備や研究旅費のサポートはかなり充実（むしろ入学前の予想よりよすぎた）していたと思います。

■質問 4

修士論文となった研究成果について、関連成果も含めて学会・研究会・国際会議等における対外発表を何回くらい経験したでしょうか。また、最終的に、学術雑誌や国際会議の会議録などの論文となったでしょうか。（卒業後に共同研究者が発表した場合も含まれます）

（自由記述）

- ・ 4 回くらい。いくつか論文となった。
- ・ 対外発表は 1～2 回経験しました。論文にはなりませんでした。
- ・ 体外発表は 4 回くらい、論文はありません。
- ・ 1 回。
- ・ 5 回程度発表した。学術雑誌および国際会議の論文にも収録されたが、ほとんどは学部時代の研究の成果であり、修士の研究とはほとんど関係がない。
- ・ 国内査読なし 2 回、海外査読あり 2 回。海外査読ありの方はどちらもジャーナルあり。
- ・ 国内学会、国際学会ともに多数発表し、また学術論文として国際誌にも掲載された。
- ・ 修士論文の研究成果に関する内容で、国内会議 2 回、国際会議 1 回を経験しました。また、学術雑誌にも投稿しました。
- ・ 国内会議を 8 回程度、国際会議を 2 回発表致しました。私の研究成果を後ほど使い、論文とレターの採用があったそうです。また、国際会議にも 1 回出席したそうです。
- ・ 0 回。
- ・ 対外発表は研究会での発表 1 回のみでした。
- ・ 修士論文の審査会で発表したのみで、対外発表は行っていません。雑誌等にも掲載されていない。
- ・ とても恥ずかしいながら、在学中発表することはありませんでした。。卒業した後も発表する知らせはありません。
- ・ 国際研究集会での研究発表は 3 回。国内研究集会での研究発表も 3 回。修士論文の成果は学術誌に投稿し、出版されている。
- ・ 4 回程度。国際会議の論文となった。
- ・ 国内口頭発表 7 件の発表を行い、最終的に 2 件の学術論文誌としてまとめた。
- ・ 学会発表 1 回、研究会発表 5 回、共同研究者発表 3 回 査読付き論文 2 誌
- ・ 3 - 4 回

■質問5

修士論文作成の研究指導は、ひとりの指導教員による指導、指導教員を中心とした分野単位での指導などいろいろなケースがあると考えられますが、あなたの場合はどうでしたか。

ひとりの指導教員による指導、指導教員を中心とした分野単位の指導、複数名の教授、准教授・講師からなる大講座単位での指導、複数アドバイザーによる指導のいずれがよいと思われますか。

(自由記述)

- ・複数アドバイザーが良い
- ・私の場合は、「指導教員を中心とした分野単位の指導」でした。研究指導の実効性を確保し、その責任を明確にするという意味で、「指導教員を中心とした分野単位の指導」がよいと思います。
- ・基本的には1人の講師に指導してもらっていました。ただ、週1回、研究室内での進捗報告の際は、教授等、研究室に属する教員から指導がありました。個人的には、上記のようなスタイルがいいなと思っています。
- ・実態としてひとりの指導教員による指導でした。指導教員の単位よりは、細かなスケジュール、目標管理のほうが重要だと思います。
- ・指導教員を中心とした指導だったが、あまり熱心とは思えず、分野の別の教員による指導が主だったと思う。今後はどのような形であれ複数名による指導がよいと思う。
- ・ひとりの指導教員の場合しか知らないため、どれがよいかは分からない。私の場合について、不満はない。
- ・教授が中心となり、先輩、外国人研究者など数人でまとまって研究を進め、その中で指導していただいた。自分を含めて3～4名程度の人数であった。一人の指導教員よりもこのような(多すぎない)数名程度の単位が機動力もあり、密度の濃い指導ができると思う。
- ・教授と助教の2人の先生から指導を受けました。指導教員を中心とした分野単位の指導がよいように思われます。
- ・ひとりの指導教員による指導が良いと思います。複数人の先生による指導はそれぞれの論理が異なる場合があるので、その調整が困難であると予見されます。
- ・大講座単位での指導。
- ・基本的に、ひとりの指導教員による指導でした。指導教員を中心とした分野単位の指導がよいと思います。ひとりの指導教員による指導の場合、その教員の方針と合わないなどのトラブルや、他の同期との論文の進捗の遅れなどの悩みが発生しやすいように思うためです。同格のアドバイザーが複数いる場合、アドバイザー毎に意見が違い、どのアドバイザーの指示に従うかなどの問題が発生するので好ましくないと考えます。
- ・ひとりの指導教員による指導であった。自分としてはこの指導方法に満足しているが、指導方法は全学生に対して一律で決められるものでもないと思う。
- ・自分の場合、指導教員を中心とした分野単位の指導でした。いろんな教授のご意見を聞くことができ、とても勉強になりました。
- ・基本的にセミナーを通して指導教員による指導を受けた。研究内容についてある程度の進展が見られた段階で、自主的に研究をまとめるよう促されたことは、自立的に研究を行う力を養う意味でもありがたかった。また、他大学の研究者との修士論文の内容とは別の研究テーマについての研究交流を認めていただいた。そのことも、その後の研究を進める際には大きな意味があった。「情報学」は様々な分野に影響をうけ発展し、またそれらの分野に寄与していくべきものである。そのため修士課程での指導も、指導教員を含む所属研究室の複数のスタッフ、他研究室、場合によっては他専攻・他研究科や他大学の研究者にもアドバイスを仰げるような寛容性があった方がよい。
- ・ひとりの指導教員による指導が中心だった。研究内容については主にひとりの指導教員による指導で、論文の指導は複数教員の指導が良いと思う。
- ・一人の指導教員による指導であった。そのまま良いと考えます。
- ・主に助教によるマンツーマン指導でした。1対1でやってもらって逆にスムーズ進んだと思っている
- ・個人的には様々な人の意見を聞き、研究に反映できるのか、理想だと思うが、最終的に修士論文となった時の評価は指導教員が中心となって行なうので、アドバイザーの位置づけが、もう少ししっかり(はっきり)したものになったらいいと思う。

■質問 6

ある特定なテーマの科目を集中して受講すれば、(修士論文以外の)修了に必要な単位がすべてそろそろような研究科横断的な「専門コース」(例えば、生命情報学コース、人工知能・ロボットコースなど)が、もしあったとすれば、受講したでしょうか。

情報学研究科には、今後、どのような「専門コース」が必要でしょうか。

(自由記述)

- ・卒業生にも協力を得ながら、実践的なビジネス研修コースがあるとよい。
- ・ご質問のような研究科横断的な「専門コース」の必要性については、よくわかりません。
- ・内容にもよりますが専門コースがあれば、受講していたかもしれません。
- ・受講したと思う。人間の心理的、運動学的特徴を考慮したマン・マシンインタフェースを考察するコースが必要だと思う。
- ・興味は持つが実験などで忙しかったので受講はしなかったと思う。情報学の課題やテーマの移り変わりは早く、また必要とされる知識も変わるので、今後は研究科横断というよりは全学横断ぐらいの専門コースが必要なのではないか。あるいは外部からの講師の招聘や、他大学の講座との連携や単位相互認定が寄り重要になると思う。
- ・内容によっては受講する。ソフトウェア工学など、就職後に即戦力としてSI企業で活躍できることを目標としたコース、があるとよいかも。
- ・非常に面白いと思う。自分の興味にあうコースがあれば積極的に受講を考えたと思う。
- ・受講したかもしれません。
- ・いえ、実践的に一つのことに取り組む現在の修士論文の教育方法が有効と考えます。そこから得られる経験は絶大です。
- ・「データ分析特論」のような講座。
- ・専門コースがあれば受講してみたいですが、修士課程の段階では幅広く学ぶことの方が重要である気がします。実際、企業に入って研究を行う場合、大学院で学んだ専門内容をずっと継続して研究することは極めて稀です。修士課程修了レベルでの専門性は修士論文程度でよいと考えます。もし専門コースを設置するのであれば、中途半端な専門家にならないように、世界トップレベルの専門性が身につくようなカリキュラムにすべきです。
- ・自分は受講しなかったと思われる。
- ・自分の場合、研究科横断科目を参加したことはありませんでした。自分の研究分野の先端技術がどうやって実用して、人の生活を変えている——もしこのような情報が紹介してくれるコースがあれば素晴らしいと思います
- ・私は数学や物理とその応用に興味があったので、数学や物理に関する基礎が学べ、それらがどのように応用されているかを知ることのできる専門コースがあれば受講していたかもしれない。しかし、当初あまり興味を持っていなかった授業科目でも、何年か後になって役に立つこともある。現状のように、所属専攻提供科目を中心とし受講し、他専攻や他研究科提供科目で取得した単位を修了に必要な単位として認定する制度があれば問題ないと思われる。情報学はいろいろな可能性を内包した学問であるから、院生の志向性も個人によってさまざまあるし、本当に興味のある科目であれば院生は単位の認定をあまり考慮に入れずに受講するはずである。専門コースを制度化するよりも、院生個人の判断を寛容に受け入れる制度を残す方がよいと思う。
- ・受講しなかった。
- ・座学は本人の意思次第で自習できるのであまり意味はない。
- ・もともと情報処理に関する研究を行いたかったが入試の成績でまったくテーマをやることになった。結果的に非常に満足しているが、当時としては情報処理の研究も体験してみたかったからそういう試みは必要だと思う。
- ・情報学研究科が、どのような人材を社会に送り出したいか、によると思います。勉強熱心な人や自分で興味のある分野や講義に関しては自分でシラバス等を調べて積極的に学びに行っていると思うので、大学院では目先の知識ではなく、自分で考え、試行錯誤できる時間や場所だと思う。

■質問7

希望する学生に対し、情報学の広がりや理解とともに、各専攻での研究分野と関わる実務的・実践的内容の修得を主な目的とする「特別コース」を設け、授業や演習・実習中心の教育と総合報告的な修士論文（新たな研究成果を必ずしも含む必要がないという意味）による修了認定を行うという案があります。

このような特別コースがあった場合、あなたはこのコースへの入学を希望したでしょうか。

また、修了者の視点からみて、京都大学においてもこのような実務的・実践的コースは必要でしょうか。導入するとすれば、どのような点に注意するべきでしょうか。

(自由記述)

・必要

- ・大学院の本来の目的が専門分野の研究を深めることにあることに照らすと、ご質問のような特別コースの意義について、よくわからない面があります。このようなコースと通常のコースが併存するのであれば、私は通常のコースを志望したと思います。また、このようなコースを仮に導入する場合には、他大学と歩調を合わせる必要があるように思います。
- ・個人的にマスターコースには、必ず新たなことにチャレンジし、失敗成功に関係なくまとめ上げるプロセスを経験することが重要だと思います。実務的、実践的内容の習得をし、その中から新たな気づきをまとめるようなコースが必要だと思います。
- ・具体的な内容が示されていないので分からない。学士であれば実践的コースも許容されると思うが、修士では研究成果が求められるべきだと思う。
- ・入学時点では希望しなかったと思うが、修士論文のテーマ設定の段階では検討したかもしれないと思う。特別コースの設定が必要かどうかは研究分野によっても度合いが変わると思うので分からない。導入する場合は、報告のマイルストーンの設定に注意するべきと感じた。
- ・希望するかは内容による。研究成果を含まない修了認定を導入した場合、勉学にも研究にも打ち込まず、明らかにレベルの低い修士生が大量に輩出しかねないことを懸念する。
- ・自分自身はあまり興味が無い。専門学校的なものにならないか疑問が残る。「情報学の広がりや理解」という言葉から、昨今の蜻蛉のように狭く深くっていく専門ではなく、広い分野にまたがっていく専門、異分野との接触で新しい学問が開ける可能性がある専門というのならあってもよいと思う。それなら情報学研究科発足時の「学際的」という言葉にも呼応すると思う。
- ・希望しなかったと思います。実践的なコースは必要ないと思います（専門分野の先端研究に取り組むほうが良い）。
- ・京都大学はそのような専門学校的なコースを有するべきではないと考えます。京都大学で先端の研究について取り組むということがやはり重要で、その「特別コース」を出た人間が優秀な判断のできる人材に育つかどうかは疑問です。
- ・今の時代、修士の学生に何か新しいことを期待されても、現行の学問の世界のすばらしさを知る前に、学問の世界にありがちな人間関係のつまらなさを知ることになる。まずは修士と言えど知識を得ることが大事なのではなかろうか。学問の先頭に本当に立てるには30歳まで知識の吸収が必要ではないだろうか。急ぎすぎると、学生は基礎が無いのだから単に流されるだけの存在になる。
- ・「実務的・実践的内容」によっては、特別コースへの入学を希望したかもしれません。「実務的・実践的内容」とは、企業でのインターンで行う内容のようなものでしょうか。そのような内容であれば特別コースは必要ないと思います。もし特別コースを設置するのであれば、企業でのインターンのようなものではなく、実際に各研究分野の内容によって「起業」できるレベルの実践的内容を盛り込んだコースであってほしいと思います。起業できるレベルにするには、その分野の研究的調査、およびその研究分野から発展する市場の調査が必要で、また研究から開発・商品化への過程に横たわる壁（一般的に「魔の川」「死の谷」「ダーウィンの海」と呼ばれる）を在学中から必然的に意識するようになると思います。
- ・自分から希望することは無かったと考える。
- ・答えがあっているかどうかやわかりませんが、知能情報学では脳科学との繋がりが深いいため、脳科学を勉強できるのコースがもっとあればいいかと思いました。

- ・所属していた数理工学専攻では、実際的システムの数理モデル化とその数理工学的構造の理解を理念としていた。そのような観点からは、実務的・実践的内容の習得だけでは、全く理念に反する。一般的に言っても、大学院の修士課程は何らかの学問的内容を含むべきであり、実務的・実践的内容の習得は修士課程に加えてのオプションとしてしか認めるべきではない。私自身も上記のような「特別コース」には入学しなかっただろうし、必要性は感じない。もし、そのような実務的・実践的内容の習得が必要であったとしても、企業やNPO法人でのインターンシップ等を斡旋する制度を強化することで十分ではないかと感じる。
- ・入学を検討した。研究に限らず新たなものを生み出す力は必要だと思うので、新たなものを生み出す力が身に付くように配慮すべき。また、論文等執筆回数が少なくても文書作成スキルについても身につけられるようにして欲しい。
- ・修士論文研究を通し、物事を深く掘り下げ、また、解決していく能力を身に着けていくのが修士教育の根幹であり、それを省くのは理解しづらい。
- ・博士課程に進むための修士課程という観点から見れば、専門性を構築する上で冗長になると思うし、学部レベルで実施すべきだと思う。しかし、就職のための修士課程であれば、社会進出後の即戦力としてそのような試みは必要である。
- ・入学を希望しない。
- ・ここまでがんばるのなら、もう一努力して、普通に修士を修了した方がいいと思う。

■質問 8

本研究科では、情報学の広い学域を一層拡げていくという発足の理念から、研究内容の近い研究分野であっても、異なるいくつかの専攻に分れて配置されています。このような配置に対し、大学院入試で志望する専攻を選ぶ際に不自由を感じましたか。

(自由記述)

- ・あまり覚えていないが、特に感じない様に思う
- ・特に不自由は感じませんでした。
- ・特に感じませんでした。
- ・感じなかった。
- ・情報学研究科の専攻間ではあまり感じなかった。どちらかと言えば工学研究科と競合する研究分野だったので、この点の方が問題だと思った。
- ・特に感じなかった。が、外部からの学生は感じるのではないかと思う。
- ・情報学研究科発足時の入学であり、当時工学研究科の試験を受けて入学時に横滑りで情報学に入ったため、選択の不自由(自由)はなかった。
- ・感じませんでした。
- ・いえ、研究室に入ってから数ヶ月ありましたので、研究内容も把握した上で専攻を受験できました。
- ・志望先を選ぶも何も、教授にスカウトされて、そのまま入学したし、入学した後、視野を広げようとしたら、何かといちゃもんをつけて、他に目をそらさないように有形無形の圧力を受けた。
- ・特に不自由は感じませんでした。
- ・研究内容の近い分野が無かったため、不自由を感じなかった。
- ・確かに実際専攻に入ってから、内容は想像とやや違うと感じました。悪いことでもないと思いますが、混乱する場合があります。
- ・興味をもった研究室は数理工学専攻にしかなかったので特に問題なかった。
- ・感じなかった。
- ・研究室で選ぶので問題はない。
- ・他大学から受験した身として、違いが判らなかつた。しかもそれらで入試の内容が異なるのでわからないながらに割り切って選ぶしかなかった。情報学研究科でまとめて試験して、どの専攻にするかはその後決めたらいいと思う。
- ・特に感じなかった。

■質問9

修了して社会や企業で働いているという視点から、本研究科の「情報学」には、今後はどのような研究分野や専攻があることが望ましいと思いますか。

あるいは、どのような教育に力を入れていくことが重要と思いますか。

(自由記述)

- ・プロジェクトマネジメント、起業論
- ・社会や企業における働きという観点に照らすと、あらゆる経済活動には情報通信システムが密接にかかわっていることから、企業内の情報通信システムに関する研究や教育に力を入れていくことがよいのではないかと、また、あらゆる経済活動は企業組織の中で、人と人との協働により実現されることから、人と人との協働に関する実践的な教育が必要なのではないかと考えられますが、このような研究が学術的に成果をあげられるものなのかどうかはわかりません。
- ・既にそうかもしれませんが、自分で考えた理論を実際のもに適用し評価するプロセスを重視するような教育が重要と思います。理論だけで終わることが多いかもしれませんが、実際のものにあてはめてわかることもあると思います。
- ・直感的かつ高速な情報伝達手段に関する分野が必要だと思う。
- ・情報学は他と異なり人工的な学問だと思うので、他の研究科や専攻間で連携できる専攻があるといいと思う。正直なところ、他の専攻で何の研究をやっているのか全くわからないし、研究興味とも異なっていたように思う。
- ・企業でのシステム開発や受託開発、プロジェクト型の演習など。
- ・例えば、ある分野では枯れた技術でも、異分野のそういう技術同士が合わさると新しいものができるということは多々あると思う。狭い専門領域だけにとどまらず、広い視点で新しい発見ができるような人材が必要で、そのような教育が望まれると考える。
- ・融合・複合分野
- ・お金の縛られない研究も勿論重要な分野があると思います。しかし情報学の通信に限って言えば、標準化はアライアンスでなされ、そのときに大学の研究成果が多く使われるかと言われると疑問です。一個人の意見ですが、そのような分野は企業が製品やサービスを実現する上で困っていることなどを抽出し、その問題解決をして社会に貢献する専攻があってもよいのではと考えます。
- ・世の中の「情報」は統計学的知見がないと見えないことは多いのに、情報学の研究科を出てもそれは身につかないし、何より教官が統計学を知らない。統計学を拡充すべき。
- ・どのような分野・専攻であれ、卒業後に社会や企業で相対していくライバルは世界中に多数存在していて、その人達（特に新興国の若者）は同じ分野で必死に勉強している、ということ強く意識させるような教育をしてほしいと思います。このことは井の中の蛙にならないためにも、自身のモチベーションを高く保つためにも、非常に重要だと思います。
- ・むしろ大学院の研究は純粋な研究であってよいと思う。社会人として働いていると、「純粋に学問を追究する」という経験と機会がいかに貴重であったかを強く感じる。実務的な研究は企業所属でも可能だが、純粋な研究は企業ではなかなかできない。
- ・世界経済の中で情報というもの（情報を商品にする、もしくは情報の力で売買を加速するなど）の重みはどんどん大きくなって、経済での情報の役割と未来の経済モデルを研究する専攻があれば面白いと思います。
- ・基礎研究と応用研究の両方を考慮に入れた研究体制を維持することが肝要であると思う。大学には、今後より実務的・実践的研究の強化を求める意見が寄せられるかもしれないが、そのような方向性は学問追求の場としての大学にはふさわしくない。そのような実際的な方向性への移行は、結果として日本社会における学問的に深い見識に基づく長期的なヴィジョンをもった人材を減らすことにつながる。これからの大学は、社会とのつながりを強化していきながらも、純粋に学問的な深さの追求を継続していかなければならない。そのような観点から、基礎研究・応用研究の双方を視野に入れた研究分野が必要であるし、そのような卒業生を輩出できるような教育体制を敷くべきである。具体的には、現在もある数学や物理の基礎も研究テーマに含む研究分野と応用的な事柄を対象とする研究分野とのバランスを維持し、かつ相互の交流を促進する機会を設けていく必要があると思う。

- ・経済学・経営学と関連する分野。
- ・教育としては下記を徹底して強化して頂きたい ・国際化に対応しうる徹底した英語教育・文化的理解も含めたコミュニケーション能力 ・プレゼンテーション能力
- ・産官学連携の研究を増やす
- ・在学時代にえた知識は何年かすると絶対に古くなるので、目先の知識ではなく、しっかり論文を読む力、自分で考えて行動する力、発言する力をきちんと身につけることが大事だと思う。

■質問 10

学生時代(学部, 大学院)に授業科目や研究指導等で得た知識や受けた教育経験は, 就職後, 直接的, 間接的に役にたっていますか。

特に, どの科目のどの内容, 修士論文の指導におけるどのような経験が役にたっているでしょうか。

(自由記述)

- ・プログラミング演習、データベース理論
- ・学部(情報学科)において、授業科目で得た知識や経験は、就職後、役に立っています。特に、数学や電気電子工学に関する科目(全学共通科目を含む)、専門科目におけるソフトウェア工学やソフトウェア・ハードウェアに関する実習で得た知識は、得がたいものでした。一方、大学院で得た知識や経験については、就職後に役に立っているという実感がないのが課題です。
- ・研究を進めていくプロセスについては、現在でも役立っています。
- ・役に立っている。研究室内で得た無線通信に関する知識等。
- ・実験の経験は役に立っていると思う。レポートの執筆や修士論文執筆の際に文献を調べた経験から「この内容ならこの本を見ればたぶん書いてある」と思える点は強みだと思う。授業は、教えられたそのものももちろんだが、どういう視点で物事を見るのか、といったある意味で科学に対する考え方のほうが役に立っているのではないか。この点は貴重な経験だったと思うし、本学の特徴だったように思う。
- ・役に立っている。データベース、情報システム論、アルゴリズム論など、システム開発のための基礎的な理論ほど、現場でも応用できる。
- ・学生時代の延長で今の研究職に就いている。当時の経験は得難いもので、非常に役立っている。
- ・役に立っています。とくに、研究の進め方や論文の書き方など。
- ・間接的に役に立っています。とくに通信の歴史や理論が重要です。
- ・だんだん間接的に役立ってきている。人間とはこういうものだ、社会とはこういうものだ、というよい例を知ることが出来た。良い意味でも悪い意味でも。
- ・就職した企業の研究所での研究・開発内容が情報学の知識を必須とする部署であるので、直接的に役立っています。具体的には、ソートや探索のアルゴリズム、UML等を用いたシステム設計の知識等が役立っています。もちろん、プログラミングの能力は必須なので、プログラミング演習の経験も役に立っています。
- ・直接的にも間接的にもあまり役に立ってはいない。強いて言えば、「物事を数式的に捉え、論理的に思考するという習慣が身についたこと」ではないか。
- ・残念ながら、生物からコンピュータサンス業界に入りましたから、直接使える知識は今のところありません、ただし、最新の論文を注目するなど、情報を調べ方に関するところ役に立った経験は多い。
- ・役に立っている。特に、修士論文の指導での自主性の尊重は、自立的研究を行う力をつけるのに役立った。
- ・役に立っている。C言語プログラミング、論文の綺麗さ・見やすさの指導、英語論文執筆の経験、留学生との会話
- ・修士論文の指導を通し、物事を掘り下げて考え、課題を発見し、解決していくための基礎を学び、それは現在でも直接的に役に立っている。
- ・課題解決のためのプロセス決定方法や論文など論理的な文章を書く能力は非常に役に立っている。
- ・例え、私が間ちがっていたとしても、自分で納得いくまで試行錯誤させてくれた点。

■質問 11

京都大学大学院情報学研究科出身者と、他大学の情報系大学院出身者、工学系・理学系大学院出身者などとの違いはあるでしょうか。あるとすれば、それはどのような点でしょうか。

(自由記述)

- ・「情報系大学院」と言うブランドイメージは、キャリアにおいて極めて有利に働くと思う。
- ・残念ながら、特段の違いは見出せていません。
- ・あまりわかりません。
- ・やや理論志向が強いように思われる。
- ・あまり違いを感じたことはない。
- ・よくわからない。
- ・わかりません。
- ・まだ特徴としてはつかめていませんが、周りの京都大学の先輩には優秀な方が多いです。
- ・むしろ、学内格差を、就職してから知ることになる。京大にいても、その間に京大の出身の人の広がりを知ることは無理。むしろ就職して多様な人に会うことになる。ただ、東京にいるとあまり分からない。せいぜい学部の子の友達の仕事の多様さをぼんやり知るくらい。
- ・会社の同期の間だけでの判断ですが、能力の違いはそれほど無いと思います。
- ・比較サンプル数は少ないが、あまり違いは無いという印象。
- ・Honestly speaking I don't know many people from other university so I cannot answer.
- ・工学系大学院出身者に比べると、実際的な問題についての理解は浅いかもしれない。また、理学系大学院出身者に比べると、基礎的な部分の理解の弱さもあるかもしれない。しかし、本学情報学研究科出身者のような基礎と応用の両方が視野に入った人材は、これら工学系・理学系大学院出身者にはあまりおらず、そこが大きな特長である。他大学の情報系大学院では、基礎があまり考慮に入られていないか、基礎と応用が分離されていることが多いように感じる。そのような意味でも、上記のような特長は京大の情報学の重要な特性であると考えます。
- ・他大学では学会発表や論文執筆をほとんどしていない人がいる（教員が執筆・発表している）。
- ・京都大学の出身者と他大出身者の違いはあるかと思うが、情報学研究科特有の差は感じない。そもそも「情報学」という言葉自体が定着しておらず、集団として見えにくい。情報学という言葉自体のブランディングについても検討いただきたい。
- ・修士の研究の内容の濃密さに違いはあるが、それが社会に出てから大きな差を生み出しているとは感じない。
- ・比較的、人あたりがいいように思う。

■質問 12

情報学研究科の同窓会活動はまだ研究科全体の卒業生が参加する形になっていませんが、研究科との関係など、将来的にはどのような同窓会としていけばよいでしょうか。

(自由記述)

- ・超交流会に教員（特に教授陣）が、もっと積極的に参加して欲しい。このアンケートは、(情報学らしく)、PDF フォームもしくは Web フォームで実施して欲しい。
- ・同窓会の活動そのものを知らない人が多数ではないだろうか。他の同窓会と比べても活動はかなり高いと思う。ゴルフコンペの報告や長文の寄稿ばかりの会誌を送ってくる他の同窓会よりもはるかにましだと思う。研究科との関係はよくわからないが、将来像は研究科として同窓会に何を期待するかにかかっているのではないか。
- ・研究科全体の卒業生が参加していないことを知らなかった。どういう事情・経緯かわからない・・・。
- ・研究科の現状を卒業生に伝えたり、卒業生同士のつながりを深める機会を提供することが同窓会の役割だと思います。
- ・申し訳ございませんが、ノーアイデアです。
- ・同窓生や在学生とのコミュニティの中で起業の輪が広がるような同窓会になれば有意義かと思います。
- ・東京での参加機会を増やす。
- ・できれば自分の先生の御研究、ご活躍、ご転職、ご定年などの情報を同窓会から知りたい。
- ・研究科全体の卒業生が参加できる同窓会活動もあればよいが、専攻ごとやより小さなグループで集まるような小規模な活動も支援してもらえると良いように感じる。
- ・在学中も含めて、研究科全体で交流が図れるような同窓会になって欲しい。
- ・同窓会活動は研究科もかかわって活発化させるべき。方法としては SNS の利用なども考えらえる。
- ・同窓会といっても卒業生が集まるだけなので、研究室の教官とか授業の講師とかいろいろな人が集まるような機会を設けるか、卒業生で著名な活躍をしている人を集めて講演会を開くとかがよいと思う。
- ・まだ10年と比較的歴史が浅いですが、とりあえず、同窓会が卒業生の進路を確実におさえておくことが大事だと思います

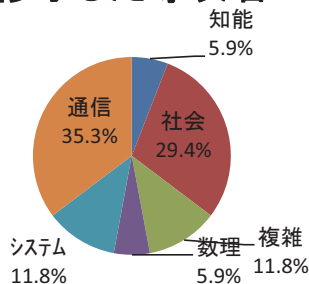
以上で、情報学研究科全体についての質問は終了しました。

続いて、修了した専攻ごとのアンケート項目にお答え下さい。

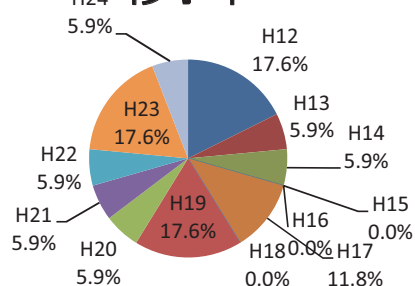
まずは、以下の□にチェック（修了年月は記入）をお願い致します。

修了した専攻名	修了年月	現在の勤務先・所属先の業種
<input type="checkbox"/> 知能情報学専攻 <input type="checkbox"/> 社会情報学専攻 <input type="checkbox"/> 複雑系科学専攻 <input type="checkbox"/> 数理工学専攻 <input type="checkbox"/> システム科学専攻 <input type="checkbox"/> 通信情報システム専攻	平成 年 月修了	<input type="checkbox"/> 自動車 <input type="checkbox"/> 計算機 <input type="checkbox"/> 電子・精密機器 <input type="checkbox"/> 運輸 <input type="checkbox"/> 通信 <input type="checkbox"/> 家電 <input type="checkbox"/> 重工 <input type="checkbox"/> 鉄鋼・電工 <input type="checkbox"/> 電力 <input type="checkbox"/> 金融 <input type="checkbox"/> 損保 <input type="checkbox"/> 商社 <input type="checkbox"/> マスコミ <input type="checkbox"/> 広告代理店 <input type="checkbox"/> 情報サービス <input type="checkbox"/> シンクタンク <input type="checkbox"/> バイオ <input type="checkbox"/> 化学 <input type="checkbox"/> 教育関係 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 大学（在学中を含む） <input type="checkbox"/> その他の研究機関 <input type="checkbox"/> その他の業種 <input type="checkbox"/> 無職

修了した専攻名



修了年



○現在の勤務先・所属先の業種	
<input type="checkbox"/> 自動車	1
<input type="checkbox"/> 計算機	2
<input type="checkbox"/> 電子・精密機器	1
<input type="checkbox"/> 運輸	0
<input type="checkbox"/> 通信	1
<input type="checkbox"/> 家電	3
<input type="checkbox"/> 重工	0
<input type="checkbox"/> 鉄鋼・電工	0
<input type="checkbox"/> 電力	0
<input type="checkbox"/> 金融	1
<input type="checkbox"/> 損保	0
<input type="checkbox"/> 商社	0
<input type="checkbox"/> マスコミ	0
<input type="checkbox"/> 広告代理店	0
<input type="checkbox"/> 情報サービス	2
<input type="checkbox"/> シンクタンク	0
<input type="checkbox"/> バイオ	0
<input type="checkbox"/> 化学	0
<input type="checkbox"/> 教育関係	1
<input type="checkbox"/> 公務員	0
<input type="checkbox"/> 大学（在学中を含む）	4
<input type="checkbox"/> その他の研究機関	1
<input type="checkbox"/> その他の業種	0
<input type="checkbox"/> 無職	0
合 計	17

■知能情報学専攻

知能情報学専攻のカリキュラムでの特色である知能情報学特殊研究（分野演習・学外インターンなど）は、あなたにとって有用なものでしたか。

（自由記述）

・就職する際に業界が変わりましたから、直接使える知識はありません。ただし、大学で身についた研究者らしい論理的な考え方と正しい情報の調べ方はいつも役立ちます。

■社会情報学専攻

【修士課程講義科目について】

社会情報学専攻では、専攻基礎科目として情報社会論、情報システム設計論Ⅰ、Ⅱ・同演習、情報システム分析論・同演習を修士1回生前期に必須科目として課しておりますが、これらの講義・演習は、その後の他の講義の履修や修士課程での研究あるいは就職後において役にたったでしょうか。

「大変役にたった＝5、ある程度役にたった＝4、どちらともいえない＝3、あまり役にたたなかった＝2、まったく役にたたなかった＝1」の5段階のなかから、回答してください。

情報社会論	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
情報システム設計論Ⅰ	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
情報システム設計論Ⅰ演習	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
情報システム設計論Ⅱ	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
情報システム設計論Ⅱ演習	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
情報システム分析論	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
情報システム分析論演習	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1

専攻基礎科目について感想・意見等をお書きください

(自由記述)

- ・卒業後時間が経過した事もあり、ほとんど覚えていません、スミマセン。
- ・レベルが学部または焼き直しであることが散見される。
- ・設計論や分析論は社会に出てから必要に迫られて個人的に勉強する機会はあるそうだが、社会論は学生の時でない、ゆっくりと考えたり、取り組んだり出来る分野だと思うので、社会論はけっこう良かったと思う。

【複数アドバイザー制について】

社会情報学専攻では、指導教員以外に2名のアドバイザーを加えた複数アドバイザー制をとっております。また、半期ごとに指導教員およびアドバイザーへの研究経過報告を課しておりますがこれらのシステムは、修士課程での研究等に役にたったでしょうか。

「大変役にたった＝5、ある程度役にたった＝4、どちらともいえない＝3、あまり役にたたなかった＝2、まったく役にたたなかった＝1」の5段階のなかから、回答してください。

複数アドバイザー制	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
研究経過報告	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1

【修士課程での研究指導体制について】

社会情報学専攻では、前述の専攻基礎科目、複数アドバイザー制などに加えて、専攻独自の履修計画書の提出、修士1回生での特別講義の受講、修士1回生後期での専攻全体での中間発表会、修士2回生秋の修士論文中間試問会など、研究指導にかかわる種々の取り組みを行っています。

これらの取り組みについて、感想・意見等をお書きください

(自由記述)

- ・プレゼンテーション力を向上させる主旨を徹底させることが重要だと思います。
- ・有意義な取り組みであったと感じています。
- ・年2回、何らかの報告会があるのは、研究やそれに関連する作業をすすめていく上で、目安になるので、便利だと思った。

【社会人博士課程への入学について】

社会情報学専攻では、博士課程の入学者選抜試験に社会人特別選抜を用意しておりますが、今後博士課程に進学する希望はございますか。

「是非とも進学したい = 5, 事情が許せば進学したい = 4, どちらともいえない = 3, 当面は進学を考えていない = 2, 全く進学は考えていない = 1」の5段階のなかから、回答してください。

社会人博士課程への入学 5 4 3 2 1

【在学生のインターン受け入れの可能性について】

現在勤務されている部署あるいは組織全体で、社会情報学専攻修士課程の学生をインターンとして受け入れる可能性はございますか。

「既に制度としてある = 4, 将来受け入れる可能性はある = 3, わからない = 2, 受け入れる可能性は全くない = 1」の4段階のなかから、回答してください。

在学生のインターン受け入れの可能性 4 3 2 1

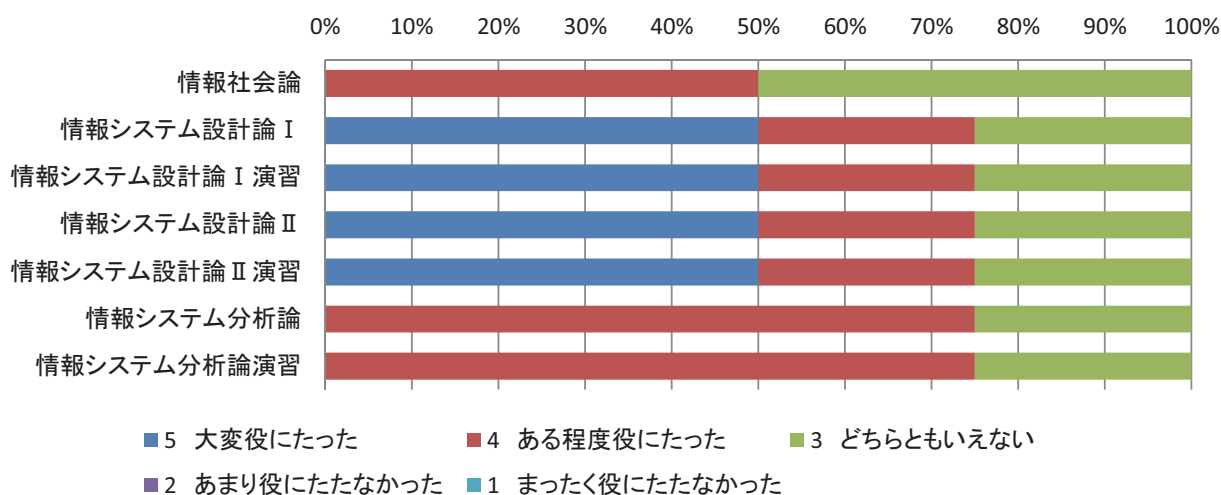
【その他】

社会情報学専攻在学時の講義・演習、研究指導体制等について感想・意見がございましたら以下にお書きください。

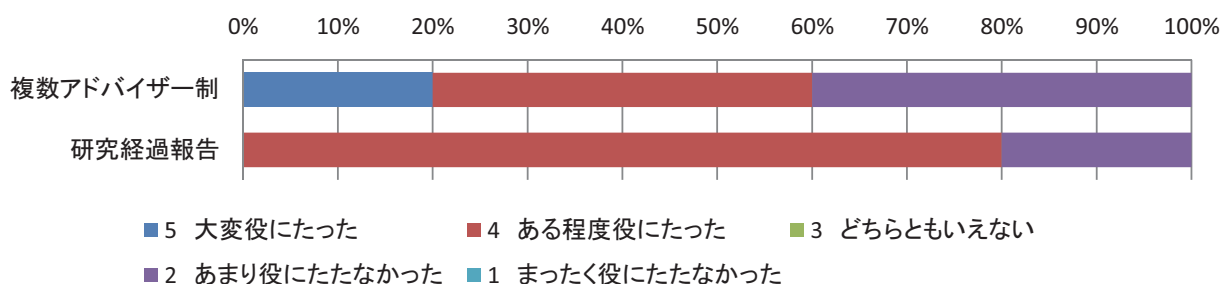
(自由記述)

- ・卒業生とのコミュニケーション機会を増やすべきだと思います。在校生にとっても、卒業生にとっても、有意義な時間になると思います。
- ・質問 10 の回答に記載したとおり、学部（情報学科）において、授業科目で得た知識や経験は、就職後、役に立っている反面、大学院で得た知識や経験について、就職後に役に立っているという実感がないのが課題です。
- ・複数アドバイザー制度は大変興味深い取り組みだが、それをひきうける先生方の温度差は感じるので、少し見直した方がいいのかな？とも思う。

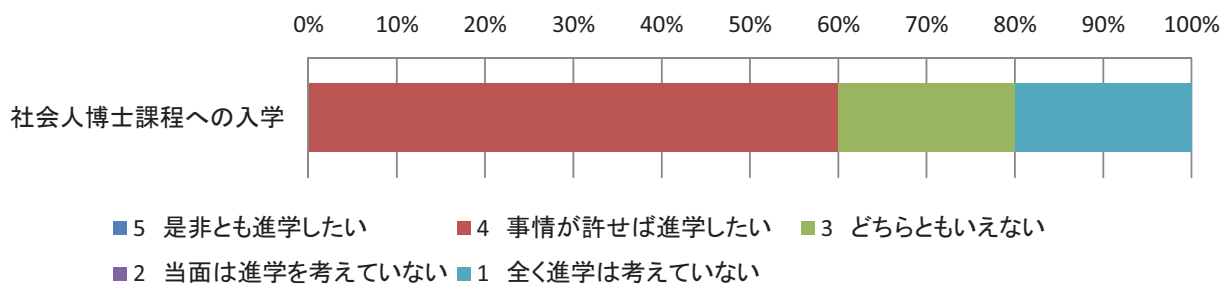
修士課程講義課目



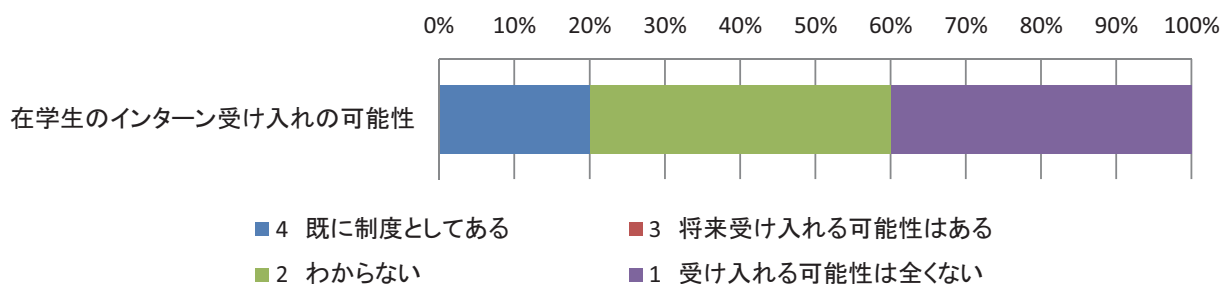
複数アドバイザー制について



社会人博士課程への入学について



在学生のインターン受け入れの可能性について



■複雑系科学専攻

複雑系科学専攻では、「複雑系」と呼ばれる大規模あるいは非線形の複雑な系の挙動の原理と構造の解明、情報の解析と抽出、システム設計等を研究対象とし、その研究・教育では、「現象の理解」という理学的視点と「もの作り」という工学的視点の融合を図ろうとしている。さらに教育の特徴として、少人数教育に重点をおいたきめ細かな指導を目指している。

(1) 修士課程入学試験は、基礎学力を重視しているが、これについてどのようにお考えですか？

(自由記述)

- ・基礎学力の高い学生に、人間力の高い人が指導に当たらないと社会の大きな損失ではなかろうか。いくら基礎学力が高くても、教官人の政治の悪い面を見せられたら、学生はどう振る舞ったらいいのだろうか。
- ・個人的には満足している。基礎学力がきちんと評価されるのは、自分としてはありがたい。

(2) 専攻の講義・セミナーなどのカリキュラム構成、および修了要件などは、専攻の目的に沿ったものになっているでしょうか？

(自由記述)

- ・全く沿っていなかったし、懇親会で教授の発言を聞いていると、そういう目的を持つこと自体を馬鹿にしていた。まず理学の先生が工学について下らないものと決めつけていた。
- ・自分の方では何とも評価しがたい。

(3) 専攻の教育方針である少人数教育は有益であったでしょうか？

(自由記述)

- ・教授のエゴを学生に押しつける場となってしまった。人間という者を分かっていない人間が、学生を指導できるのだろうか。
- ・有益と感じる。

(4) 理学と工学を融合した広い視野を持つ人材の育成を目指す専攻の教育方針についてご意見をお聞かせください。

(自由記述)

- ・教授の教育方針は別として、専攻の教育方針は素晴らしいと思う。まがりなりにも、広い視野を持てたし、それは教官が期待していなかったものかも知れないが、社会人として働くには大変貴重でなかなか他の場所で得られるものではなかったと、考えられる。
- ・自分は専ら理学的な分野を専攻していたため、工学との融合について自分はあまり意識したことは無い。

■数理工学専攻

(1) 数理モデルの構築の仕方について理解が得られたでしょうか。

(自由記述)

・ある程度得られた。

(2) 数学的センスと物理学的想像力という基礎力が身に付いたでしょうか。

(自由記述)

・ある程度身についた。

(3) 数理工学専攻でも IT スキルについての実験・実習科目もあった方がよかったですでしょうか。

(自由記述)

・京大工学部情報学科以外の出身者でプログラミングに関する知識があまりない者にとっては、計算機プログラミングなどの基礎に関する科目があった方が良かったかもしれない。ただ、専門的な事項の学習や研究のための時間配分を考えると、実際は科目の有無はあまり助けにならないかもしれない。

(4) 平成 15 年から開設している企業の研究者による集中講義科目は有用であったでしょうか。

(自由記述)

・短期間のためすべての事項を習得することは難しかったが、数理工学の実際的应用を知る意味があった。

■システム科学専攻

(1) システム科学専攻のアドミッション・ポリシーには「システムを開発・運営していくためには、人間あるいは環境との相互作用に着目し、それらを総合的に捉え、分析・構成する新たなシステム研究の方法論が必要であり、システム科学専攻では、情報学の多様な専門分野を強固に繋ぐ横糸の役割を果たすような総合的なシステム論の構築に取り組むとともに、実用性・実証性を重視した新たなシステム研究の方法論の構築を目指しています。」と記述されておりますが、このポリシーの社会での有用性や、専攻の教育での達成度などにつきましてご意見をお願いします。

(自由記述)

・横断的な学問によって、融合複合分野が発展し、あたらしい成果が生まれる可能性がありますので、システム科学専攻のポリシーはよいものであると思います。ただ、抽象的な内容のように感じられますので、システム研究の有用性を知る（理解する）勉強・教育が必要だと思います。

(2) 2010 年 8 月入試以降、修士課程入学試験において専門選択科目数を 4 科目から 2 科目に減じました。

これに関して自由意見をおねがいします。

(自由記述：受験しやすくなった。特に以前と変わらない等)

・単に減少しているだけだと、レベルの低下を招く感じもします。院試前は、それなりに専門科目を勉強する機会になっていました。

・受験しやすくなったとおもいます。(もし選択肢が減っていたら、受験しにくくなったかもしれません)

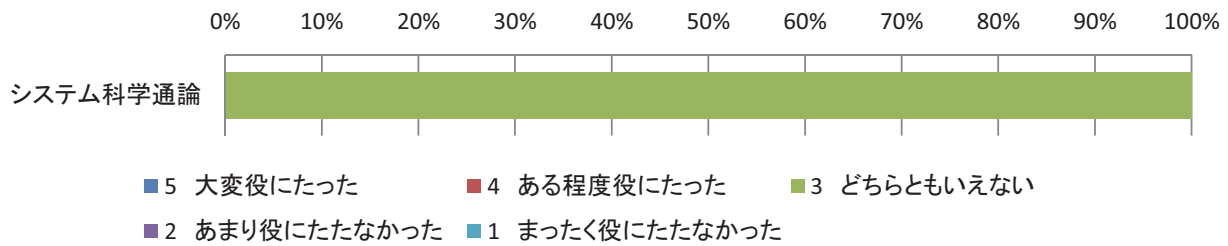
(3) システム科学通論について 5 段階で評価してください。

「大変役に立った = 5, ある程度役に立った = 4, どちらともいえない = 3, あまり役に立たなかった = 2, まったく役に立たなかった = 1」の 5 段階のなかから回答してください。

システム科学通論

5 4 3 2 1

システム科学通論について



■通信情報システム専攻

通信情報システム専攻のアドミッション・ポリシーは「ハードウェアとソフトウェアを統合することのできる、また、目的に合わせて理論と応用を結合することのできる研究者・技術者の育成・輩出を目指している」と謳っています。カリキュラムが、このようなポリシーを反映したものとなっているかどうかに関して意見を書いてください。

(自由記述)

- ・そのようなポリシーを初めて聞いた。あまり反映はされていないのではないかと。他の専攻と比べてかなり溝があるように感じた。
- ・このアドミッション・ポリシーを知らなかった。今のカリキュラムがこれに沿っているかどうかはわからないが、今の自分の研究にもあてはまる良いポリシーだと思ふ。
- ・確かにソフトウェアについてもハードウェアについても、分け隔てなく授業いただいておりますし、研究室でも意識したことはありませんでした。企業で働くことになってから、ソフトウェアグループとハードウェアグループは分離されております。私は商品企画という立場にありますが、どちらの知識も（浅くではありますが）役に立っており、大変感謝しております。
- ・反映されている。現在組み込みソフト開発をしており、役に立っていると思う。
- ・ハードウェアとソフトウェア統合という点は大いに共感できるが、現状では個別の研究室教育による部分が大きいように思う。
- ・私の研究でもレーダーで得られた電圧値をソフトウェア処理でレーダー反射因子やドップラー速度に変換して大気現象を解析するといったことをやったので、ポリシーは満たされていると思う。

以上で、全ての質問は終了しました。ご回答いただき、どうもありがとうございました。

A.6 企業人事担当者アンケート

目次

まえがき

アンケート調査の依頼文とアンケート依頼先企業

- 質問 1 情報学研究科修士課程修了者の学力・能力について
(基本的学力・その他の能力)
(計算機・情報関連の能力)
- 質問 2 情報学研究科の教育と人材育成における各要素の重要度
- 質問 3 情報学研究科における IT スキル教育の必要性について (自由記述)
- 質問 4 企業へのインターンシップについて (自由記述)
- 質問 5 情報学研究科出身者の特徴について (自由記述)
- 質問 6 最近の新入社員の問題点について (自由記述)
- 質問 7 情報学研究科における就職サポートについて (自由記述)

まえがき

情報学研究科は、平成10年に設立されてから平成24年3月までの14年間に、合計2300名の修士課程修了生を社会や博士後期課程等に送り出してきた。情報学研究科の教育研究上の目的としては、平成20年に以下の文章を教授会において決定し、研究科ホームページ等で公表している。

情報学研究科は、人間と社会とのインタフェース、数理的モデリング、および情報システムを3本柱として創設され、情報学の新たな学問領域を開拓し、総合的な視野から先駆的・独創的な学術研究を推進することで、情報学の国際的研究拠点としての役割を果たすことを目指している。また、高度な研究能力と豊かな学識を涵養することで、情報学を発展させる研究者、および、質の高い専門的職業人を養成し、知識社会のさまざまな課題を解決するリーダーとなる視野の広い優れた人材を育成することを教育の目的としている。さらに、産官学連携・地域連携や社会への情報発信を通して、健全で調和の取れた知識社会の発展に寄与し、京都大学の基本理念である「地球社会の調和ある共存」に貢献する事が情報学研究科の大きな目標である。

ここで謳われている教育ならびに人材育成についての考え方が実際に企業からどのように受け止められているか、また、この考え方に沿った教育や人材育成が実際に行われているといえるか、教育のさらなる改善を図っていくにはどうすればよいか、といった事項を、研究科としては不断に確認し、必要に応じて見直しを進めていく必要がある。本調査は、企業の人事担当者を対象として実施したアンケート調査であり、実際に情報学研究科の人材育成の成果物たる修了生を受け入れる立場からの、研究科の教育に関する一種の外部評価としての意味合いを有している。依頼先は、平成18年に実施した前回のアンケート調査にご協力いただいております、さらには毎年継続的に修士課程修了生を採用していただいている企業である。設問内容は基本的には前回の調査のものを踏襲した。

回答を寄せていただいた企業の担当者の方々に感謝の意を表するとともに、本調査にもとづいて、情報学研究科における教育と人材育成についてより一層の改善に努めていきたい。

アンケート調査依頼先企業（順不同）

Acroquest Technology 株式会社

株式会社 NTT データ

株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ

沖電気工業株式会社

キヤノン株式会社

株式会社 サミットシステムサービス

セコム株式会社

大日本印刷株式会社

株式会社 知能情報システム

株式会社 東芝

東芝ソリューション株式会社

株式会社 トランス・ニュー・テクノロジー

西日本電信電話株式会社（NTT 西日本）

日本アイ・ビー・エム株式会社

日本電信電話株式会社 < NTT 研究所（R&D） >

株式会社 野村総合研究所

東日本電信電話株式会社（NTT 東日本）

株式会社 日立製作所

三菱化学株式会社

ルネサスエレクトロニクス 株式会社

株式会社 ビービット

富士ゼロックス株式会社

キヤノン IT ソリューションズ株式会社

ローム株式会社

KDDI 株式会社

コマツ（株式会社 小松製作所）

TIS 株式会社

グローリー株式会社

株式会社 ジェイテクト

日本マイクロソフト株式会社（30社）



京都大学大学院情報学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-5370 FAX：075-753-5379
総務掛
soumu@i.kyoto-u.ac.jp

平成24年8月3日

採用担当者各位

お忙しいところを大変恐縮でございますが、京都大学大学院情報学研究科（修士課程）における教育と人材育成に関して、以下の質問1-7にご回答方よろしくお願い致します。

本アンケートの主旨などは別紙（依頼状）をご参照願います。創立以来14年を経た情報学研究科における今後の教育改善や教育評価の目的以外に本アンケート結果を利用することはありません。回答者のお名前や企業名の記入はご自由です。

なお、質問1.については、特定の個人についてではなく、これまで見てこられた情報学研究科修了生の全般的なイメージに基づいて、回答者個人のご意見をご回答いただければ結構です。

ご回答の送付方法としては、この電子メールに添付して返送いただく他、FAXや郵送でも構いません。整理の都合上、ご回答は8月10日（金）までにご返送いただけますようお願い申し上げます。どうかよろしくご協力の程、お願い申し上げます。

京都大学大学院情報学研究科
研究科長 佐藤 亨

■質問 1

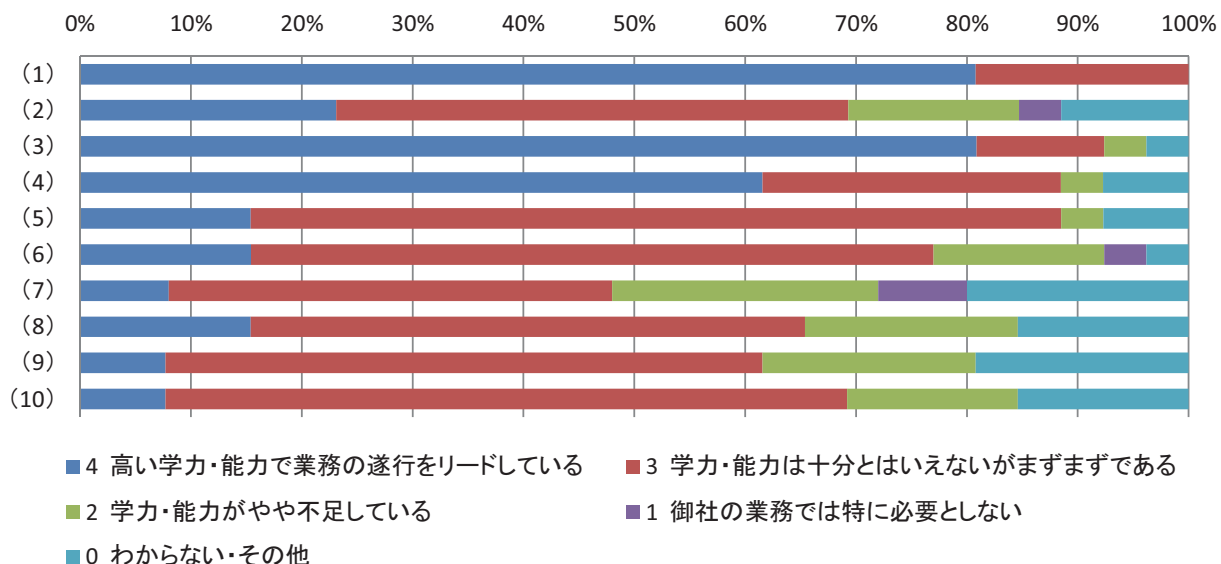
京都大学大学院情報学研究科の修士課程修了者の学力・能力等に関してお尋ねします。
各項目について、以下の 4 から 0 のいずれかを選んで □ をチェック願います。

- 4 高い学力・能力で業務の遂行をリードしている
- 3 学力・能力は十分とはいえないがまずまずである
- 2 学力・能力がやや不足している
- 1 御社の業務では特に必要としない
- 0 わからない・その他

●基本的学力・その他の能力に関する事項：

- (1) 出身の専攻分野における専門的知識 4 3 2 1 0
- (2) 専門外の分野についての幅広い関心と学識 4 3 2 1 0
- (3) 論理的思考力や基礎的な数学の力 4 3 2 1 0
- (4) 与えられた問題を数理的にモデル化する能力やデータ分析する能力 4 3 2 1 0
- (5) 文章を作成する能力など、国語力 4 3 2 1 0
- (6) 日本語によるプレゼンテーション・コミュニケーション能力やディベート力 4 3 2 1 0
- (7) 英語によるプレゼンテーション・コミュニケーション能力 4 3 2 1 0
- (8) 困難に直面しても負けずに立ち向かう精神力・精神的頑健性 4 3 2 1 0
- (9) リーダーシップ（周囲の人々を理解し、ポジティブな人間関係を築き、協調してプロジェクトを遂行する能力） 4 3 2 1 0
- (10) デザイン力（新たなコンセプトを創造する能力） 4 3 2 1 0

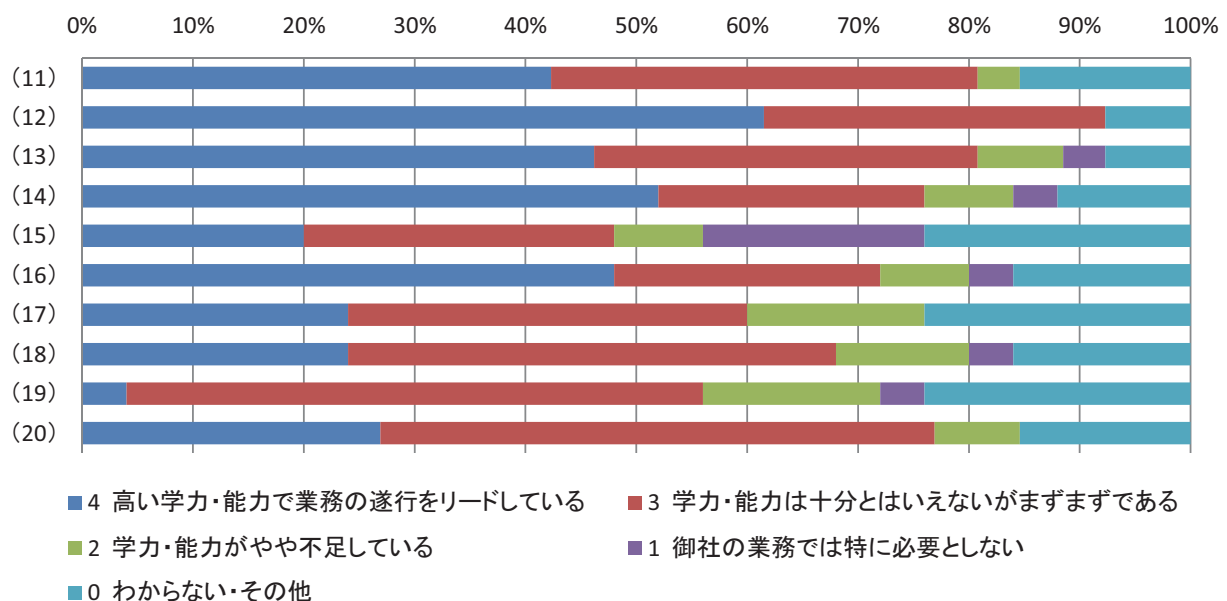
基本的学力・その他の能力に関する事項



●計算機・情報関連に関する事項：

- (11) 情報倫理 4 3 2 1 0
- (12) 情報および情報機器を主体的に利活用する能力 4 3 2 1 0
- (13) プログラミング能力（複数のプログラミング言語が使える、数千行のプログラムが書ける能力）
4 3 2 1 0
- (14) ソフトウェア開発能力 4 3 2 1 0
- (15) ハードウェア開発能力 4 3 2 1 0
- (16) ネットワーク、データベース、OSなどの要素技術を理解し、利活用する能力
4 3 2 1 0
- (17) 情報知的財産に関する正しい理解 4 3 2 1 0
- (18) 情報セキュリティに関する知識・スキル 4 3 2 1 0
- (19) プロジェクトマネジメント能力（専門的なITスキルを有し、各種プロジェクトをマネジメントする力）
4 3 2 1 0
- (20) 新たなる情報技術・情報システムの設計に関する経験あるいは潜在能力 4 3 2 1 0

計算機・情報関連に関する事項



■質問2

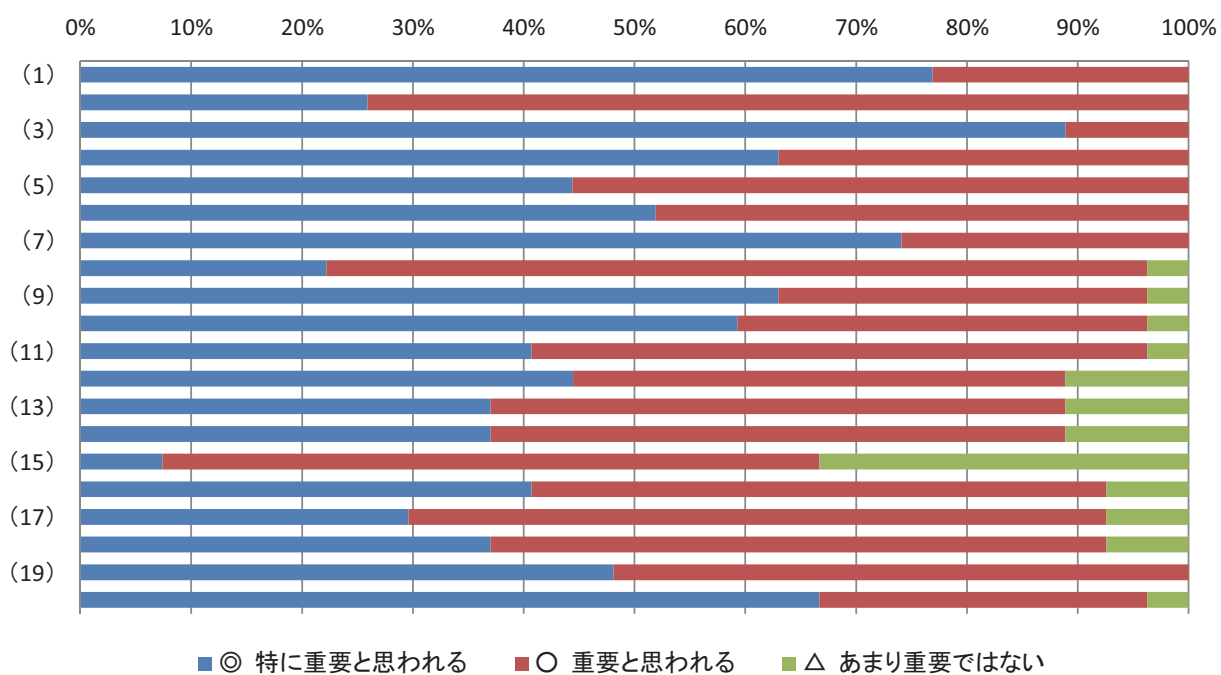
京都大学大学院情報学研究科における教育や人材育成において、次の(1)から(20)の各項目にはどれくらいの重要度があるとお考えでしょうか。□をチェック願います。

- ◎ 特に重要と思われる
○ 重要と思われる
△ あまり重要ではない

- (1) 専攻する分野の専門知識の獲得 ◎ ○ △
- (2) 専門外の分野についての幅広い関心と学識 ◎ ○ △
- (3) 論理的思考力あるいは基礎的な数学の力 ◎ ○ △
- (4) データ分析とモデル化能力 ◎ ○ △
- (5) 実際にモノに触れ、実作業をする経験 ◎ ○ △
- (6) 日本語の文章を書く能力 ◎ ○ △
- (7) 日本語によるコミュニケーション能力やディベート力 ◎ ○ △
- (8) 英語の文章を書き、英語でコミュニケーションする能力 ◎ ○ △

(9) 精神力・精神的頑健性	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(10) リーダーシップ	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(11) デザイン力	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(12) 情報と情報機器の主体的利活用	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(13) プログラミング技術	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(14) ソフトウェア開発力	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(15) ハードウェア開発力	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(16) ネットワーク，データベース，OSなどの理解と利活用	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(17) 情報倫理や情報知的財産についての理解	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(18) 情報セキュリティについての知識・スキル	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(19) プロジェクトマネジメント能力	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △
(20) 新しい情報技術・情報システムの設計能力	<input type="checkbox"/> ◎	<input type="checkbox"/> ○	<input type="checkbox"/> △

質問2



■質問3

京都大学大学院情報学研究科では、必修科目化などによって基礎的な IT スキルなどに関する教育を今以上に行うなど、修士課程の教育課程化を進めるべきでしょうか。

(自由記述)

- ・これまで同様、研究等の専門課程の深耕を進めて頂くべきと考えております。(企業 A)
- ・プログラミング技術等の IT スキルは必須であると思います(企業 B)
- ・進めるべきだと思います。(企業 C)
- ・プログラミング能力が、人によって差がありますので、プログラミング実習を増やすなどの対策を取っていただきたいです。例:法政大学情報科学部は、全員に、Java を、相当量書くことがギムづけられている。(企業 D)
- ・基礎的な IT スキルは、社会でキャリアを積んでいく際に大きな武器になりますが、より実践的な経験を詰める機会を増やすことも必要かと思えます。(企業 E)
- ・「基礎的な IT スキル」が何を指しているか、というところが個人的なイメージなのでコメントしづらいのですが、修士課程の学生が基礎的な IT スキルがついていないとすると問題であり、その場合には教育課程化をせざるを得ないと思えますが、それは本質ではないと思えます。学士過程で学習すべき、または大学院入試でチェックすべきことではないでしょうか。他の大学の状況はともかく、京都大学の修士であれば、スキルは既に持っている上で、先端的な研究と IT スキル習得の両立は可能と思えます。(企業 F)
- ・その必要はないと考えます。貴研究科のカリキュラムを拝見しましたが、すでに情報学初学者向けの基礎教育も行なっているから、これ以上の基礎教育よりも、貴研究科ならではのより高度でアカデミックな教育を各分野で進めていただくほうが社会全体への効果が大きいのではないかと考えます。その過程において各学生が自分に足りない点を認識した時に、それをフォローできる体制さえあれば十分ではないかと考えます。(企業 G)
- ・専門分野と並行して、コミュニケーション能力やチームワークといった部分についても、大学の教育課程の中で修得していただけると会社に入ってからスムーズに業務には入れるのではないのでしょうか？(企業 H)
- ・現在の水準以上に必要とは思いません。(企業 I)
- ・そのような内容は、修士以前に、学部において、しっかりと行ってほしい。(企業 J)
- ・修士課程を修了した学生には、基礎的な IT スキルを修得していることを前提として期待しています。それに加えて、専門知識および調査・研究の方法論を修得していることが求められると考えます。コミュニケーション能力やプロジェクトマネジメント等の実践的スキルについても、正規のプログラムへ真剣に参加することで、専門知識とともに自然に身に付くプログラムの設計を期待します。(企業 K)
- ・進めなくても良いと思えます。十分な IT スキルを持ってると感じるため、一律的な学科教育でなく、研究をしっかりと行う、もしくは、課外活動の幅を広げる、といったことが貴研究科の学生には重要と感じます。(企業 L)
- ・スキルにとどまらず、社会での応用についての教育を行うべき。(企業 M) 大学は学習ではなく、学問を行う場だと考えるので、特に大学院で過度の基礎教育は不要だと思います。ボトムアップというよりは、学生が自主的に伸びていける様な環境が重要だと思います。(企業 N)
- ・進めるべきだと思います。情報系学生のプログラミングスキルの低さには愕然とすることがあります。実作業の基礎的なことについて、きちんとした訓練をしなければ、その上で成り立つ研究活動も十分に行えないのではないのでしょうか。特にプログラミングスキルは大学受験のような、ドリル式の訓練が効果的だと思います。(企業 O)
- ・研究を通して、自ら課題を見出し問題解決していく力や創造力を身につけることが重要と考えます。今以上に IT スキル修得を強化する必要はないと思えます。(企業 P)
- ・大学院教育に求めることではないかもしれませんがリベラルアーツ教育に力を入れていただきたいです。(企業 Q)
- ・学士課程で基礎的な IT スキルを身につけているならば不要です。専攻分野に限らず幅広く IT 分野の教養を持っていただきたいと思います。(企業 R)
- ・専門性に加え、柔軟な対応力・応用力を期待いたします。(企業 S)

- ・基礎的な IT スキルについては早期に身につけておいてほしい。尚、基礎スキルに加えて応用力など自ら考えて形にするための教育が重要と考えております。(企業 T)
- ・IT スキルの基礎的な教育は必要ですが、むしろ研究の進め方、考え方等の基礎素養を手厚くして頂くべきかと思えます。(企業 U)
- ・ICT 技術は日進月歩ですので、基礎的な IT スキルは学部の時など、できるだけ早い時期に習得した上で最新の技術や製品の情報を取得し、慣れ親んでいく姿勢の体得が重要と思えます。演習、レポートの形式であればある程度、効果があるように思えます。(企業 V)
- ・修士課程の教育課程化は、実施すべきではないと考えます。修士課程は、より専門的な知識・技術等を身につけるための課程であり、基礎スキルに関する教育が必要であれば、学部でのカリキュラムにて対応すべきと考えます。修士課程では、自身で考えて研究を進めるなど、自立して何かを行うという力を育成する場であるとも考えます。この観点からも、修士課程での必修科目は少なくし、学生自身に自由に研究をさせる環境を作ることも重要であると考えます。(企業 W)
- ・学生の自主努力で良いと思えます。(企業 X)

■質問 4

京都大学大学院情報学研究科では、インターンシップや学外実習を広く導入しています。これらの取り組みを、更に強化すべきでしょうか。また、企業がインターンシップで学生を受け入れる際の要望や問題点（期間、費用負担、時期、知財関係、テーマの選定、研究室の理解、されているかどうか、・・・）についてはいかがでしょうか。

(自由記述)

- ・インターンシップをはじめとした産学連携は重要だと考えております。企業 A でも 2012 年度はインターンシップを実施しておりますが、実施テーマに関する学生側のニーズをもっと得られればと感じております。(企業 A)
- ・学業に影響の少ない夏休み等を利用してインターンシップを実施することは有効であると思えます。企業としては業務に関連深い研究を実施されている研究室の学生の受入れを希望します。(企業 B)
- ・ぜひ強化して頂きたく存じます。問題点：インターンへの参加を希望しつつも、研究室との兼ね合いよりインターンに参加することができない学生が多いように思えます。(企業 C)
- ・夏のインターンシップは、関東まで足を伸ばしてほしい。そのために、交通費支給や、宿泊場所のあっせんをしてはどうか。(企業 D)
- ・インターンシップは実践的な経験を積むことや、今後の研究やキャリア形成を考える貴重な機会になると思えます。すでに広く導入されていらっしゃるの、継続いただくのがよろしいかと思えます。弊社でのインターンシップは、開発系の職種で 3～4 週間の実習プログラムのため、学生の皆様の負担が大きいかと思えますが、一定の成果を出していただくことを目的としておりますので、ご理解いただけましたら幸いです。(企業 E)
- ・京都大学からの学生を受け入れた経験はないので、他大学の例から推測します。インターンシップには受け入れ、まとめの期間が必要であり、最低 1 週間は必要です。期間が長い方が学生にも企業にも意味があるものになりますが、そうすると、弊社は主に東京にオフィスがあることもあり、滞在費等費用負担等の問題が大きくなります。また、受け入れテーマに必要なスキルや知識と、実際に学生が持っているものとの乖離をチェックし、補うような仕組みが必要かと思えます。(企業 F)
- ・将来的に企業で働くか否かにかかわらず、インターンシップや学外学習は有用であると考えます。現在弊社ではインターンシップの受入をいたしておりませんが、その実施を検討する際の問題点は「学生・企業双方に有益なプログラムを提供できるのか」という点です。就職活動のみを意識したインターンシップでは、その目的も霞んでしまい、ともすれば会社説明会の延長程度のインターンシップになっています。とはいえ、現場に任せ過ぎるのも現場の負担が増えるうえ、学生に最前線の業務を経験していただく考えると、その現場の多忙さゆえに学生への対応がおざなりになってしまうことも予想されます。そのあたりの比較衡量が課題です。(大日本スクリーン)

- ・企業への就職希望者は、学生時代から社会との接点を持って、大学での研究を進める中で、社会、企業の中における大学での研究テーマや内容がどう役立つのかを意識することが重要であると考えているのでインターンシップ等への取組みは、強化すべきと考えている。(企業G)
- ・インターンシップが採用と直結しているイメージが学生の中で根付いてしまっているように思うが、インターンシップは、あくまでも就業体験の場であり、結果的に採用となることは、考えられるが、その考えは分けてほしい。(企業H)
- ・インターンシップは良いと思います。ただし、東京での受入れを考えると、費用負担を大学でもらえると助かります。(セコム)
- ・強化すべきと感じます。より実地的な、使い易い情報システムは、使う側の状況などを思い描けなければ構築できない、と考えられますので経験の幅を広げることは有用と思われます。インターンシップの問題点は、研究室の指導教官の理解の有無によって、学生の参加の可否が決まる点です。(企業I)
- ・実体験として学生で学んでいるスキルや知識が活用できることを得るにはインターンシップ、学外実習は導入強化すべきと考える。当社は毎年テーマを公表して受け入れ募集している。情報学にフィットするテーマはここ数年はないが必要な時は募集する予定。特に問題点はなし。(企業J)
- ・企業との接点を作ることは重要だと思っています。ただ、これからは、無から有を生み出す行動力のある学生に多くなってもらいたいと考えるため、過度にルールを引いてしまうことには否定的。(企業K)
- ・インターンシップは学生の専門知識を企業が買うというモデルでは成り立たないと思います。なぜなら、学生側のスキルが十分でないことが多く実践投与までに十分な訓練期間が必要であり、長期雇用の前提がない学生に対して、そのような教育訓練を施す余裕は、企業側にないからです。したがって、企業側から見れば、あくまで、採用目的であったり、採用活動における企業との相性を見極めという場に、なると思います。そうすると、企業側もそれほど費用はかけられない。大学側の教育課程の一つとして、インターンシップを取り入れ、企業の費用負担をゼロにしてもらえると有難いです。(企業L)
- ・強化は不要と考えます。就活目的の実習であればなおさら。大学での研究、指導に時間を使うべき。(企業M)
- ・日本の学生が長期のインターンシップを体験する機会はまだまだ限られていると感じます。早くから働くことに意識できるよう、また海外の学生との競争力を保てるように、インターンシップはぜひ強化していただきたいと思います。(日本マイクロソフト)
- ・働くことの重要性を知ってもらいたいのでインターンシップは今後も強化していただきたい。特に授業期間中にも支障なくインターンシップが行なえるようにしていただくと助かります。(富士ゼロックス)
- ・今までと同様に学生に対して広く広報いただけるのであれば、特に要望はありません。(企業N)
- ・専門領域外へのチャレンジの動機付けの意味から強化して頂きたいと思います。(企業O)
- ・今後企業のグローバル化が進んでいく中、インターンシップ(就業体験)は重要なファクターとなってくるものと考えています。まだまだインターンシップの興味、関心が薄いので強化をお願いしたい。(企業P)
- ・インターンシップについては、より機会が増えることが望ましいと考えます。(企業Q)
- ・インターンシップ、学外実習については、企業での研究開発の取り組み、社会人としての一般スキルの体得などの観点で強化すべきと思います。期間としては2週間～1ヶ月以上(テーマによる)が望ましいと思います。(企業R)
- ・インターンシップ 学外実習 インターンシップは大学と企業間で協力し、強化すべきと考えます。期間：1～3ヶ月程度が必要かと考えます。時期：募集を6～7月、実習を9～2月が適当と考えます。テーマの選定：実習テーマと学生の専攻とが著しく乖離していることは避けるべきと考えます。(企業S)
- ・インターンシップ、学外学習は上記のITスキル向上の為に有用と思います。特に問題には感じていません(企業T)

■質問 5

京都大学大学院情報学研究科出身者と他大学の関連大学院出身者を比べて、何か特徴的なことはあるでしょうか。できれば、優れている面、劣っている面、両方についてお書き願います。

(自由記述)

- ・研究等の専門課程の深耕に関して優れていると感じております。また、英語力について、やはり一般的なレベルよりも高いもの、さらに高いレベルを期待したい。(企業 A)
- ・優れている面 問題の理解力、新しい技術の吸収力、文章の表現力 ・劣っている面、(個人によりますが) コミュニケーション能力。(企業 B)
- ・課題に対し、本質的な問題点を捉える力が足ているように感じております。(企業 C)
- ・優れている点：基礎的学力、地頭の良さ。劣っている点：日本語 (ロジカルな会話)、英語力。(企業 D)
- ・情報系卒業生が少ないため、特徴的な面を一概には申し上げられませんが、皆様、専攻分野のみに固執することなく、視野を広くもち製品開発に貢献していただいております。開発の分野では、担当する製品や担当する工程が変わることが多々ありますし、お客様の要望とコストの関係で最適な製品開発をしていく必要がありますので、時にはこだわりが必要ですが、時には柔軟性が必要であり、皆様バランスをもって専門分野を生かしていってほしいです。(企業 E)
- ・頭の回転や地頭の良さでは優れており、専門知識を有し、かつ自ら信じる道を行き、イノベーションを起こせる人材として期待されています。しかしながら、他者との関係構築に弱みがあり、他者を巻き込む力、他者の状況を把握し、うまくコミュニケーションを取る力で劣っており、結果的に、他大学の出身者よりも結果を生み出す力が弱いと思われます。例えば就職活動においては、知識や経験、思いはあるものの、面接で緊張したり、うまく説明したり、その場の対応が出来ずに落ちる結果となるようです。(企業 F)
- ・専門分野に対する深い見識と探究心 (優れている面) ・広い視点で、取りくむ姿勢 (劣っている面) (企業 G)
- ・具体的にこの部分においてという回答は、できないが、専門分野においては、優秀な方が多い印象を持っている。(企業 H)
- ・貴大学院の出身者は他の国立大学の出身者に比べて学識、学究的関心に於ては優れておりますが人間的魅力に於いて劣っているような気がいたします。社会に出て周囲の人から公私両面でより頼りにされる人間味があれば卓越した学識も更に生かされることになるものと思います。(サミット)
- ・優れている面：基礎能力、プログラミング能力、分析力など。劣っている面：(個人によって大きく差異はありますが) 情報発信力。(企業 I)
- ・出身者はここ数年(3年以内)2名ということで、まだ優劣の把握はできていないため、比較はできない。(企業 J)
- ・まだ出身者の人数が少なく、若いために一概には言えませんが、基礎能力が高く真面目な学生が多い印象です。反面、リーダーシップという面ではやや弱い部分がある様に見えます。(企業 K)
- ・他大学よりは全般的に優れていると思いますが、プロジェクトマネジメント等の、多人数 (他者) と関わる技術が不足がちであるという印象があります。それと、若々しさ (活気) が少ないという印象もあります。(企業 L)
- ・学力、新しいことに取り組みものにする力に優れている コミュニケーション、表現力に不十分なところがある様に思われる。(企業 M)
- ・個人々々によるため、特に特徴的である、ということはありません。(企業 N)
- ・分かりません (企業 O)
- ・大学、学科毎の人財比較は行なっていませんが理解力に優れているという意見が多く挙がってございました (企業 P)
- ・個人々の能力に自信を持っておられるのが印象的でした。(企業 Q)
- ・真面目でよく働く方が多いと思います。(企業 R)

■質問 6

一般論として、最近の新入社員の問題点としてどのようなことがあるでしょうか。

それに対して大学・大学院における教育で対応は可能でしょうか。

(自由記述)

- ・ <問題点>・自分の意見が弱く、やりたい事が企業 R 確・優等生的でスマート、失敗を恐れる <大学・大学院における教育>・受け身の講義よりも、学生が主体的に学び、議論する教育・競争環境に身を置き、個性を伸ばす教育 (企業 A)
- ・自己主張が少ない・コミュニケーション能力 (会話力) が劣る。電子メール等の利用は活発であるが日本語の表現力が弱い。(企業 B)
- ・新入社員に問題点は感じておりません。就活時に大手企業のみならず、ベンチャー・中小企業も候補となるような視野の広さを育てて頂けると幸いです。(企業 C)
- ・精神的に弱く、怒られると、すぐへこむ。(企業 D)
- ・基礎知識・スキルを保有していても、それを活用するためのコミュニケーション力が必要だと思っています。コミュニケーションは話すことばかりではなく、相手の話をよく聞くことや、調整・折衝力も必要になります。また、世界でのビジネス展開に向けて、グローバル対応力が求められます。英語力はもちろん必要ですが、日本の文化や価値観を理解することと、他国を理解するを経験できると、より良いと思います。(企業 E)
- ・一般的には、就職を一種のゴールとして考えており、試験対策のように入社試験や面接の対策を万全にして採用を勝ち取り、就職しています。その結果、入社してからの学習や行動が伴わず、積極的、主体的な活動や社会人としての対応を学ぶのにさらに時間がかかってしまっています。大学、大学院では、社会、企業に入ってから後の行動や目標も考えるような教育や事例紹介等、産学連携の教育をお願いします。(企業 F)
- ・弊社は製造業ですが、理系新入社員全般で言うと実際のものづくり経験が少ないと感じます。科学的素養の高い新入社員が増えていると感じますが、自分の手で材料を加工したり、モノを作ったりという経験が少ない新入社員も増えてきています。弊社では、修士課程修了者が実際の現場で製品の製造工程を担うことはほとんどありませんが、研究開発の現場でも、実機や実験機の試作・改造等が必要になります。メーカーへの就職を希望される学生には、その専攻を問わず、ある程度のものづくりを大学在学中に一貫して経験していただければ入社後の仕事への理解や職場への慣れがスムーズになると感じています。(企業 G)
- ・全体として優等生で与えられたテーマ遂行力は高いが、反面、自らの意志でテーマを発掘し挑戦していく姿勢が感じられない人が見受けられるので、研究テーマ遂行を通してこの観点での指導をお願いしたい。(企業 H)
- ・教科書通りの学生が多いように感じる。「特長のない」が特徴になってしまっているようにも感じる。何か自分が負けないものだったり、誇れるものを表現できるような人財になってほしい。(企業 H)
- ・あくまで一般論ですが政治、経済等社会問題に対する関心が希薄ではないかと思われまます。大学・大学院における教育で対応可能であると思えます。(企業 I)
- ・受け身が目立つと思います。積極的に自ら動く姿勢を習得させていただけると良いと思います。性格や、時代の背景もあると思いますが、ある程度教育で対応できると考えています。(企業 J)
- ・一般論(文・理問わず)としては、基礎的(幅広い)教養の低下と方法論修得の不十分さが挙げられると感じます。これは、知的応用力を支える共通の能力として必要だと考えます。学部 1・2 年生における教育の工夫が期待されると思われまます。背景には、大学教育における実践的スキルへの偏重があるように感じまます。(企業 K)
- ・競争が有る環境への適応力の低さ、マナー・エチケットの意識の低さ、社会人としての自覚の無さ(社員食堂での騒々しさなど)を感じまます。・大学教育での対応は難しく、人間性を形成する幼少時の教育の問題と考えまます。(企業 L)
- ・「～してくれる」「～してくれない」など会社に求めることが多い。学生時代に自主的、自立的に物事に取り組むことを学んできてほしい。(企業 M)
- ・コミュニケーションが苦手な学生が多い。また、エントリーシート の書き方や面接などの質問で答え(正解)を聞いてくる。大学・大学院では手を使った作業やグループでのディスカッションなど考える時間も増やしてほしい。(企業 N)

- ・1. 基礎技術の訓練。(プログラミング、数学知識、論理的ディベート力)が足りない。教育課程化で対応可能だと思われます。2. 何を考えているか分からない(はっきりものを言わない、言えない、自分も何をどうしたいのか分かっていない) 専門分野だけでなく、「哲学」の教育が必要だと思われます。人間の一生を抱括的にとらえ、思考し基本ポリシー(格闘技でいうところの「型」)を確立できる、「思考的筋力」の鍛錬が必要。(企業O)
- ・企業側の問題が大きいと思うが、即戦力指向のこて先スキルばかりで、一般教養、幅広い興味、知識に劣る様な気がする。学問、研究の基礎・心構えを養う場であって欲しい。(企業P)
- ・受け身な人が多く、社会人としての自覚が芽生えるまで時間がかかる傾向があると感じます。学生時代から一方通行の授業ではなく、ディベートやディスカッションを、多く取り入れた授業に期待します。(企業Q)
- ・就職活動の早期化等による学力低下・内向き(企業R)
- ・全員ではなく、また京都大学の学生に限りませんが、受け身であったり、やりたい業務に対するこだわりが強すぎる新人が見受けられます。まずはどんな業務も前向きに取りこんでみてほしいと思います。大学生活で本人が興味のあることを始め、様々な経験の機会があるとよいと思います。(企業S)
- ・柔軟性が不足している様な印象です。専門分野以外への興味・好奇心を持てる様豊かな学生生活を支援してあげてほしいと思います。(企業T)
- ・忍耐力(ストレス耐性化)が欠けており、回答(結果)をすぐにほしがるとの傾向がある。また安定志向が広がりグローバルで戦っていかうと考える割合が低くなっている。忍耐力について教育で対応は難しいと思うがグローバル指向の醸成などを行って頂きたい(企業U)
- ・最近の新入社員に対する懸念点は下記のようなものです。・内容より体裁を重視・上司や先輩に依存的・受身、様子見の姿勢・失敗への不安・意見の対立や自己主張がない・競争心がなく平等を求める 指示されたことはうまくこなし、周囲のメンバーともうまく仕事を進める一方、自身で考え、自ら行動するという点は弱い傾向がうかがえます。修士課程で研究を進める中でも、自ら考えて試行錯誤するような経験ができれば良いかと考えます。(企業V)
- ・おとなしすぎる傾向があります。もっと自由に考えて良いと思います。(企業X)

■質問7

京都大学大学院情報学研究科における就職サポートについて、何かご意見、ご要望があればお書き下さい。
(自由記述)

- ・特定の大手企業だけでなく、幅広い企業への就職サポートをよろしくお願い致します。ICTイノベーション等の活動は有効と思います。(企業B)
- ・いつも大変お世話になっております。今後も企業の活動やビジョンを学生に伝える機会がございましたらご案内頂けると幸いです。(イベント、Web、DM等)(企業C)
- ・有名企業だけでなく、無名でも実力のある企業に目を向けるよう伝えてほしい(企業D)
- ・特別なご要望はございません。毎年ICTイノベーション時に開催いただく企業説明会に参加させていただきありがとうございます。大手企業が多く参加されるイベントで、学生の皆様も真剣に参加されていらっしゃるの、学生の皆様とお話できるのを楽しみに参加しております。今後ともご高配賜りますようよろしくお願いいたします。(企業E)
- ・前述の通り、就職がゴールではなく、就職してから先の自身の行動や活躍をイメージできるような事例紹介や会社紹介などのサポートをお願いします。また、その手段としての就職活動に関しては、学生自身のポテンシャルを十分アピール、発揮できるような指導やサポートをして頂けるとよいと思います。そうすれば、十分な練習や対策講座を経た他大学、特に関東の大学の学生と比較して劣ることはないと思います。(企業F)
- ・いつも大変お世話になり、ありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。(企業G)
- ・コミュニケーション力を中心とした、社会人基礎力の重要性を学生に伝え指導していただきたい(企業H)
- ・教授、就職サポート関連部署の皆様には是非中小企業への関心を更にもっと強めていただきたく思います。中小企業の中にはあまり有名ではありませんがSmall Excellent Companyと呼ばれる優良企業が数多くあるものと思います。(企業I)

- ・企業説明会、産官学イベントへの同一企業3名以上参加、の条件は外してほしい。東京から、3名参加は費用的に厳しいです。(企業J)
- ・今後ともよろしく願います。(企業K)
- ・特にございません。今後ともよろしく願います。(企業L)
- ・ICTイノベーション時に会社説明会にも参加させていただき、良いアピールの場になっています。(企業M)
- ・早期からのキャリア教育に関して大学側と連携ができると嬉しく思います。(企業N)
- ・貴科にて学内セミナーを開催される際は、お声がけください。(企業O)
- ・学内セミナーは学生も参加しやすく、企業側も時間をとって業界、会社説明ができるのでありがたいです。引き続きこのような機会を与えていただけますと幸いです。(企業P)
- ・専門性にとらわれず、チャレンジ精神を發揮できる様なサポートをお願い致します。(企業Q)
- ・特にありません。今後ともよろしく願致します。(企業R)

以上で質問は終わりです。ご回答いただき誠にありがとうございました。

平成24年度 自己点検・評価報告書

教育活動

2013年3月発行

発行所 京都大学大学院 情報学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-5370 FAX 075-753-5379

印刷所 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入677-2
TEL 075-343-0006 FAX 075-341-4476

